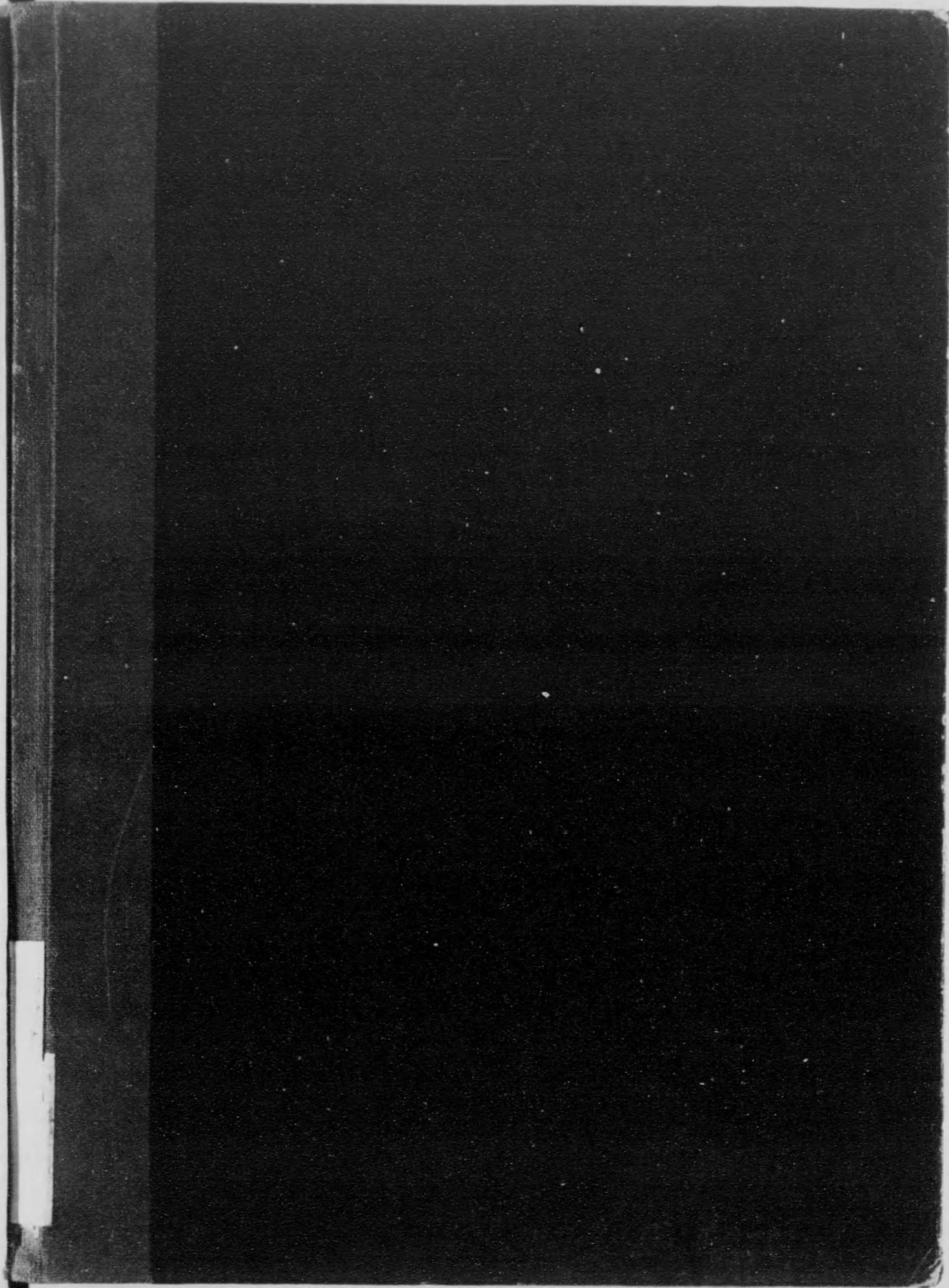
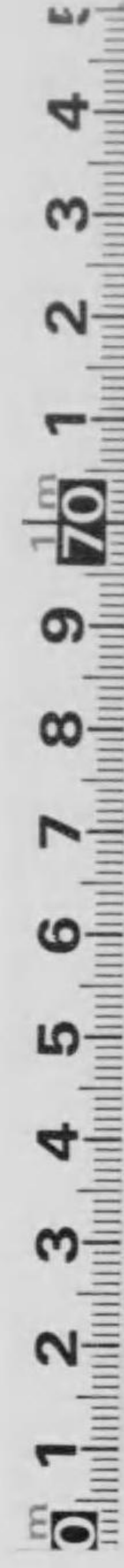




始



14.6 =

~~227~~ 451.9
F.82

14/227

外689
そ

451.9
F82

福岡縣
の
氣候と風土



緒言 (1)

第一編 氣候風土の要素

- 1 温度は高いか低いか (3)
- 2 氣候の變化は激しいか激しくないか (13)
- 3 空氣は濕つて居るか乾いて居るか (20)
- 4 雨は多いか少ないか (25)
- 5 風は強いか弱い (31)
- 6 空氣は清淨なか清淨でないか (37)
- 7 天氣は良いか悪いか (39)
- 8 井水は良か不良か (47)
- 9 土地が乾燥なか濕潤なか (51)
- 10 地方病が在るか無いか (54)
- 11 傳染病は多いか少ないか (61)
- 12 天災、地變、火災などが頻繁なか頻繁でないか (74)
- 13 上水道や下水道の設備が出来て居るか居ないか (85)
- 14 保健や衛生上の設備は整ふて居るか居ないか (88)

第二編 主要都市の氣候風土

一 北東部地方の氣候風土 (95)

- 1 門 司 (95)
- 2 小 倉 (97)
- 3 若 松 (99)
- 4 戸 畑 (101)
- 5 八 幡 (102)

二 東部地方の氣候風土 (105)

- 1 八 屋 (105)

大正
12. 6. 19
内交

2 行 橋	(106)
三 遠賀平原地方の氣候風土	(108)
1 折 尾	(109)
2 直 方	(110)
3 後 藤 寺	(112)
4 飯 塚	(115)
四 北部地方の氣候風土	(117)
1 福 岡	(118)
2 太 宰 府	(121)
3 前 原	(123)
五 筑紫平原地方の氣候風土	(125)
1 甘 木	(125)
2 吉 井	(127)
3 久 留 米	(129)
六 南部地方の氣候風土	(132)
1 福 島	(133)
2 大 川	(135)
3 柳 河	(137)
4 大 牟 田	(140)

福 岡 縣



本縣は東經百三十度二十二分より全百三十一度十一分の間、及北緯三十三度〇分より全三十三度五十八分の間に位してゐる、此經緯度は凡そ南臺灣から北樺太に至る本邦の主要地の平均經緯度に相當してゐるから、本縣の氣温も亦之に準して本邦各地の平均氣温なる約十五度に適當してゐる、然るに世界の等温線分布の状態から推算すると、地球上の平均氣温も又十五度を示してゐるから本縣の氣温は實に世界の平均氣温に等しいものと稱しても敢て不可ではない、之を以て本縣は到る處氣候が甚だ温和であつて寒暖何れにも偏らず、晴雨交々臻りて乾濕其度を失はず、天氣の變化は頗る順調であつて、強暴なる風雨の慘害を蒙ること寡く、又激烈なる震雷の猛威を逞するものも稀である、野に山に産業は豊かであつて耕して得ざる作物なく、海に川に漁業が熾んであつて需めて得ざる魚介なし、之を以て寒地より來り住する人も甚しく暑熱に苦むことなく、熱國より移り住むものも亦烈しき寒氣に悩むことはない、加之海陸交通機關は頗る能く發達して、運輸の便到る處に、拓け如何なる僻遠の地と雖も物資の需給には些の不自由を感することなく教育、衛生の機關も亦能く完備せること本邦中稀に見る處である、蓋し本縣は自然と人工とを兼ね備へた天恵多き國であると稱するも強ち誇言ではあるまい

凡そ一地方に於ける氣候風土は頗る複雑なもので、氣象要素の相互の關係に依つて其影響する處が甚しく相異なるから、單に氣象觀測の成績を羅列するのみでは其地方の氣候を審にすることは出来ない、況んや其地方の風土に至つては他の地方との比較對照に依つて始めて其良否を判定することを得べきものである、如何なる生物でも或る程度までは氣候と同化するの習性を有してゐるから、

永く同一地方に存在したものは、同種類のものでも他の地方に存在するものと較べると其性質組織に於て多少の相違は免れない、左れば或地方の風土氣候に適すると云ふも實は相對的のものであつて、其地方に特産するものが必ずしも其地方の氣候風土に最適してゐるもの計りではない、他の産業との關係上又は歴史的に其産物を要求する特種の事情が其地方に存在してゐるか爲め、傳統的の獎勵に依つて自然に進歩發達したものも寡くない

人類の氣候風土に對する關係は尙ほ一層切實なるものがある、固より健康者に在つては或る程度までは氣候と同化し、又は之に對抗して存在する可能性を有してゐるのみならず、人爲的に相當の設備を施すことが出来るものであるから極めて劣悪なる氣候を有する地方に非ざる限りは格別考慮するの必要はない、特に本縣の如き氣候の温和な地方に在つては到る處好適であつて、普通の生活を營む上に於ては殆ど不適當な處はないと云つても良い位である、然れども老幼、病者等に在つては些少なる氣候の變化も其影響する處が頗る重大であるし、又新に縣外から來住せんとする人に取つては、其地方の氣候風土の梗概を知認するの必要があるから、是等の人々の參考に資せんが爲め縣下の主要なる都市に於ける氣候風土の大要を記述することとした

然し氣象の影響は人々の境遇に依つて甚だ相異なるもので、例令は北の方に海を受けた地方の住民は一般に北風を忌むが、漁業者は却て南風を嫌ふて居る、又空氣の乾燥を貴ぶ養蠶業あれば或は濕潤なる土地を選ぶ作物もある、降雨の多きを望む企業者があると思へば、旱天を喜ぶ工業家もあつて、其要求する處は實に千差萬別であるから、是等の要求を悉く充たすことは固より不可能であるが、凡そ左の各項に就き略述し本縣各地に於ける氣候風土を比較對照して其評價を定めようと思ふ

- 1 温度は高いか低いか
- 2 氣候の變化が激しいか激しくないか
- 3 空氣は濕つてゐるか乾いてゐるか
- 4 雨は多いか寡いか
- 5 風は強いか弱いか
- 6 空氣は清淨なか清淨でないか
- 7 天氣は善いか悪いか
- 8 井水は長か不良か

- 9 土地は乾燥なか濕潤なか
- 10 地方病や風土病が有るか無いひか
- 11 傳染病が多いか寡ないか
- 12 天災、地變、火災などが頻繁なか頻繁でないか
- 13 上水道や下水道の設備が出来てゐるかゐないか
- 14 衛生上や保健上の設備が整ふてゐるかゐないか

本縣に於ては去る明治二十七年から、管内各地に氣象觀測所を設置して引續き觀測に従事し、古きは二十七八年間新しきも尙ほ十數年間の統計成績を有してゐるから、觀測所附近の氣象の概要は之を知ることが出来る、然し其觀測所の位置が人家の稠密せる市街の中央に在つて、四方梗塞せるが爲め空氣の流通悪しく、且つ周圍の物体よりの反射に依つて、實際の其地方の氣温よりは著しく高温を示し、雨量は又實際よりも著しく寡少を示してゐる處もある、或は又郊外の四方開豁なる廣き校庭内に在つて、頗る理想的の觀測をしてゐる處もあるが、果して其成績が其市の氣候風土を現はす上に於て、正鵠を得てゐるか否か多少疑問とする處があるから、已下掲ぐる處の氣象統計表には、充分に是等の關係を考慮し相當の補正を加ふるの必要がある

第一編 氣候風土の要素

I 温度は高ひか低ひか

温度の高低が其地方の氣候風土の良否を判別する最大の要素であることは今更ら贅言する迄もないことで、何人も寒暑の烈しい地方を嫌忌し、温和なる地方を冀ふは自然の人情であるが、然し之を數量的に計算して、平均温度が何度である地方が人類の生活に最も適した地方であると言ふことは稍々困難である、夫れは寒地に生れた人と、暖地に成長した人とは、天稟の體質に於て大なる相違があるから、一定の標準を定むることは無理である、然れども前述したるが如く、地球表面上の平均温度も本邦各地に於ける平均温度も共に約十五度であるから、此温度に近い本縣の如きは既に一般の上から見て、頗る好適せる温度を有する地方と稱せざるを得ない

今本縣に於ける主なる都市の平均氣温を見るに、最も高いは久留米及大川に於ける各十六度一、之に亞くは柳河及大牟田に於ける各十五度九、であつて南部

は總て十五度五已上である、之に反して最も低きは福岡及飯塚に於ける各十五度二であつて、北部は一般に十五度五已下である、但し門司及小倉は十五度七已上を示し同方面では最も高温なる地方である、即ち本縣に於ける年平均気温は最も高き地方と、最も低き地方とに於て、約一度の差があるが、平均気温に於て一度の差は決して僅少ではない、凡そ温度は垂直の方向には二百米を上る毎に約一度の下降を示すものであるから、本縣でも高峻なる山嶽地方では、同緯度の地方でも數度の低温を示せる處がある、朝倉郡小石原村の如きは海面上四百五十米に過ぎないが年平均に於て三度餘の過低を示して居る、夫れで高さに対する気温の變化から見れば一度の差は格別大きくはないが、之を水平の方向に於ける變化から見ると可なり大きくて緯度二度を距つる地方、即ち南北約五十里を離れたる兩地の標準気温の差に相當して居る、即ち久留米に於ける平均気温は鹿兒島に較べると約一度低り、最も低温なる遠賀川流域地方でも阪神地方に比敵し、名古屋よりは約半度、東京よりは約一度高い

更に各季節に就て見るに冬季は最も低温なる北部地方でも尙ほ熊本よりは稍々高く、神戸よりは〇度三、大阪よりは〇度八、東京よりは一度半高い、而して最も高温なる久留米は長崎、佐世保に比敵し神戸よりは〇度七、大阪よりは一度二高く名古屋及東京よりは約二度の高温で、冬季極めて温暖など稱せらるゝ東海道沿岸殊に沼津附近の氣候に相當して居る、如何に筑後方面の暖氣なるか、知らるゝ、又夏季に於ける平均気温は福岡附近は九州地方の孰れよりも冷氣であつて、熊本に較べると約一度低い、而して幾内、山陽、四國の各地方の内では略ぼ神戸に類似し、其他よりは概ね低温で大阪よりは〇度六、名古屋よりは〇度三低い、然れども東京に較へると一度高く京都よりは〇度三高い、夏季に於ても本縣は又暑氣の著しく強からざることが知れる、尙ほ詳細は左に掲ぐる各地の氣象表を比較對照すると其優劣が能く判るであらう

平均温度

地名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
門司	6.2	5.7	8.5	13.3	17.6	21.6	25.8	27.3	23.8	18.0	12.8	8.2	15.8
小倉	6.0	5.6	8.6	13.7	17.7	22.0	25.9	27.2	23.7	17.8	12.5	7.7	15.7
八幡橋	5.7	7.0	9.3	13.2	17.7	21.5	26.6	27.6	23.3	18.1	13.7	9.1	16.1
行橋	5.4	5.1	8.2	12.9	17.4	21.7	25.9	26.9	23.1	17.2	11.9	7.2	15.2
後藤寺	5.1	5.7	8.7	14.0	18.4	22.8	27.4	27.8	24.1	17.6	12.2	6.9	15.9
直方	5.2	5.2	8.3	13.5	17.8	22.1	26.2	27.3	23.4	17.2	11.9	7.1	15.4
飯塚	5.2	5.0	8.2	13.5	17.7	21.7	25.9	27.1	22.9	16.8	11.4	6.9	15.2
芦屋	5.7	5.6	8.5	13.4	17.7	21.6	25.9	27.1	23.4	17.4	12.2	7.5	15.5
福岡	5.4	5.2	8.1	13.0	17.1	21.7	26.0	26.7	22.8	16.7	11.7	7.1	15.2
前原	6.0	5.7	8.7	13.7	17.9	22.0	26.2	27.1	23.4	17.5	12.5	7.3	15.7
二日市	5.3	5.3	8.6	13.7	18.0	22.3	26.1	27.2	23.3	17.1	11.9	7.1	15.5
甘木	5.3	5.2	8.5	13.9	17.9	22.1	26.2	27.3	23.3	17.3	11.8	6.8	15.5
吉井	5.4	5.5	9.0	14.3	18.3	22.5	26.4	27.3	23.5	17.5	12.0	7.1	15.7
久留米	5.3	5.8	9.3	14.6	18.8	22.8	26.7	27.8	24.1	18.1	12.5	7.5	16.1
福島	5.6	5.5	8.8	14.2	18.2	22.5	26.3	27.2	23.6	17.5	12.2	7.0	15.7
榎津	5.8	5.8	8.8	14.6	18.8	22.7	26.6	27.7	24.3	18.0	12.4	7.5	16.1
柳河	5.5	5.5	9.3	14.6	18.5	22.5	26.5	27.5	24.0	17.8	12.0	7.0	15.9
大牟田	5.5	5.6	9.2	14.2	18.2	22.3	26.6	27.6	24.0	18.0	12.3	7.2	15.9

最高気温の平均

地名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
門司	9.5	9.0	12.4	17.9	22.5	25.7	29.7	31.4	27.7	22.3	16.6	11.4	19.7
小倉	9.8	9.4	13.2	18.6	22.9	26.0	29.6	31.2	27.8	22.4	17.1	11.6	20.0
八幡橋	8.3	9.8	12.7	18.4	21.5	24.2	29.8	30.7	26.7	21.4	16.9	11.6	19.3
行橋	9.5	9.4	12.8	17.5	22.6	26.0	29.7	30.9	27.6	22.4	17.0	11.6	19.8
後藤寺	9.5	10.3	13.8	19.7	24.7	27.7	32.3	33.0	29.0	23.1	17.5	11.7	21.6
直方	9.7	9.7	13.1	19.2	23.6	26.8	30.3	31.8	28.0	22.6	17.3	11.7	20.3
飯塚	9.7	9.7	13.1	19.3	23.7	26.4	30.1	31.7	27.8	22.6	16.9	11.8	20.2
芦屋	9.4	9.4	12.7	18.4	22.7	25.8	29.8	31.2	27.5	22.1	16.9	11.2	19.8
福岡	9.7	9.6	13.0	18.3	22.7	26.0	29.7	31.0	27.3	22.3	17.0	11.6	19.8
前原	9.9	9.9	13.1	18.8	23.4	26.9	30.3	31.9	27.8	22.5	17.3	11.7	20.3
二日市	9.3	9.6	13.5	19.0	23.7	26.8	30.3	31.6	28.1	22.6	17.6	11.4	20.3
甘木	9.5	9.7	13.3	19.7	23.8	27.0	30.6	32.0	28.1	22.9	17.1	11.2	20.4
吉井	9.7	10.0	13.8	19.9	24.3	27.2	30.7	31.9	28.0	22.7	17.2	11.5	20.5
久留米	10.4	10.4	14.3	20.1	24.6	27.2	30.7	32.2	28.7	23.7	17.9	12.1	21.0
福島	10.2	10.4	14.0	19.9	24.1	27.1	30.4	32.0	28.6	23.3	17.7	12.0	20.8
榎津	10.5	10.5	14.4	20.4	24.6	27.2	30.6	32.5	29.2	23.6	18.0	12.0	21.2
柳河	10.1	10.1	14.1	20.0	23.9	26.8	30.7	32.0	28.5	22.9	17.2	11.6	20.7
大牟田	10.2	10.5	14.2	20.0	24.3	27.2	30.8	32.3	28.8	23.2	17.5	12.0	20.9

(6)

最高気温の極

Table of maximum temperature extremes with columns for month and years 1-12 and annual average. Locations include 門司, 小倉, 八幡, etc.

最低気温の平均

Table of average minimum temperatures with columns for month and years 1-12 and annual average. Locations include 門司, 小倉, 八幡, etc.

(7)

最低気温の極

Table of minimum temperature extremes with columns for month and years 1-12 and annual average. Locations include 門司, 小倉, 八幡, etc.

気温の月中最低及年中最低の平均

Table of monthly and annual average minimum temperatures with columns for month and years 1-12 and annual average. Locations include 門司, 小倉, 八幡, etc.

気温の月中最高及年中最高の平均

Table with 14 columns (Month 1-12, Year) and 25 rows of locations. Locations include 門司, 小倉, 八幡, 行橋, 後藤寺, 直方, 飯塚, 芦屋, 福岡, 前原, 二日市, 甘木, 吉井, 久留米, 福島, 榎津, 柳河, 大牟田.

更に本邦の重要都市に於ける平均気温を見るに、緯度の高くなるに従ひ漸次下降することは勿論であるが、地勢や海流の影響に依つて等緯度の地点でも一二度の差のあることは珍らしくない、例令は石巻と新潟とは緯度に於ては大差がないが、平均気温に於ては二度の差がある、之れは日本海岸の方は暖流が流れて居るが、大平洋沿岸は寒流に洗はれて居るからである、各季節に就て較べると、更に著しい相違がある、例令は長崎は冬季温暖であるが、熊本は寒冷で、其差は十二月に於て一度六、一月に於て一度二である、夏季は之と反対で、五月から九月までは熊本の方が高く、特に六月は一度六の高温である、是等は地勢の然らしむる處である

最高気温の平均を見ると、臺灣琉球及滿洲では七月に於て最高が現はれ、其他の地方では、八月に於て最高が現はれて居る、此七八月の差は南部では一度に足りないが、北部に至るに従ひ次第に増大して、北海道では三度に及んで居る又平均最高が三十度以上を示すは東京或は金澤巴南である、即ち臺灣は三十三度であるが、九州は熊本を除くの外は三十一度以下である、近畿地方は割合に高く京都、大阪は共に三十二度を超へ九州よりも却て高温である、最低気温の平均

は暖地と寒地とは著しき相違で一、二月の平均が氷點以下に降るのは下關巴南では只熊本丈けである、夫より巴北は神戸大阪を除くの外は、總て氷點以下を示して居る、特に京都は頗る低温で、一、二月は氷點以下二度以上を示し、東京、新潟などよりも一層寒い、樺太、滿洲は一、二月の平均気温が氷點下十五六度乃至十八九度に及んで居る

平均気温 (最高最低気温ノ平均) 本邦重要都市

Table with 14 columns (Month 1-12, Year) and 25 rows of locations. Locations include 臺北, 那覇, 鹿児島, 熊本, 長崎, 福岡, 下關, 廣島, 松山, 岡山, 神戶, 大阪, 京都, 名古屋, 東京, 金澤, 新潟, 石巻, 函館, 大泊, 釜山, 京城, 旅順, 奉天.

更に月中の最高極の平均を見ると、七、八兩月は各地概ね三十度を超へて居るが、樺太は二十五度に止まつて居る然れども奉天は三十三度九で九州よりも高い、一、二兩月は臺灣、琉球を除くの外は二十度以下であるが、北海道樺太及滿洲は十度以下である、又最低極の平均は夏季には餘り違がなく、七八兩月は九州巴北は概ね二十度乃至十五度であるが、樺太のみは十度以下である、然れども冬季は甚しき相違で、一、二兩月に於て氷點以下に落ちないは只臺灣及琉球のみで、九州中國は概ね氷點下二三度であるが、熊本は氷點下六度巴上京都は

氷點下七度已上である、又東京已北は大概氷點下五度已上であるが、内陸では十度に及ぶ處もある、北海道は同十度已上、樺太は同二十五度已上、滿洲は同二十八度已上であつて較差が頗る大きく氣候の變化が著しい

今各都市の月別氣温表を掲げると左の通りである

最高氣温の平均 (其二) 本邦主要都市

Table with 14 columns (Month 1-12, Year) and 20 rows of cities including 臺北, 那霸, 鹿島, 熊本, 長崎, 福岡, 下關, 廣島, 松山, 岡山, 神戸, 大阪, 京都, 名古屋, 東京, 金澤, 新潟, 石巻, 函館, 大泊, 釜山, 京城, 旅順, 奉天.

最低氣温の平均 (其二) 本邦主要都市

Table with 14 columns (Month 1-12, Year) and 20 rows of cities including 臺北, 那霸, 鹿島, 熊本, 長崎, 福岡, 下關, 廣島, 松山, 岡山, 神戸, 大阪, 京都, 名古屋, 東京, 金澤, 新潟, 石巻, 函館, 大泊, 釜山, 京城, 旅順, 奉天.

気温の月中最高及年中最高の平均 本邦重要都市

地名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
臺北	26.7	26.5	29.5	32.0	33.1	34.9	35.5	35.4	34.0	32.4	30.3	27.6	36.1
那覇	24.8	24.7	26.2	28.6	30.2	32.2	33.4	33.2	32.5	31.0	28.8	25.8	33.7
鹿児島	18.5	18.4	22.0	24.9	27.5	29.8	33.0	33.3	31.9	28.0	24.4	20.3	33.6
熊本	18.0	18.3	22.3	26.5	29.7	31.7	34.8	35.0	33.6	28.6	24.6	19.8	35.5
長崎	17.2	16.9	20.5	24.0	27.3	29.9	33.3	33.7	31.9	27.1	23.1	18.9	34.2
福岡	16.6	16.8	20.9	25.2	28.4	31.2	33.8	34.5	32.2	27.4	23.1	18.3	34.7
下関	14.4	14.3	18.7	22.5	25.8	28.8	32.2	33.2	31.0	26.1	21.7	17.0	33.4
広島	14.8	14.7	19.4	23.5	26.9	29.6	33.7	34.4	32.2	26.8	22.0	17.2	34.8
松山	16.1	15.6	20.3	24.2	27.4	31.3	33.8	34.4	32.6	27.5	23.2	18.5	34.5
岡山	14.4	14.3	19.3	23.8	27.7	30.5	33.7	34.1	32.1	26.3	22.1	16.9	34.2
神戸	15.1	14.9	20.0	23.5	27.5	30.1	34.1	34.9	32.5	26.6	22.3	17.6	35.3
大阪	13.9	14.7	19.9	23.9	27.7	30.7	34.2	35.3	32.9	27.1	22.5	17.1	35.5
京都	14.3	15.7	20.7	25.3	29.1	31.4	34.5	35.3	33.1	27.5	22.7	17.2	35.6
名古屋	14.3	15.3	20.2	24.6	28.6	31.5	34.5	35.0	32.7	26.9	22.6	16.8	35.4
東京	15.4	15.7	20.1	24.1	26.9	30.1	32.6	33.4	31.3	26.1	22.0	17.7	33.8
金澤	13.0	13.6	20.4	25.0	28.2	30.2	33.2	34.3	32.6	26.4	22.0	16.8	34.8
新潟	9.7	10.3	17.7	24.3	27.4	29.9	33.1	34.6	32.0	25.0	20.3	14.4	35.1
石巻	9.7	10.4	15.1	20.3	23.7	26.6	30.3	30.4	28.3	23.0	18.6	13.3	31.2
函館	7.0	7.1	11.3	17.2	21.7	24.1	28.0	29.7	26.9	21.9	17.1	11.1	30.0
大泊	0.4	0.6	3.7	10.3	17.0	20.1	23.8	25.3	22.0	16.7	10.5	2.3	25.6
釜山	13.7	13.2	16.9	20.7	25.5	27.1	31.2	32.0	29.0	24.8	20.5	14.9	32.3
京城	8.3	12.4	17.5	24.0	29.4	31.4	32.9	33.9	31.1	25.9	17.7	11.4	34.2
旅順	6.9	7.3	13.4	20.9	26.5	29.9	31.9	31.2	28.7	24.6	18.3	10.3	32.3
奉天	3.5	6.1	14.5	23.8	30.5	33.8	33.9	33.6	29.7	24.9	16.6	5.2	34.8

気温の月中最低及年中最低の平均 本邦主要都市

地名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
臺北	8.0	6.7	8.9	11.5	15.7	19.4	22.5	22.0	19.2	15.6	11.5	8.1	5.8
那覇	8.9	8.4	9.7	12.8	15.5	19.1	22.6	22.8	20.9	17.4	13.7	10.3	7.8
鹿児島	-2.3	-2.4	0.0	5.1	9.4	14.4	19.3	20.4	16.0	9.9	3.1	-0.5	-3.4
熊本	-6.4	-3.1	-3.7	0.6	5.2	11.9	17.7	18.8	12.4	4.7	-1.4	-4.8	-7.0
長崎	-2.7	-2.9	-0.3	4.3	8.7	13.8	18.4	20.5	15.2	9.1	3.2	-0.4	-3.0
下関	-2.1	-2.5	0.2	4.6	9.2	14.1	18.1	20.6	15.7	10.3	4.2	0.6	-3.4
福岡	-3.2	-3.5	-1.9	0.5	4.5	10.8	17.2	18.8	11.8	5.1	0.7	-1.7	-3.8
広島	-4.3	-4.5	-2.7	1.3	5.9	11.9	17.2	19.5	13.0	6.2	0.6	-2.5	-5.4
松山	-4.0	-4.6	-3.0	0.7	5.0	11.6	17.5	18.7	12.4	5.7	0.7	-2.3	-5.0
岡山	-4.4	-4.9	-3.0	0.7	5.6	11.6	17.1	19.5	12.9	5.7	0.1	-3.1	-5.3
神戸	-3.2	-3.6	-1.9	1.6	7.0	13.0	17.3	19.6	14.2	8.3	2.5	-1.4	-4.1
大阪	-3.4	-3.8	-2.2	1.8	6.5	12.4	17.9	19.9	13.8	6.5	1.3	-2.1	-4.1
京都	-7.4	-7.6	-5.6	-1.9	2.5	8.6	14.7	16.6	10.6	2.9	-2.2	-5.8	-8.4
名古屋	-5.2	-5.5	-3.2	1.2	5.9	11.9	17.7	19.6	13.6	5.8	0.0	-3.9	-6.2
東京	-5.5	-5.1	-2.5	1.6	6.2	12.3	16.1	18.5	13.3	6.3	0.3	-3.9	-6.2
金澤	-4.8	-5.1	-3.4	0.1	4.1	10.2	15.0	17.8	11.8	5.7	0.9	-2.6	-5.9
新潟	-5.5	-5.4	-3.0	0.7	5.5	10.8	15.7	17.9	11.8	6.2	1.1	-2.6	-6.5
石巻	-9.1	-8.3	-5.5	-0.9	3.4	9.4	13.4	15.8	9.6	2.8	-1.8	-5.6	-9.7
函館	-15.5	-15.3	-11.2	-4.0	-0.3	4.9	9.4	11.9	4.9	-0.9	-5.7	-12.9	-17.1
大泊	-25.8	-22.8	-18.8	-10.4	-3.3	0.9	5.3	7.8	2.2	-5.5	-13.6	-20.1	-26.0
釜山	-8.7	-7.6	-3.7	2.3	8.2	12.1	16.4	18.7	13.8	6.1	-1.7	-6.5	-10.0
京城	-18.2	-13.5	-8.5	-0.7	4.8	12.7	16.2	17.1	9.1	-0.4	-7.4	-14.7	-19.0
旅順	-15.6	-14.1	-8.0	-1.4	6.0	12.0	16.9	17.1	11.1	3.3	-7.1	-12.9	-16.8
奉天	-28.6	-27.6	-16.9	-7.5	1.0	9.3	15.1	12.7	3.5	-5.2	-17.0	-24.2	-30.0

2 気候の変化は激しいか激しくないか

各地に於ける気候の変化を知るには主として気温の変化に依るべきものであつて、如何に高温なる地方でも其変化の激しき處は決して気候の良好なる土地とは言へない、凡そ生物は何に依らず相當の慣性を有するものであるから、熱帯地方に住するものも、寒帯地方に棲むものも、其土地に住み馴れさへすれば格別の苦痛を感ぜざるのみか、健康上にも何等の障害を起すことはない、然し温帯地方でも急劇に温度が変化すると、健康体の人でも屢々異和を感ずることがある、例令は冬季温暖なる部屋から俄に室外に出て寒冷なる外氣に觸れると、一時に血液の循環に變調を來して往々卒倒するものがある、又富嶽の如き海拔四千米もある高山を跋涉する場合に、一氣に山頂を極めんとすると血氣の青年でも往々頭痛眩暈を起し稀には昏倒するものがある、一夜山中に假泊して宜し

く山氣に觸るべしと言ふが如きも、之れ畢竟慣性を養ふ一手段である、近時飛行界の發達に伴れ偶々墜落等の不祥事を演出するは氣候の激變の爲めに起りたる操縦者の心理状態の變化に原因するものであるとの説さへ唱導せらるゝに至つた、是等は急劇なる氣候の變化の爲め人體の或る部分が弾性の極限を超過したより起つたものであるから、我々は此弾性力の増進を圖ることか保健上最も大切なことである

固より弾性は人々の體質に依つて相異なつて居るけれども、適當の鍊磨を加へると或る程度までは弾性を増進せしむることが出来る、彼の薄着の習慣を爲せる兒童が却て感冒に罹ることの寡ないは自然的に皮膚を鍊磨して細胞組織を變化し氣候の激變に際しても熱の發散を加減することを得るが爲めであつて、人體に於ける弾性力増進の結果に外ならない、兎に角氣候の變化の人體に及ぼす影響は頗る重大であつて、四五月頃又は十、十一月頃の氣候の最も良好なる時期に於て、血管系統に屬する疾患等の頻發するは畢竟氣候の交替期に當り、氣温の較差大にして血壓の變化が著るしきが爲めであらう、之を以て氣候の良否を論ずるには氣温の高低よりは、却て其較差の大小、緩急等を深く考究せなければならぬ

本邦は四面海を圍らせる島國であるから、著しく海洋氣象の支配を享け、沿海地方は一般に氣候が温和であつて急激なる變化は寡なく、四季の循環も極めて順調であつて保健上最も良好なる氣候を有する地方であることは一般に認められて居る處であるが、又一方から考へると斯の如き温和な氣候に慣れた國民は氣候の變化に耐ゆるの弾性力が微弱であると言はねばならぬ、其上日本海に面する地方は支那大陸の影響を享けて冬季の氣候は格別温和ではない、一年中只七、八、九の三ヶ月を除くの外は一日の最大較差は二十度を超へて居る、其月の絶對較差に至つては三十度内外に及んでゐる、蓋し一日の較差二十度と云へは平均に於て一時間に約一度の變化を爲す割合である、然るに前にも述べたるが如く、氣温の垂直の變化は二百米毎に約一度の割合を以て降るから、二十度の變化と言へば平地と四千米の山頂に於ける氣温との差に相當する、即ち一日の間に四千米の高山に攀登したる場合に等しき氣候の變化に遭遇したことになるから、人體の諸機能に顯著なる影響を與ふるは當然のことである、今本縣各地に於ける一日中若くは一月中に於ける氣温の較差又は其變化に就きて略述すると左の通りである

氣温一日中の平均較差即ち最高氣温と最低氣温との差の平均は次表に掲ぐるが如く、氣候の最も可良なる晩春五月の頃に於て最も大きく、各地概ね十一度を超ゆるが、只門司のみは九度六である、之に亞くは四月及十月であつて各地概ね十度五内外である、凡そ四、五兩月は天氣が晴朗であつて百花滿開の好季節で又十、十一月も空氣が清澄で所謂仲秋月を賞する時季で、共に暑くなく寒くなく強健なるものも羸弱なるものも皆健康を増進すべき時なるに、何ぞ知らん此時季が一年中に於て、氣温の變化の最も大なる時季で晝夜の變化などは特に大きい、即ち日中は最高氣温が二十五六度に昇り、時としては可なりの暑熱を感ずることもあれば、夜間は又氣温が零度近くに急降して偶には結霜を見ることもある、斯の如き急變あるが爲めに、日中の暖氣に伴れ幾分弛緩して居る皮膚が、急に緊縮せんとして其調節を失し遂に感冒等に胃さるゝに至るのである此關係は只に季節的變化の上に於て見るのみではなく、地理的變化の上に於ても明に看取することが出来る、即ち氣温の較差は寒冷なる地方又は酷熱なる地方よりも、却て温暖なる地方に於て大きい、北海道や樺太の如き寒國では一日の平均較差は七度内外で、臺灣の如き亞熱國では六度内外であるに九州では九度已上に及んで居る、更に本縣内に就て見るに地形的變化は別として南部は一般に北部より高温なる換りに氣温の較差は南部の方が遙に大きい、八幡の如きは年平均六度二、門司は七度八なるに福島は十度二、大川、銀水は十度一を示して居る、尤も八幡及門司は海岸に近い土地であるから、福島、大川等に比較するは穩當ではないが、其他の地方を對比するも南部地方に於て氣温の較差の大なることは否定すべからざる事實である

之に反して較差の最も小なる月は七月であつて各處八度内外に止まつて居る、但し同月でも北部は七度半内外であるが、南部は八度已上で特に其内陸では九度を超へた處もある、之に亞くは一月であつて、各地概ね八度半内外であるが矢張北部は小さく八度已下を示し、南部は大きく九度已上を示した處がある、更に之に亞くは十二月及二月である、斯の如く較差の最も小なる月は炎暑焼くが如き盛夏七八月の頃か、又は凜烈肌を劈くが如き嚴冬一、二月の候であるのは頗る造化の妙を得たる處であつて、若し之れが冬季に於て四、五月頃の如き大なる氣温の較差を現はし氣候の變化が激しかつたならば、保健上容易ならざる障害を來すであらう、元來氣温の變化は、地勢上の關係に依つて著き差違あるは當然のことであるが、又觀測所の位置に依つても大差あるを免れない、今各地

に就て見るに門司及八幡に於ける気温の變化の小なるは全く地勢上の關係で、門司は遠く突出せる企救半島の一角に位置し、八幡は觀測所が海岸に極めて接近した處に存在して居るから共に海洋氣象の影響を享けるからである、夫れで門司は之を以て市全体の気温の變化を表現するものと考へても格別の不都合はないが、八幡は只海岸地方の一部の氣象を代表したもので、之を以て市全体を推すことは少し無理である、小倉は之に亞ひて気温の變化の小なる地方であるが、同市は門司の如く背後に高峻なる山嶽が圍擁して居るではなく、東南部は開放せられて内海方面への通路に當つて居るから、一般に北西風が強く気温の變化も亦稍々大きいのである

東部地方は内海の一部に屬して居るから、氣候は温和である筈であるが、行橋は稍々海岸を遠ざかつて内陸に位置して居るから、此邊は尙ほ北西の寒風が山嶽を超へて侵入して來るから、風も強く温度も低い、夫れで気温の較差も小倉より大きく平均九度一を示して居るが、南部に行くに従ひ漸次に温和である之に反し遠賀川流域地方に至つては、気温の較差頗る大きく、只に一日中の平均較差が大なるのみならず、一年中の較差も亦甚大である、即ち夏季に於て異常の高温を示すことあれば、冬季に於ては又遠例の低温を現はすことがある、之れ同地は多小盆地地形を爲して居るから、四季を通して風が弱い、夫れで夏季には灼熱せられたる強き日射の爲め気温が激昇して最高温度が三十九度にも昇つたことがある、冬季は又寒冷なる上層氣流の沈滞に依つて一時的に非常なる低温を現はし、氷點下十度にも降つたことがあつて、氣候の變化が甚だ不規則である、但し後藤寺の觀測は町の中央なる田川礦業所構内に在つて、周圍は建物密集し四面梗塞して居るから、多少気温も高く較差も大き過ぎる様に考へられるが、極めて適當なる觀測地である、飯塚に於ける気温の較差も著しく大きく年平均十度を超へて居るを以て見ると遠賀流域地方は一体に較差が甚だ大きい筑紫平原地方も較差の大なる點に於ては敢て遠賀川流域地方に譲らない、四、五兩月の如きは十一度を超へ、最も小なる七月に於ても八度五以上である、北部地方は之に較べると稍々小さく、特に海岸地方では年平均が九度以下を示す處があるが、福岡は最も大きく九度五である、南部筑後方面に於て一般に較差の大なることは前述した處であるが、特に内陸なる福島は本縣中でも最大較差を現はす處であつて、年平均が十度二に及んで居る、其他榎津、銀水の如きは孰れも十度を超へて居る、只四ツ山觀測所のみは三池築港内防波堤の上に在つ

て脚下を海水が洗つて居るから、全く海洋氣象の影響を受けて南部地方なるに拘はらず較差が甚だ小さく、年平均は纔に八度二を示すに過ぎない之を要するに本縣に於ける気温の較差は北部及東部に小さく南部及中部に大きい、然し幅員僅々三百方里餘に過ぎない一地方であるから、地理的の關係よりは寧ろ地勢上の支配を享けて居ることが多い、例令ば背後に山を負ふて居るとか直接に海洋に面して居るとか云ふ事に依つて甚しく相異なるものであるから氣候の變化は各都市に就いて別々に調査しなくては其優劣は容易に判らない、一體平坦部に於ける気温の較差は土地に依つて著しき相違があるが、海面上四五百米已上の高地になると、其變化は極めて小さいものである、朝倉郡小石原村は海面上四百五十米に過ぎない山地であるけれども、年平均較差は纔に入度であつて、五月に於ける最大較差も十度に止まつて居る、丁度臨海地方の較差に等しく、内陸の甘木、飯塚などに較べると二度餘も小さい、且つ其の變化が規則正しくして急變する様なことは稀である、此點から見ると高山生活は健康上にも大變善く、避暑地としては海濱よりも却つて優つて居る今本縣各地に於ける一日中の平均較差を掲げると次の如くである

気温一日中の平均較差

地名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
門司	6.6	6.6	7.6	8.5	9.6	8.1	7.7	8.3	7.9	8.5	7.7	6.4	7.8
小倉	7.6	7.8	9.2	10.0	10.5	8.0	7.4	8.4	8.3	9.9	9.1	7.8	8.7
八幡	5.1	6.1	6.9	7.7	7.5	5.4	6.5	6.2	5.8	6.6	6.4	5.0	6.2
行橋	8.3	8.6	9.4	10.1	10.5	8.8	7.6	8.1	9.1	10.4	10.1	8.8	9.1
後藤寺	8.9	9.2	10.5	11.6	12.9	9.9	9.8	10.3	8.9	11.1	10.8	9.4	10.3
直方	8.9	9.0	8.8	10.4	11.5	9.5	8.1	8.4	8.8	11.0	10.8	9.1	9.5
飯塚	9.1	9.4	9.9	11.4	12.0	9.5	8.4	9.3	10.0	11.7	11.0	9.6	10.1
芦屋	7.4	7.5	8.4	10.1	10.0	8.3	7.7	8.4	8.3	9.3	9.4	7.5	8.5
福岡	8.7	8.8	9.6	10.6	11.1	8.9	7.7	8.5	8.8	11.2	10.5	8.9	9.5
前原	8.1	8.3	8.8	10.0	11.0	8.9	8.2	8.3	8.9	9.9	9.6	8.1	9.0
二日市	8.1	8.8	9.4	10.6	11.4	9.1	8.4	8.7	9.4	10.9	10.1	8.6	9.4
甘木	8.3	9.1	9.8	11.5	11.7	9.7	8.7	9.4	9.6	11.2	10.5	9.0	9.9
吉井	8.6	9.0	9.6	11.2	11.9	9.4	8.6	9.3	9.1	10.4	10.3	8.7	9.7
久留米	9.0	9.3	10.0	11.0	11.7	8.8	8.0	8.5	9.1	11.1	10.6	9.3	9.7
福島	9.3	9.7	10.3	11.4	11.9	9.3	8.3	9.7	9.9	11.3	11.1	9.6	10.2
榎津	9.3	9.5	10.2	11.5	11.6	9.0	8.1	9.6	9.8	11.3	11.4	9.7	10.1
柳河	9.3	9.3	9.8	10.9	10.8	8.7	8.5	8.9	9.1	10.2	10.4	9.3	9.6
大牟田	8.2	8.3	8.3	9.0	9.5	6.1	7.1	7.9	7.9	8.8	9.1	8.4	8.2

次に本邦の主要都市に於ける平均較差を見るに、内陸と海岸地とに於て著しき差異があるが、緯度に依つても大なる違いがある、即ち臺灣は年平均が七度餘りであるが六、七、八の三ヶ月が最大で二月が最小である、然るに琉球は之と異なり十月が最大で六月が最小である、之れ全地已北は梅雨の影響を享けることが甚大であるから、六月は曇雨天が多く気温の變化が小さい、九州は一體に十月と五月に於て較差の大なることは福岡と同様であるが、其中十月の方の大なる處と五月の方の大なる處との別がある、熊本は多少内陸に在るが爲め較差が頗る大で、年平均が十一度一に及んで居る、之に反し下關及長崎は海岸地であつて、且つ高臺であるから気温の較差が小さい、中國より近畿地方に亘りては十月より十一月の方が較差が大である、神戸は瀬戸内海に面して居るから一般に較差が小さく年平均は八度九である、然れども京都は山間地方であるか

ら、較差が大きく、全月を通じて十度已上を示し、特に四、五及十一月は十三度を超へて居る、太平洋沿岸は冬季の天氣が非常に良好であつて、晝は温度が高いが、夜は著しく低落するから、冬季は較差が大であるが、春夏の候に於ては割合に小さい、東京は年平均八度七であるが、名古屋は之より稍々大きく九度八を示して居る、日本海方面も冬季の天氣は悪いが、較差の比較的に小さい東北地方より北海道に亘りては高緯度に進むに従ひ遞減して居るが、最大は矢張り五月十月である、朝鮮も海岸地方は較差が小さいが、内陸に入るに従ひて漸次に増大し、奉天に於ては年平均十二度二を示し、春季四、五月頃は十三度已上に及び、全國中の最大較差を示して居る、詳細は左表に示すが如し

気温一日中の平均較差 (其二) 本邦主要都市

地名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
臺北	6.8	6.4	6.8	7.6	7.8	8.7	8.8	8.7	8.2	7.7	6.6	6.5	7.6
那覇	6.4	6.0	6.2	6.4	6.2	5.9	6.3	6.3	6.4	6.6	6.1	6.4	6.3
臺北	8.5	8.5	8.8	8.4	8.5	7.0	7.1	7.6	7.3	8.3	9.2	9.0	8.2
熊本	11.3	11.2	11.6	12.2	12.3	9.4	9.1	10.1	10.2	12.2	12.9	11.7	11.1
長崎	7.9	7.9	8.5	8.7	8.8	5.4	7.0	7.7	7.7	8.4	8.4	7.5	7.9
福岡	8.8	8.8	9.7	10.7	11.1	8.8	7.9	8.7	9.0	11.5	10.7	9.1	9.6
下關	5.9	6.2	6.8	7.2	7.3	6.4	6.2	6.7	6.6	7.1	6.7	6.0	6.6
廣島	9.1	9.3	10.0	10.2	10.3	8.9	7.8	8.7	8.8	10.5	10.7	9.7	9.5
松山	9.7	9.7	10.3	11.2	11.4	9.4	8.6	9.5	9.5	11.2	11.1	10.0	10.1
岡山	9.0	9.1	9.8	10.3	10.5	8.5	7.8	8.4	8.2	10.0	10.8	9.7	9.3
神戸	8.1	8.6	9.2	9.7	9.6	8.2	7.9	8.8	8.1	8.3	8.5	8.3	8.5
大阪	8.5	8.7	9.4	10.1	10.0	8.4	7.8	8.7	8.6	9.8	10.1	9.2	9.1
京都	11.2	11.6	12.5	13.1	13.1	10.7	10.0	10.8	10.5	12.4	13.2	12.3	11.8
名古屋	9.3	9.8	10.4	10.7	10.7	8.9	8.5	8.8	8.7	10.1	10.9	9.9	9.8
東京	9.4	9.5	9.5	9.3	9.0	7.5	5.9	7.7	7.1	8.2	9.6	10.3	8.7
金澤	6.8	7.4	8.7	10.2	10.1	8.6	8.0	9.0	8.8	9.4	8.9	7.4	8.6
新潟	5.5	6.2	7.6	8.9	8.8	7.7	7.1	7.8	7.8	7.9	7.4	6.1	7.4
石巻	7.1	7.5	7.9	8.5	8.0	6.6	5.9	5.2	6.7	8.4	8.8	7.5	7.4
函館	8.1	8.6	8.2	9.5	9.4	7.8	7.1	7.7	9.5	11.1	9.0	7.6	8.6
大泊	9.3	9.4	8.3	7.3	8.3	7.9	7.8	7.2	8.2	9.0	7.4	7.9	8.1
釜山	1.8	8.1	8.3	7.8	7.8	6.4	5.5	6.2	6.8	8.4	8.5	8.2	7.5
京城	9.6	9.3	9.8	11.2	11.5	9.7	7.8	8.6	10.5	11.7	10.5	9.2	10.0
旅順	1.8	7.7	7.6	9.2	9.1	8.1	6.6	6.6	7.8	8.6	8.6	8.2	8.0
奉天	12.6	13.6	11.2	13.3	13.8	12.4	10.0	10.4	13.0	12.6	11.0	12.3	12.2

3 空気は濕つて居るか乾いて居るか

空気の乾濕は人類の生存上に重大なる關係を有して居るから、氣候風土を論ずる上には極めて大切な一要素であるが、果して幾何程度の濕度が必要であるかは事業の性質に依つて夫々相異なつて居るから、一概には言へない、例令ば健康體の人には何%の濕度が保健上最も好適であるか、病弱な人には何%已下の濕度は不可であるかと云ふが如く、或は又養蠶業や製絲業には成べく濕度の小なるを貴ぶが、茶樹の栽培には却つて多濕なる氣候を喜ぶと云ふが如く、濕度の大小及其變化は夫々の境遇に依つて相異なるものであるから、一々之れを定めることは困難である、夫れで此處には只本縣に於ける濕度分布の大要を述ぶるに止める

元來空氣中には常に多少の水分を含有して居るが、其含有し得る水分の量は溫度に依つて異なるもので、空氣は溫度が高ければ高い程水分を含み得る分量を増加するけれども、或る溫度に對しては其含有し得る水分の量は一定せるもので夫れ已上の水分は含有することを得ない、例令ば攝氏十度のときは空氣一立方米中には九瓦三三の水蒸氣を含み得るけれども、夫れ已上は含むことは出来ない、此場合に於て空氣は水蒸氣で飽和せられて居ると云ふ、然るに溫度が二十度に昇ると、空氣一立方米中に含まるゝ水蒸氣の量が十七瓦一二に増加するから、前に十度の時には飽和せられて居た空氣も、溫度二十度に昇ると尙ほ七瓦七九丈け含み得る餘力があるから、此時は最早や飽和空氣ではなく餘程乾燥した空氣である、氣象學の方では斯の如く空氣が水蒸氣を含み得る丈け含んだ時、即ち飽和したときを濕度一〇〇と稱し、全く水蒸氣を含まないときを濕度〇とし、百分率を以て示すことになつて居る、斯の如く空氣中に含まるゝ水蒸氣の量は、其濕度に依つて異なるものであるから、濕度は單に空氣中に含まるゝ水蒸氣の絶對量に依つて定むべきものではない、結局空氣が尙ほ多量の水蒸氣を含有することを得るや否やに依つて定まるのである

本縣管内に於ける此濕度の分布を知るは極めて必要なことであるから、先年來二十餘ヶ所に乾濕計を裝置して、濕度の觀測を勵行して居るが、觀測年數尙ほ淺きが爲めに、充分なる成績を擧ぐることを得ない、且つ濕度の觀測は氣温などゝ異なり、多少熟練を要するから、若し細心の注意を缺ぐときは往々意

外の誤測を招くことがある、加之濕度は觀測所の位置の如何に依つて大差があるから、一局に於ける觀測を以て其都市全體を推すことは少し無理である、夫れで此處には只其觀測地に於ける濕度を比較對照するに過ぎない

抑本邦は緯度の割合には溫度が高く、且つ面に四海を圍らし降水が甚だ饒多であるから、歐米大陸の文明都市に較べると、四季を通じて一般に多濕である、就中我が九州は本邦の南西部に在つて、氣温高く降水が多いから、濕度も亦稍々大なる部類に屬して居る、特に本縣は三面が海に臨んで居るから、直接海洋に接した處は、常に多濕なる海風に襲はれて濕度の増大を來し、風速の稍々大なる地方に在つても空氣は常に濕潤を帯びて居る、又内陸に在つては直接海風の影響を享けない平原地方では、概ね風速が小であるから、空氣が沈滞して濕度が増大する、故に本邦の中部地方に較べると全體としては、稍々多濕なるを免れない、而し季節に依り又地形に依り多少の趣を異にして居るから、能く本縣に於ける氣象要素の變化を審にし、巧に之を應用したならば、諸種の事業を經營する上に於て、甚しき遺憾はないことと思はる

今之を養蠶業に就て見るに、當所に於ける年平均濕度は七十八%であつて、養蠶地たる本州中部の郡馬、長野、福島等に較べると、二三%過濕なるに過ぎない、然れども春蠶期たる五月に於ける濕度は、本縣は稍々大にして前記の養蠶地に較べると、五%乃至九%の過大であるのみか、溫度も二三度過高であるから、多少飼育上の困難は免れない、然れども夏秋蠶に於ては、本縣の方が却て寡濕であつて、且つ氣候も頗る良好であるから、飼育上の利益は遙に大きい譯である、唯此期間に於ても彼地に較べ、氣温の一二度過高なるが非難すべき點であつて、爲めに上簇期に際し繭質を粗惡にし、絲の開符を困難ならしむる等の不利益があるから、飼育者に於て多少掃立期を遅延するか、又は飼育の方法に多少の改良を加へ通風を加減し、蠶室の溫度を低下する等適當の方法を講じたならば、是等の點を緩和することは左迄困難でなく、良好の成績を擧ぐることを得るであろう、但し養蠶室又は病室の如き區劃せられたる狹隘なる一室では、人爲的に其處の氣候を左右し得れども、一般的には自然の氣候の影響を享けることが甚大であるから、廣く其地方の氣候を知らんが爲めには、濕度の變化を調査するが必要である、今大正三年から大正十年に至る間、縣下各地で觀測したる濕度表を掲げるご次の通りである

平均湿度 (午前十時)

地名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
小倉	74.6	72.6	73.1	64.8	70.5	80.2	75.8	71.4	70.4	66.7	69.7	71.7	71.4
行橋	78.2	75.8	72.1	69.5	72.7	83.9	81.4	80.6	77.3	68.7	70.9	72.7	75.3
八幡	75.4	74.4	71.9	73.0	72.0	83.7	77.2	73.3	72.5	68.1	68.8	75.2	73.2
大蔵	61.0	69.6	67.1	62.0	68.7	78.9	71.2	69.1	71.2	63.9	67.7	64.0	68.4
後藤寺	59.4	59.8	63.4	59.8	71.3	82.4	76.6	70.3	77.8	63.2	65.2	61.8	67.9
直方	80.2	77.3	73.4	71.7	68.8	81.5	74.8	73.4	77.2	76.8	80.7	80.9	76.4
飯塚	75.7	73.3	67.2	59.8	64.7	75.8	68.8	68.6	65.8	68.2	75.8	76.5	69.6
山野	75.7	77.9	72.2	66.5	68.2	81.4	76.8	77.3	72.9	70.9	75.6	75.1	73.6
東郷	75.6	77.3	72.9	68.5	71.4	81.8	77.8	72.0	74.4	73.0	74.0	75.0	75.6
福岡	75.9	74.5	71.6	68.6	70.8	78.6	73.1	76.7	74.2	69.9	72.1	71.0	73.3
前原	69.6	67.4	65.7	66.1	64.9	72.2	72.3	70.2	71.0	65.6	66.4	68.5	68.3
二日市	73.4	76.3	68.4	67.2	70.7	80.0	74.7	74.0	73.7	67.4	68.1	70.6	71.7
甘木	82.9	76.6	77.5	76.6	74.1	80.0	79.9	78.3	74.6	68.6	73.9	80.5	77.1
志波	82.6	80.3	76.1	74.4	75.0	85.2	76.7	75.3	75.3	76.5	79.4	82.8	78.6
小石原	78.0	75.2	70.7	69.7	67.2	75.7	74.2	73.4	74.4	73.6	73.2	74.9	73.5
立石	74.4	74.7	69.5	67.8	67.5	83.1	77.6	76.2	77.0	73.3	73.2	73.7	74.0
山川	74.9	75.1	70.7	64.9	67.8	79.3	74.0	73.8	75.4	70.1	77.3	73.3	72.4
福島	74.9	76.4	73.0	67.8	69.6	78.7	74.3	74.7	73.2	66.9	71.1	74.8	72.8
柳河	78.6	74.1	70.9	69.0	71.1	80.5	75.0	74.0	71.9	65.2	71.5	73.5	72.8
	79.0	74.6	69.2	65.8	72.7	82.5	78.8	77.3	71.8	71.6	71.7	71.9	73.7

(但シ左表ハ毎日午前十時一回ノ観測ニ依ツテモノデアル)

此表に就て見ると、一年間に於ける午前十時の平均湿度は、北西部の海岸なる大蔵に於て最も小さく、六十七%九であつて、之れに亞くは八幡及福岡の各六十八%餘で、其他は概ね七十%以上である、而して最も大なるは甘木に於ける七十八%六で、大蔵に較べ十%餘も大きい、之に亞くは水城の七十七%一で、中部地方は一體に湿度が大きい、之れ北西部の海岸は年中風速度が大きいから空氣も亦乾燥するが、内陸平原では風力が弱ひから、湿度も割合に大きい、特に甘木の如きは縣内では風力の最も弱い地方であつて静穏の日が多く、疾風已上の日は極めて寡ないから、従て湿度も大である、之に亞きて湿度の大なるは後藤寺の七十六%四、山野の七十五%六であるが、遠賀流域地方が特に湿度の過大なる譯ではない、本洞の如きは六十九%六に止まり、前記の寡湿なる北部地方に較べ、著しき差違のない處を以て見るも、是等は寧ろ地理的影響であつて一般には七十一%を越へないであらう、其他南部及東部も概ね七十二%に止まり、平均の上に於ては格別寡湿なる地方とは言へないが、本縣は九州方面では敢て湿度の過大なる地方ではない

更に月別に就て見るに、各方面に於て稍々湿度分布の状態を異にして居る、元より大體に於て湿度は天氣の良四、五月及十、十一月に於て小にして、天氣の悪い六月の梅雨季に於て、最も大なるは見易き道道である、然れども各方面に於て氣象状態の相異なると共に、湿度の變化も亦等しくない、只梅雨季間に於て多雨多湿なるは、全國を通じて卓越した現象であるが、寡湿なる月は地方に依りて著しき相違がある、即ち北西部の海岸及遠賀平原では、總て四月は北部地方では天氣良好なるが上に、北西風尙ほ強く空氣の著しく乾燥するが爲めである、十月は之に亞ひて天氣良好なるも、風力大に劣り且つ南東風が多く湿润なる空氣を持來すが爲めであつて、四月に較べると三四%も多湿である、然れども東部地方では天氣の状態は格別違はないが、四月に於ては地勢の關係上北風が大に衰へ、却て十月に於て風力が大であるから、東部地方は十月に於て最も寡湿で、四月に較べ二三%も小さい、尙ほ此現象は南部地方に於ても見る處であつて、筑後平原の南部に於ても四月よりは十月に於て寡湿な處がある、尙ほ朝倉山地などに在つては、五月に於て最も寡湿な處がある、之を要するに本縣に於ける湿度は温度、風力等の關係に依り一樣には言へないが、概ね四月及十月が最小な月であつて、其値は六十%乃至六十四%位(午前十時)である、又最多は無論六月であるが、第二の最多は九月であつて、七十三%乃至七十七%に及んで居る、但し東部地方は冬季の風力が強からざるが上に、降水が頻繁であるから、九月よりは却て一、二月の方が多湿である
更に本邦の主要都市に於ける平均湿度表を掲げると次の通りである

平均湿度 本邦主要都市

地名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
臺北	84	84	85	83	82	80	78	78	80	80	82	83	82
那覇	75	75	77	81	83	85	82	82	81	77	75	73	79
熊本	78	76	75	77	77	82	82	79	80	79	80	79	79
福岡	74	73	74	78	78	82	81	82	83	79	77	74	78
廣島	72	70	71	73	73	78	79	76	76	74	74	73	74
松山	73	17	74	77	78	80	80	81	83	80	77	73	77
岡山	73	70	71	72	73	78	78	76	79	77	76	74	75
神戸	69	66	68	69	70	78	78	74	74	72	69	68	71
大阪	72	71	71	72	73	76	77	75	77	77	76	72	74
京都	78	75	74	73	73	77	78	77	80	80	81	79	77
名古屋	75	70	70	73	73	77	78	78	80	77	76	75	75
長野	83	78	73	69	69	75	77	78	79	79	78	81	77
前橋	62	59	62	68	73	79	83	84	84	78	69	62	72
東京	64	62	68	74	76	82	83	82	83	79	74	66	74
福島	74	71	69	67	69	76	81	83	84	81	75	75	75
金澤	81	78	75	74	75	80	82	80	81	79	78	79	79
新潟	83	81	76	76	77	81	83	81	81	79	79	82	80
函館	77	76	72	72	76	84	86	84	80	75	71	75	77
大泊	84	83	80	81	82	87	89	88	85	79	75	80	83
京城	68	65	63	66	68	74	80	77	74	72	70	67	70
旅順	67	65	63	66	70	81	90	87	76	72	65	63	72
奉天	64	61	56	55	58	57	76	78	73	69	63	63	65

左表を見ると年平均湿度の最も小なるは、本土に在つては神戸の七十一%で、之に亞くは前橋の七十二%である、之に反して最も大なるは新潟の八十%で、之に亞くは金澤及熊本の七十九%である、福岡は七十八%で更に之に亞ひて多湿であるが、養蠶業の最も盛なる長野地方は七十七%で、年平均に於ては福岡と僅に1%の差があるのみである、然るに奉天では年平均が六十五%で、著しく乾燥して居るが、太泊は八十三%で、之れは又著しく湿潤である
更に各季節に就て見るに、前記の前橋、神戸及東京では各季に於て甚だ寡湿であつて、六十%内外を示して居る、之れは冬季の風力が殊に強ひ爲めであつて氣候上から言ふと餘り面白い現象ではない、新潟、金澤の如き日本海に面した地方は、冬季に降雨が多いから、従て湿度が大きく、八十%を超へて居るが、福岡は七十三四%で中庸を得て居る、夏季には東京、前橋、福島などは八十二三%を超へ甚だ多湿であるから、温度の割合には蒸暑くて健康上餘り良いことはない、福岡も八十%を超へて居るが、夫れでも前記の地方よりは寡湿である、

阪神地方と名古屋などは大に寡湿で都合がよい、北海道や樺太は最も多湿である、夫れ故秋蠶期には本州の中部地方は稍々多湿で面白くないが、春蠶期なる五月は長野、前橋、福島等の養蠶地は大概七十%已下で、且つ温度も高くないから、養蠶業には最も適して居る、福岡は之より七八%も大きいから、多少飼ひ悪い點があるが、然し一體に湿度の變化は激しくない

4 雨は多いか少いか

前述せるが如く本邦は世界中でも、降水量の頗る饒多なる地方に屬して居る、就中臺灣の北部には年量五千耗を超ゆる處があり、世界中で一番雨量の多い印度地方に亞ひでの、多降地であると言つてもよい、本州でも土佐、紀伊等の如き南海岸地方では三千五百耗乃至四千耗を超へて居る、然れども北海道及其已北の高緯度の地方では漸く其量を減じ、年量千耗を超へない處がある、特に北海道の北東部、朝鮮の北部等では七八百耗に達しないから、是等の地方では水稻の栽培には困難であるが其他の地方では、概して降水量は豊富であつて、平地でも年量千耗乃至二千耗を示し、山地では二千耗乃至三千耗を示して居る、就中九州地方は一般に、降水が多く南九州では、平地でも二千耗乃至三千耗に達するが、北九州は之より遙に寡ない、本縣の内最も多降なる中部の山嶽地方では、平均二千五六百耗であるが、降雨の多い年になると三千六七百耗に達したこともある、然して最も寡量なるは北部の海岸であつて、千四百耗に止まつて居るが雨の寡ない年になると、千耗に足りないこともある、夫れで年に依つては多少の出水を見ることもある、又は旱魃に悩むこともあるが、大體に於て雨量は多くもなく寡なくもない、縣下十二萬町歩の水田に灌漑して些の不足もなく、縣内幾千百の大小工場に利用して何等の不自由をも感じない、加之今や水電事業に、上水道工事に多々益々水力の利用著しきものがあるが、幸に本縣の河川は孰れも水源が豊富であつて、泉水の枯涸する様なことはない而も一年間に於ける降水分布の状態は頗る整齊であつて、水掛りの悪ひ地方でも旱害を蒙むことは甚だ稀れで、又一部の地方を除くの外は出水の害を蒙むことも割合に寡ない、所謂五風十雨誠に其宜しきを得て居る
今縣下の重なる都市に於ける降水分布の有様を見るに、年總量は蘆屋の千四百七十七耗七が最も寡なく、久留米の千八百八十九耗四が最も多く、其差は四百

十一耗七であつて最少地は最多地の約七割五分に當つて居る、概して言ふと降水量は、内陸地方に多量であつて筑後平原は概ね千八百耗已上、遠賀平原は概ね千七百耗以上である海岸地方は概して寡量であつて特に北部の海岸は最も寡なく、千六百耗已下の處が多い、而し東部の海岸は割合に多く千六百耗已上である

月別分布に就て見ると、最多は各地孰も六月に現はれて居るが、只福岡のみは七月に現はれて居る、然れども其差は幾に數耗に過ぎない、第二の最多は各地概ね七月に現はれ六月に較べると一割乃至二割寡ない、門司、大牟田の如く西面して多少海洋に突出して居る地方は、其差が大きくて五割以上に及んで居る即ち是等の地方は年量に較べ六月の降水量が特に多い、夫れは梅雨性の降雨は支那海を通經して來るから空氣が特に多量の水蒸氣を含んで居て、夫れが上陸する際多量に注下するからである、但し後藤寺、香井田、大隈等の如き多少盆地を爲して居る地方は風力が弱いから、降水が多量であるが前者とは全く其原因を異にして居る

之れに亞ひて降水の多量なるは九月及四月である、其割合は地方に依り多少相異なつて居る、兎に角此兩月は本縣に於ては六月に亞ける雨期であつて、其量及日數共に他の月に超越して居る、而して久留米已南は一般に四月の方降水量稍々多量なれども、其他の方面では九月の方が遙に多量である、元來本縣の南部地方は熊本及佐賀地方と同じく、表日本の氣象の影響を受け天氣良好なるが上に、颱風等の直接の襲來を蒙ることが稀であるから、降水量が割合に寡ないが、四月は冬季大陸方面の悪天氣の影響に依つて、天氣が不良なる上に風力は北部地方の如く強くなく、降水量は割合に多量である、之れに反して降水量の最も寡なき月は、東部及北西部の海岸並に遠賀川流域地方は十一月であるが、筑紫平原及筑後の南部では孰も十二月であるが、只福岡及二日市のみは一月に於て最少を示して居る

詳細は左表に就て見られたい

降 水 總 量

地名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
門司	71.6	83.1	124.3	178.1	136.4	337.2	223.2	113.3	193.1	131.8	65.1	76.4	1733.6
小倉	72.6	85.5	117.7	152.9	124.8	276.3	226.8	120.3	160.7	107.0	65.7	78.0	1588.3
八幡	82.2	109.6	166.6	106.0	108.8	313.6	192.5	122.7	252.8	67.0	64.0	91.0	1676.8
行橋	65.1	83.8	119.2	155.7	133.8	296.3	256.8	119.5	176.8	122.1	64.9	72.2	1666.2
後藤寺	65.1	82.8	122.0	176.7	117.8	375.6	260.6	134.0	224.3	152.4	67.9	66.9	1846.1
直方	72.9	87.4	114.8	151.5	124.3	286.0	257.4	133.7	188.4	117.8	66.7	79.9	1685.8
飯塚	71.7	84.7	124.9	159.4	134.9	309.9	278.4	142.4	181.0	117.9	65.3	76.8	1747.3
芦屋	70.5	81.8	107.2	146.0	112.2	243.7	227.0	98.5	148.8	101.4	65.5	75.1	1477.7
福岡	67.6	78.7	110.9	139.1	120.9	251.2	256.0	140.0	181.9	107.1	68.1	81.6	1603.1
前原	73.0	81.4	114.8	132.9	104.7	263.7	223.5	130.9	193.0	111.6	72.1	84.0	1585.6
二日市	64.8	74.7	117.2	139.7	124.6	314.0	274.4	135.7	178.2	108.5	67.5	76.5	1675.8
甘木	67.1	74.2	121.8	180.6	140.2	325.7	307.4	155.7	189.7	114.5	66.8	64.9	1808.6
吉井	69.1	74.4	137.1	176.3	134.3	333.1	307.9	159.1	190.5	114.4	67.1	62.9	1826.2
久留米	61.8	79.4	134.9	200.9	152.7	355.6	315.5	168.2	184.8	113.8	64.6	57.2	1889.4
福島	58.6	68.7	126.6	181.2	146.6	357.7	290.5	158.2	177.2	111.8	64.2	55.2	1796.5
榎津	52.4	65.7	121.7	169.7	141.9	328.1	259.3	130.7	166.2	106.5	60.1	49.6	1651.9
柳河	60.1	72.4	124.2	183.0	137.7	340.4	263.7	140.9	175.1	118.1	63.1	53.7	1732.4
大牟田	46.2	56.7	115.1	161.1	107.4	397.1	255.1	120.9	170.9	115.2	61.2	40.6	1647.5

更に一日の最多降水量に就て見ると降水總量と等し、く六、七月に於て現はるゝことが多いが、日量の最大は突發的のものが多く、特に盛夏の候には驟雨性の豪雨に依つて意外の大量を見ることがあるから、必ずしも月量の多少と行併するものではない、又其量も年總量の多い處が必ずしも最多日量が大なる譯でもない寧ろ平素降水の多き地方よりは却て降水の寡ない地方に、偶發的に豪雨を降らすことがある、累年の統計に依つて見るも縣内に於ける日量の最大は、前原の二百九十八耗一であるが、全處は年の總量から言ふと、縣下でも雨量の寡ない地方であつて、山地では之れに倍加するの雨量を見るけれども、斯る多大の日量を現はしたことはない、亞ぎは直方の二百八十八耗であるが、全處も亦總量から言ふと山地に較べ千耗已上も寡ない地方であるが、最多日量は之よりも遙に多い、之を要するに最多日量は山地よりは平地に多く、特に多少の窪地を爲せる處又は風に面し山を荷ひたる地方の如きは、時としては非常の豪雨を見ることがある、然して其發現の時季は四月乃至九月の暖候であつて、各地百耗を超へて居る就中六、七、九の三ヶ月は概ね百五十耗已上であるが、其他の寒候に在つては各地五六十耗に止まつて居る、特に十二月、一月は四十耗已

下の處がある

降水最多日量

地名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
門司	52.0	55.0	65.0	86.6	127.0	170.5	109.6	72.5	112.5	106.2	45.0	64.0	170.5
小倉	35.0	78.0	43.0	104.7	111.0	232.0	169.0	88.1	104.0	123.7	50.0	56.0	232.0
八幡	24.8	34.0	49.5	76.1	47.0	203.0	98.7	182.9	111.6	38.0	24.0	49.6	203.0
行橋	35.0	73.0	50.0	162.0	110.3	140.0	240.0	80.0	180.0	190.0	60.1	47.0	240.0
後藤寺	35.8	45.0	46.2	77.3	116.1	142.3	135.6	127.0	193.5	98.5	35.9	41.3	197.5
直方	36.7	45.0	69.0	121.5	98.9	288.0	155.4	88.5	122.6	97.8	42.7	40.0	288.0
飯塚	50.0	62.5	75.0	151.2	117.0	140.0	190.5	138.5	183.0	110.1	43.0	44.0	190.5
芦屋	43.0	56.3	51.8	104.5	103.0	141.0	118.6	112.0	102.2	103.0	42.6	55.0	141.0
福岡	47.1	49.2	50.9	125.0	93.5	135.3	158.0	175.6	132.9	108.2	41.8	44.6	175.6
前原	54.2	60.0	52.6	76.0	80.0	195.0	156.1	298.1	154.5	116.5	50.0	60.5	298.1
二日市	37.4	58.0	47.0	106.3	129.6	183.0	169.2	100.7	180.2	137.0	41.5	42.5	183.0
甘木	43.8	43.8	60.0	166.0	104.0	130.0	163.0	98.0	155.0	111.9	46.0	42.0	166.0
吉井	47.5	60.0	56.5	126.0	132.0	138.5	165.3	155.0	160.0	130.5	48.6	39.5	165.3
久留米	46.5	72.7	62.1	174.3	105.4	164.8	178.5	139.2	175.3	101.8	51.8	42.4	178.5
福岡	33.0	50.5	54.0	175.3	144.0	164.6	182.4	180.0	151.0	115.2	59.4	40.0	182.4
柳河	33.5	64.0	75.0	140.0	122.3	170.0	75.0	108.3	165.8	100.0	54.4	37.5	175.0
大牟田	36.0	60.0	61.4	135.0	135.0	270.0	180.2	98.6	175.0	109.0	56.0	45.0	270.0
大牟田	30.7	52.7	54.7	64.8	112.0	230.5	171.7	112.7	189.5	92.2	76.0	32.5	230.5

更に各年に於ける降水量の變化を見るに、總量に於ては格別の差異がなくとも雨の降り方に於て甚しく異同のあることがある、即ち或る月は雨量が非常に多く或る月は雨量が非常に少ない様なことがある、斯る變化の多き地方は氣候狀態が決して良好であるとは言へない、今各月に就いて降水量の最も多い年と最も少ない年との月量の比を求むるに、其比の最も大なるは八月であつて、七月之に亞ぎ十月更に亞いで居る、而して最雨期である六月は各地共に甚だ小さく九月も亦小である、蓋し八月は平素降水の甚だ多からざる月であるが、一朝顯著なる颱風の襲來を享くるか、又は熱雷雨の發生の爲め驟雨性豪雨の發現に依つて、一時に多量の降水を齎すことがあるから、年に依つて其量に著しき差違がある、即ち降水量の變りは平素降水の多き月よりは、却つて降水の寡なき月に於て大である

地方別に就て言ふと、南部の筑後方面は七月が最大で、八月之に亞ぎ一月更に之に亞ひて居る、筑紫平原では八月が最大であつて、十月之に亞ぎ北部地方は八月が最大で十月之に亞ひて居るが、共に一月が更に之に亞ひて居る、然るに

遠賀流域地方では十月が最大であつて、七月之に亞ぎ八月は遙に劣つて居る、只後藤寺のみは七月が最大で四月が最小であるが、全年を通じて其變化が極めて小さい、又東部地方は八月が最大で七月之に亞ひて居るが、小倉のみは十月に第二の最大を現はして居る

又雨の降り方の變化の最も寡なき月は四月であつて之に、亞ぐは二月及十一月である、地方別に就て見ると東部南部及筑紫平原は四月に於て最も小さく、之に亞ひて小なきは東部は十一月、南部は二月、筑紫平原は十二月である、又北部は二月に於て最も小さく十一月之に亞ぎ、遠賀平原に於ては十一月最も小さく、二月之に亞ひて居る、而して四月は稍々大きく第四位である、之を要するに雨の降り方の變りは各地概ね寒候に於て小さく、暖候に於て大であるが、只一月は各地共に大であつて、特に南部地方では七八月に亞ひて大きくある

年量の變化は月量の變化程には甚しくないか、最大は矢張南部地方であつて其比は概ね二、二已上である就中大なるは福岡で二、三九である中部地方は之に亞ひて大きく概ね二、〇已上であつて北部及東部は之より小さく概ね二、〇已下である就中小なるは北部では福岡の一、八五、東部では行橋の一、七六であるか、只中部の後藤寺は一、五〇であつて孰れよりも小である

降水量の變化 最多月量/最少月量

地名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
門司	9.7	8.7	11.9	3.5	4.2	7.3	23.5	112.0	19.2	2.2	5.8	4.8	18.5
小倉	9.8	10.9	7.2	5.4	12.6	10.6	11.6	279.0	20.6	112.5	6.5	6.9	18.8
行橋	13.7	5.8	8.4	6.0	11.5	14.4	45.5	187.5	10.8	11.9	5.4	9.9	17.6
後藤寺	8.6	4.2	7.2	2.8	3.2	5.5	15.5	6.1	5.7	3.0	5.2	7.1	15.0
直方	6.3	5.5	10.6	10.0	26.9	15.0	23.1	12.9	16.0	113.5	6.2	5.5	21.9
飯塚	10.8	7.8	11.8	8.4	15.3	9.8	29.9	15.8	8.7	50.4	4.0	6.7	22.1
芦屋	14.2	7.6	9.9	6.7	10.5	6.0	10.5	238.0	13.5	45.0	7.4	9.9	21.8
福岡	8.4	5.5	16.8	8.4	14.5	11.0	20.0	202.0	9.8	24.7	6.7	7.0	18.5
前原	12.7	6.8	10.3	7.1	14.3	15.4	16.4	192.0	9.3	16.8	4.6	9.6	19.9
二日市	7.0	5.7	7.6	5.0	9.3	11.5	14.7	203.5	12.1	18.4	8.4	9.2	18.6
甘木	16.9	5.9	9.3	6.5	7.0	10.7	25.6	29.4	16.7	18.8	6.0	9.7	20.7
吉井	19.9	13.0	8.1	4.7	6.4	8.3	22.8	466.5	6.5	10.8	10.2	6.2	23.6
久留米	19.0	8.6	12.4	5.4	5.6	10.8	20.4	96.6	14.0	17.1	11.0	10.0	20.3
福岡	20.7	8.1	7.5	4.7	6.7	13.9	121.5	70.0	9.6	6.6	11.2	11.0	23.9
柳河	26.0	8.1	8.6	4.9	5.0	14.8	35.3	41.5	7.4	17.5	18.0	7.4	22.1
柳河	21.6	6.7	9.6	4.8	5.4	16.8	77.1	59.3	8.4	16.1	10.0	21.2	23.2
大牟田	26.6	8.4	5.0	3.5	5.4	3.0	43.9	18.1	6.8	6.8	17.4	13.5	23.1

更に本邦の主要なる都市に於ける、降水量を見るに左表に示すか如く、九州各都市に於けるものは、福岡よりは概ね多量であつて、特に鹿島巴南の島嶼に在つては二千耗已上を示し、福岡よりは五百耗も多く下關も亦稍々多い方である、内海に面する中國及四國地方は之より遙に寡なく、岡山の如きは五百耗近くも寡少であるが、阪神地方は二三百耗の欠乏に止まつて居る、然れども京都、名古屋及金澤、新潟等の如く、本邦中部より北陸道に亘つては一般に多量であつて、特に金澤は千耗も多い、東京は福岡と大差がないが、夫より已北は漸次に減少し、石巻、函館等は約五百耗寡なく樺太の太泊は福岡の半分であるが、朝鮮、滿洲は更に寡なく、旅順奉天は福岡の三分の一に過ぎない、詳細は左表に示す通りである

降 水 總 量 (本邦主要都市)

地名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
臺北	98	119	187	129	253	252	223	258	262	107	77	96	2042
那覇	139	130	153	159	254	274	186	259	177	151	150	108	2140
鹿島	92	92	158	232	229	415	291	175	240	139	91	84	2240
熊本	67	77	128	176	173	341	231	170	169	107	67	56	1811
長崎	78	86	133	200	179	330	242	169	219	119	91	85	1932
福岡	68	81	112	136	125	249	245	140	189	101	72	76	1592
下關	69	77	112	160	154	284	249	112	162	109	69	74	1629
廣島	55	62	107	177	156	243	209	110	181	109	69	51	1529
松山	54	54	91	124	137	209	158	105	177	108	69	56	1343
岡山	41	45	81	105	106	158	136	93	158	99	53	36	1110
神戸	53	51	93	132	124	225	150	140	166	126	56	46	1360
大阪	50	56	104	150	132	191	154	110	150	127	73	47	1373
京都	64	68	114	163	151	221	208	157	202	131	76	56	1610
名古屋	60	64	129	170	166	225	192	181	243	148	81	52	1712
東京	58	63	110	134	156	163	139	165	222	183	97	53	1544
金澤	269	186	164	170	147	181	202	180	226	194	259	357	2534
新潟	193	127	108	109	92	132	166	130	183	154	184	235	1813
石巻	47	49	76	95	121	124	143	122	156	119	56	44	1157
函館	59	60	67	69	78	94	136	129	162	115	99	82	1148
大泊	23	19	36	53	75	75	102	86	93	78	60	39	748
釜山	65	33	66	169	123	201	277	156	160	75	61	21	1406
京城	41	26	74	88	84	120	349	201	90	49	53	15	1191
旅順	11	9	15	17	38	41	168	109	83	27	28	7	550
奉天	5	6	19	29	52	94	159	138	90	39	24	5	661

5 風は強いのか弱いのか

風が強いのか弱いのか、又何風が多くて何風が寡ないか等を詳細に調査することは各種の事業を經營する上に於ても甚だ必要であるか、風位、風力は時々刻々に變化するものであるから、縣下各地に於ける一日中の風の變化を精密に考査することは甚だ困難である、特に管内觀測所の如く、一日一回(午前十時)の定觀時測を爲す處に在つては、到底一日中の風の變化を詳細に知ることは出来ないが、而し十數年間に亘れる觀測の結果は、其地方に於ける卓越せる風向、風力を窺知することを得るから、又之に依つて一日中及、一年中の變化をも大體推察することが出来るのである

元來風向、風力の變化は海運業者に取つては、頗る大切なる關係を有するもので、本縣の如き石炭の搬出を以て唯一の生命と爲せる港灣では、概ね小さき荷足り船を以て本船との連絡を取つて居るから、少しく風の強ひ時又は波の高ひときなどは、全く荷役不能となつて空く罷業の止むなきに至るのである、現に若松、門司、博多、三池の如き港灣には常に、數百乃至數千の帆船が蟄集して石炭や材木や雜貨などを滿載して、好晴なる天氣を俟ち目的地に向つて、解纜せんとして居るから、日々の風向及風力の如何は、實に彼等の生命を支配して居る譯である、本縣の北部は直接に玄海灘の怒濤を受け、特に冬季は大陸季節風が、卓越して吹き一、二兩月の如きは北西風が猛烈であるから、大概の港灣では月中の半已上は、其作業を中止して奥深く隠遁して居るの外はないが、港灣の向きに依つては港内の波浪靜にして冬季の季節風も格別の影響なく、優に荷役し得る處もあるから、海運業に従事せんとするものは、各港灣に就きて夫々風の特徴を調査するの必要がある

凡そ風は効害の相伴ふものであつて暴風の害は言ふ迄もない處であるが、適度の風は是非必要である若し風がなかつたならば、空氣が一處に停滯して處に依り寒暑の差が著しく頗る偏頗なる氣候を現はすに至るのである、即ち風は各種の氣象要素を相互に調和するの作用がある、乾燥せる陸上の空氣と濕潤せる海上の空氣と相混淆し、又寒冷なる地方の空氣と溫暖なる地方の空氣とが、相交換することに依つて互に緩和せらるゝのであるが、氣候の推移は概して漸進的なるを可とし、急激なる變化は厭ふべきである、然れども強風や大雨の如きも適當の時季に於て適度に發現すると云ふことは甚だ必要なことであつて、農作

物の如きは之に依つて病害蟲を驅除せられ道路下水の如きは、之れに依つて穢物を洗滌せらるゝに至るのである、夫れ故に傳染病等の發現もなく農作物も豊穰である様な年は、即ち氣候上却て適度の變化のあつた年で、極めて無事平穩である年は氣候上決して最善の結果を齎らすものではない、只其時季と程度とは重大の關係を有するものである、今左に本縣の主要都市に於ける風向、風力に就いて概説せん

本邦は一般に支那大陸の影響を享けて季節風が甚だ強く、冬季は北西風が卓越して吹き夏季は南東風が優勢である、而して春秋二季は此季節風の交替期に當つて居るから主風に乏しく顯著なる流行風がない、此現象は日本の表裏兩面に於て殆ど同様であるが、九州は直接大陸風の襲來を享けるから、冬季の北風は特に顯著である、而して本縣の南部の如きは風力は稍々劣るが、風向は毫も北部に異ならない、又夏季は一般に南東風が、優勢であるが風力は冬季に較へると著しく劣つて居る

然れども、管内各觀測所の成績に就て見ると、地勢上の關係に依つて相隣接せる兩地でも、全く相異なる風位を示す處がある、例へば門司の如きは東西に狹長なる海峡を擁し、北方には風師山脈が高く聳へて居るから、南又は北より吹き來る風は極めて寡なく、東又西より吹き來るものゝ約六分の一に過ぎない、冬季北西の季節風の優勢なときでも、同處は概ね西風で又夏季南東風の流行するときでも、同處は概ね東風である、然るに門司を去る纔に數哩に過ぎない、小倉は足立山脈が其東方に連亘して居るから、東風の勢力は著しく減殺せられて、其回数如きも門司の約半數を示すに過ぎない、之に反し北方は自由に開放せられて居るから、北風は卓越して吹き且つ、風力も強く門司の二倍已上を示して居る、東部の行橋方面も西又は東風が優勢で在つて南風は甚だ寡ない、之れは海陸の關係に基いて居る

遠賀流域地方には卓越した主風がなく、地方に依つて夫々異なつて居る、後藤寺は多少の窪地を爲して居るから、風力は強くはないが、風位には多少の僻がある、南又は北風は甚だ寡なく北西風が最も優勢で、之に亞くは南西風及東風である、直方及飯塚は風向の變化が稍々類似した處がある、即ち五月から八月までは兩地共に南風が優勢で九月から翌年の四月までは北風が熾んである、但し直方は十二月、一月の兩月は南風が特に多く、其他の月でも全處は附近に較へ南風が優勢である、其理由は明かでないが、全地の觀測所は直接に遠賀川に

沿ふた處に在つて而も、彦山、嘉麻兩川の相會合した地點に當つて居るから、川に沿ふて吹き下る風が多い爲めであらう

福岡及二日市平原は南東から北西に亘り、筑紫平原と玄海灘とを連絡して風の通路に當つて居るから、是等の地方では風位が常に南東か若くは北西である、特に南東風は最も卓越し夏季は固より冬季と雖も、大陸高氣壓が異常の發展を爲して、北西の寒風が凜烈を極むるときを除くの外は、夜間は概ね南東風が最多を占めて居る、但し時刻別に就て見ると全年を通して、午後七時頃から翌日午前十一時頃までは南東風が卓越し、殊に午前五時より全八時までは最も強盛であるが、午前十一時頃から北西風が徐々に増勢して來て、午後二時、三時頃が最も熾んで午後七八時頃から漸次南東風と交替する、此現象は北部地方一體に亘つて居る譯ではないが、夜間は概ね南風が多く晝間は概ね北風が多い

筑紫平原は概ね區々の風が吹き卓越した主風がない、風力も亦一體に微弱である、就中甘木は靜穩日數の最も多い地方であつて強烈風が甚だ寡ない、全年に於ける風向別回数に就て見るに各風位共に大差なく、只西及北風が稍々多く東及南東風が稍々寡ない、其他も略ほ同様であるが、吉井の如きは地勢の關係上風向は著しく偏寄つて居て全年を通じて東風が卓越し、月の最多風向は只六、七兩月に於てのみ西風が優越して居るのみである、是等も亦川に沿ふて吹き下る風が多い爲めであらう、然れども對岸の志波に於ては全年に亘り西風が卓越して吹き、東風は只十月に於てのみ多數を示し、吉井とは全く反對の結果を現はして居る、之れは全處は山影に在つて谿谷から吹き來る風、が西風となつて現はれたもので、恐らく附近一帶の風位を代表したものであるまい、久留米の觀測所は市の中央に在つて風位の觀測には、多少不適當な處であるが、全市は南東に高良山脈を控へ、北西には九千部山を臨み、兩山脈の稍々相迫つた處であつて、筑後川は其間を北東から南西に向つて流れて居るから、風向は是等の關係に依つて、北東風が最も優勢であつて其他の風位は甚だ寡ない、只六、七兩月のみは南西風が稍々多い

筑後平原は、風向が略ほ一定して居て夏季を除くの外は著しく、北風が超越して居る、特に冬季は北又は北西風が頻繁で北部よりは遙に其回数が多く、總回数の半分已上を占めて居るが、風力は北部よりは稍々弱い様である只六月乃至八月は南風が強勢である然れども東部の山地に於ては、地勢上の關係で多少風向を異にして居る、福島如きは二月は西風が著しく熾んで、四月は北東風、

五月は北風が強く六月乃至八月は南西風が優勢である、之れ全地は矢部川に沿ふた地方であつて其流域が南西に展開して居るから、筑後平原に於ける夏季の南風は、全地方では南西風となり、冬季の北風は北東風となつて現はるゝからである

斯の如く風位風力は地理的の關係に依つて著しく相異なるから、一般的の氣流の方向や、其強さ等より其地方の風向風力を決定することは不可能である、必ずや實地に就き其地方の地理、地勢を察して各季節に對する、主風の方向及強さを定めねばならぬ、彼の防風林を造り防波堤を築くに當り其地方の主風の方向を知ることの必要なるは勿論であるが、例令一棟の家屋を建て一株の果樹を

風 向 別 回 數

地名	方向										平均風向
	北	北東	東	南東	南	南西	西	北西	靜標	平均風向	
門司	20.0	26.2	103.8	16.6	11.7	14.3	96.0	24.7	51.7	N25°E	
小倉	50.6	29.4	57.2	21.2	29.3	22.7	69.5	37.1	48.0	N37°W	
八幡	48.7	22.3	33.0	93.7	22.3	8.7	40.3	70.3	26.0	N44°E	
行橋	26.3	53.0	89.9	5.9	9.6	16.5	94.2	17.3	52.6	N15°E	
後藤寺	12.6	43.2	52.3	33.6	9.0	59.3	33.2	87.8	24.4	N58°W	
直方	81.0	11.4	16.5	20.8	33.3	17.3	28.9	22.9	78.5	S62°W	
飯塚	60.1	21.6	42.3	29.0	45.5	33.4	30.8	32.9	69.5	N3°E	
芦屋	64.4	34.8	71.8	18.8	29.4	16.6	48.1	29.2	53.8	N23°W	
福岡	53.0	32.1	27.9	93.4	58.0	14.0	29.0	47.0	11.0	S61°E	
前原	40.1	49.6	64.0	12.4	16.4	30.1	74.4	33.1	44.8	N12°W	
二日市	27.1	19.4	51.0	105.6	24.1	4.7	29.6	74.1	31.0	S81°E	
甘木	47.0	18.6	16.3	10.8	24.0	33.9	40.1	33.3	127.9	N65°W	
吉井	21.2	18.6	82.5	47.6	15.0	16.9	63.0	40.3	6.2	N85°E	
久留米	49.2	95.3	47.0	5.7	21.7	41.8	38.1	13.5	53.1	N30°E	
福岡	61.4	44.2	29.0	14.2	24.1	41.6	51.1	38.0	61.0	N34°W	
榎津	104.8	53.1	20.6	11.4	47.7	20.7	33.9	26.9	46.5	N1°W	
柳河	113.0	46.9	10.1	12.8	58.6	20.2	29.9	23.0	51.0	N6°W	
大牟田	113.8	16.0	11.0	13.0	51.8	23.9	33.4	63.2	34.3	N37°W	

植ゆるにも其地方に於ける、卓越せる風向を知ることには頗る肝要である、近時最も重要視せらるゝ都市計畫に對しても街路の走向、家屋の建て方、公園又は遊覽地の位置、工場建設の場所、煙突の高さ等に至るまで、總て其地方の風向風力を考慮して、成べく暴風雨の被害を享けず、而も夏涼しく冬暖く煤煙や塵埃の飛散して來ない清潔で衛生上に適した、完全な都市を建設することが必要であるが、是等の調査を爲すには、是非其風の一月中の變化及各季節に對する、

變遷等をも詳細に亘りて、考究するの必要があるが、未だ調査資料が充分でないから此處では只其概要を記するに止める

各 月 の 最 多 風 向

地名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
門司	西	西	西	東	東	東	東	東	東	東	東	西	東
小倉	西	西	西	北	西	東	東	東	東	東	西	西	西
八幡	北	北	南	南	北	北	東	東	東	東	北	北	西
行橋	北	北	東	東	北	東	東	東	東	東	北	北	西
後藤寺	北	北	北	北	北	南	南	東	北	北	北	北	北
直方	南	北	北	北	南	南	南	南	北	北	北	北	南
飯塚	北	北	北	北	東	南	南	南	北	北	北	北	北
芦屋	北	北	北・東	東	東	東	東	東	東	東	北	北	東
福岡	南	南	南	東	東	東	東	東	東	東	北	北	東
前原	西	西	西	西	西	西	西	東	東	東	東	西	西
二日市	南	南	北	北	南	南	南	南	南	北	南	南	南
甘木	西	北	北	西	西	南	南	南	北	北	北	西	西
吉井	東	東	東	東	東・西	西	西	東	東	東	東	東	東
久留米	北	北	北	北	北	南	南	北	北	北	北	北	北
福岡	北	北	北	北	北	西	南	南	北	北	北	北	北
榎津	北	北	北	北	北	南	南	南	北	北	北	北	北
柳河	北	北	北	北	北	南	南	南	北	北	北	北	北
大牟田	北	北	北	北	西	南	南	北	北	北	北	北	北

疾風己上ノ日數

地名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
門司	6.2	3.8	3.2	4.1	3.1	2.5	2.4	1.9	2.2	2.8	3.4	5.2	40.9
小倉	4.1	3.4	3.7	3.2	3.1	1.3	2.7	2.8	1.7	2.1	3.2	3.4	34.7
八幡	10.3	9.7	12.0	11.0	9.5	9.0	7.0	10.3	8.0	7.0	6.3	9.0	109.1
行橋	4.8	4.0	4.1	4.0	3.5	3.4	3.2	3.8	1.4	2.2	3.4	4.2	44.5
後藤寺	1.6	1.4	1.4	1.7	1.2	1.9	2.4	1.6	1.1	1.2	0.9	0.7	17.1
直方	1.7	1.1	2.7	1.8	1.6	1.9	1.7	1.7	1.0	1.8	2.7	1.8	21.5
飯塚	2.8	3.1	2.3	2.9	2.4	2.7	2.8	2.9	1.4	1.3	1.9	2.3	28.8
芦屋	8.2	6.4	6.2	5.7	4.2	3.2	4.0	4.8	4.0	4.2	5.8	6.4	63.1
福岡	7.8	7.1	8.0	7.5	6.9	4.9	5.4	3.2	3.3	3.5	7.0	10.0	74.6
前原	3.3	3.0	3.6	2.6	2.1	1.8	1.6	1.7	1.4	1.8	2.7	2.8	28.4
二日市	2.6	2.1	2.1	0.9	1.1	1.8	0.6	1.2	0.7	0.7	1.3	2.1	17.2
甘木	2.2	1.8	2.2	1.9	1.8	2.0	1.2	2.1	1.4	1.2	1.4	1.8	21.0
吉井	1.5	1.6	1.4	1.3	1.1	1.2	1.3	1.2	0.7	1.0	1.0	1.2	14.5
久留米	0.6	0.7	0.6	0.8	0.0	0.6	0.8	0.6	0.6	0.5	0.2	0.3	6.3
福岡	3.4	2.4	3.5	2.9	2.5	3.3	2.5	1.8	2.4	2.6	1.9	1.9	31.1
榎津	1.8	2.8	2.8	1.5	1.3	2.5	3.0	2.2	2.0	1.7	1.5	1.1	24.3
柳河	1.2	1.8	2.0	1.4	0.7	1.7	1.9	1.5	1.2	1.7	0.9	1.0	17.0
大牟田	8.0	8.6	6.1	8.0	4.5	5.6	6.8	6.8	8.4	8.6	6.8	6.7	87.9

静穏日數

地名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
門司	3.3	2.6	3.9	4.4	6.1	4.9	4.1	4.9	5.6	4.5	4.3	3.1	51.7
小倉	5.8	5.2	4.6	3.9	2.3	3.6	3.0	2.2	4.7	3.6	4.3	4.8	48.0
八幡	3.5	1.7	2.5	2.0	3.0	2.3	1.8	1.0	1.0	4.0	4.7	2.7	30.2
行橋	4.5	5.0	3.0	2.6	2.8	2.6	1.6	2.4	4.5	5.3	5.8	4.2	44.3
後藤寺	2.7	3.8	1.6	2.1	1.6	0.8	1.0	1.3	1.4	1.9	2.4	3.8	24.4
直方	7.2	6.6	8.2	5.1	5.7	7.3	5.5	4.4	6.4	6.5	8.3	7.3	78.5
飯塚	6.9	6.0	5.4	5.3	4.9	6.7	4.6	2.9	6.3	7.1	6.1	7.3	69.5
芦屋	4.6	3.7	4.2	3.8	3.8	5.3	3.9	2.2	5.7	5.2	5.3	6.1	53.8
福岡	1.3	1.0	0.6	0.8	0.7	0.5	0.8	0.6	1.4	1.5	0.9	0.9	11.0
前原	3.5	3.8	3.0	3.1	5.0	4.6	3.8	2.9	3.6	2.7	4.5	4.3	44.8
二日市	3.5	2.5	2.5	1.8	2.2	2.6	1.3	1.7	4.4	3.4	2.5	2.6	31.0
甘木	13.9	11.6	11.0	10.5	7.8	9.6	9.0	6.6	10.4	11.7	12.4	13.4	127.9
吉井	6.4	6.0	5.2	4.6	3.9	4.4	4.2	4.7	5.2	4.8	4.8	6.0	60.2
久留米	5.4	5.3	4.6	3.6	4.5	3.6	2.8	2.8	3.8	4.7	5.8	6.2	53.1
福岡	3.9	6.3	5.3	3.6	4.7	4.3	3.6	2.7	5.3	5.8	6.9	8.6	61.0
榎津	6.2	4.8	3.3	2.6	3.1	3.0	2.2	2.7	3.8	4.3	6.0	4.5	46.5
柳河	5.3	4.1	3.6	3.8	3.4	3.5	3.0	3.6	2.9	4.5	6.7	6.6	51.0
大牟田	5.6	4.9	2.5	1.5	1.6	1.8	1.0	1.1	1.6	3.4	4.9	4.4	34.3

6 空氣は清淨なか淨清てないか

市街地の空氣が清淨であるか、否やの問題は頗る重要なことで、吾人が夜となく晝となく、二六時中間断なく呼吸する空氣の清濁如何は、飲料水の良否と相俟つて保健上極めて大切であることは、何人も知悉する處である、然れども其淨不淨を、科學的に分析して其成分の良否を、精密に鑑別することは、甚だ困難であるから、概ね只一局部に於ける煤煙の多少又は塵埃の多寡に依つて、推断するに止まつて居る、特に本縣では纔に一部の工場に於て煤煙に就き、断片的に調査したものがあつた位で、全豹を窺ふことを得ないのは甚だ遺憾とする處である、故に茲には唯々管内各地から蒐集した材料に依つて僅に其良否を推測するに過ぎない、蓋し空氣の清濁は一市内でも繁華な場所とか、工場の近くとか又は汽車、軌道に沿ふた地方とかに依つて大差があるから、一二ヶ所の観測のみでは其都市全體に於ける空氣の清濁を判断することは出来ない、故に是等は都市全體に就て言ふよりは、寧ろ居住すべき場所に於て一々調査すべきものであつて、全體の上から見ては非常に空氣の清淨な都會地で在つても、其内には多少不潔な部分のあることは免れない、又若し如何に煤煙に塗れた工業都市であつても、其中には清潔な居住地のないことはない

一般都市に於ける空氣の清濁は工場、煙突等の多少に關することは勿論であるが、又其地方の主風の方向と重大なる關係がある、若し工場の所在地が専ら其主風の風上に位置して居る様な都會地では、其地方の空氣は常に汚穢せらるゝを免れない、道路の良否、地盤の構造如何は直接に塵埃を起す原因となるが、氣象状態も亦空氣の清濁に大なる影響を與へるものである、例合は風の強い地方は風塵を起し易く、煤煙を飛散し易ひことは言ふ迄もないことであるが、又一方から言ふと風は空氣の新陳代謝を促す原動力であるから、風の強ひ處は汚濁した空氣が永く一處に停滯する様な恐れがない、又降水は空氣中に浮遊する種々の微菌や塵埃を溶解して空氣を洗滌する効能があるから、風も雨も適度に實現するがよい、其外空氣の乾濕、日照の多少、天氣の良否等も亦空氣の清濁に密接な關係があるから、是等も別々に調査しなくては充分でない

本縣は至る處石炭が豊富であるから、大小無数の工場は固より一般の家庭でも、日常の煮沸用に多量の石炭を使用して居るから、煤煙は至る處の都市の天空に漲つて、概して空氣は汚濁して居ると考へねばならぬ、特に本縣の北部は今や

諸工業勃發し、八幡製鐵所を始め各種の鐵工所、電氣工場、硝子工場、「セメント」工場等の大工場が揃比して居るから、是等の地方に於ける空氣の甚しく溷濁せることは、一度汽車旅行を爲したものは容易に首肯する處である、就中最も著しきは八幡市であつて、製鐵所内にある大小多數の煙突から吐出す煤煙は、常に全市を掩ふて晝尙ほ暗きの感がある、之を以て鐵道沿線に於ける空氣の汚穢なることは實に言語に絶する、然し南部の方は丘陵に接し街衢は概ね高臺地を爲して居るから、此方面は割合に空氣の流通が善く、風位に依つては固より煤煙を被むるが砂塵は割合に寡ない、一體に海岸地方は海陸風の關係に依つて晝と夜とは全く風位を異にするか、製鐵所は海岸地に在るが爲め夏は海風が強くと、市街には煤煙が多く飛散して來る、又冬は大陸高氣壓の影響で毎日北西風が強ひから、風下の市街では煙塵を被むることが多い、斯く夏冬共に煤煙が多く空氣が溷濁して居るから、洗濯物などを始め壁、襖などは容易に汚穢せられて黒褐色に變する位であるから、決して健康地とは言へないが、夫れでも洞海湾に面し市街は常に海風に洗はれて居るから、朝夕などは心身自から爽快で、低地を除くの外は格別居住に適しない譯ではない

門司は八幡程には煤煙が甚しくはないが、港の内外に碇泊せる多數の船舶から發する黒煙又は附近の工場などから來る煙塵は、風の向きに依つては可なり多い、而し前記せるか如く同地の主風は西又は東であつて、南又は北の風は甚だ稀であるから、直接に享くる害は割合に寡ない、但し市の南西部には「セメント」工場があつて粉灰が四方に飛散するから、其附近は空氣が甚しく溷濁して居る、然れども全體としては全市街は著しく傾斜地を爲し、普通の住宅は概ね高燥な地に在つて海風は常に颯々として吹き來り、關門の風光は双眸の間に在るから、壯快なことは此上もない、小倉は驛附近には製鋼所があつて盛に煙塵を飛ばし、又市の南部には大小の工場が多く、加之平坦な土地であつて車馬の往來が熾であるから、空氣は清淨ではないが全市も亦海岸地の事であるから、海風が深く市内に入り込んで來て常に新鮮味を加へるから、そう空氣の悪いことはない、遠賀平原の各都市即ち直方、飯塚、及後藤寺等の如きは大同小異て孰れも炭坑都市として附近には小工場簇出し、石炭の使用熾なるか上に近年急速なる發展を遂げた地方であるから、道路等の設備も完全でなく、其上四近には丘陵を繞らした低濕地で通風が自由でないから、自然に空氣が汚濁して居る福岡市は前記の都市に較へると遙に清潔で、塵埃が寡ない上に海岸沿ひの土地

であるから、海風が自由に市街地に進入して來るから、冬は少し寒いか夏は涼しくて絶へず溷濁した空氣を洗濯して居る、此地方の主風の方向は一年間を通して晝は北西、夜は南東であるか、幸に工場は概ね市の南東部に位して居るから、晝間に煙塵が市街を襲ふ様なことはなく、道路も近年は大に改善せられ樞要な市街は「アスツハルト」又は「コンクリート」などで堅めて絶へず撒水して居るから、砂塵の立つ様なことも寡ない、筑後平原に散在する甘木、吉井等の小都邑の附近には炭坑もなく、主に農産物の集散地であるから、空氣は全く清淨であるが、此地方でも輕便鐵道が、縦横に走つて居て客車の發着が頻繁であり、且つ其附近には小工場が在るから、沿線には煤煙が可なり多い、久留米は筑後川に沿ふた舊都市で近來は人家も稠密となり、諸種の工業も勃發して來たが、工場は規模が小さく且つ概ね郊外に在るから、市内は割合に空氣が清澄であつて砂塵の揚がることも少ない、然れども内陸都市であるから、海岸地の如く朝夕に空氣の交替が行はれると云ふ譯ではないか、巨川に沿ふて居るから川に沿ふて吹き上げ吹き下る風が多いから、四季を通して少しも空氣の停頓する様なことはない、南部の筑後平原中の柳河、椛津及福島の如きは孰れも農産物の豊かな土地で、工業は北部地方の如く盛んではない、廣漠たる田野を吹き涉つて居る風は全市に満ちて清涼掬すへきものがある、最南部なる大牟田市は全く炭坑業に依つて近年異常の發展を遂けたる都市であつて、近傍には各種の工業が簇出して熾に煤煙を飛ばし、市内の空氣を汚毒して居る、夫れに新設の都市で道路の設備も充分に整つて居ないから、北部の工業都市と同様に随分煙塵が多く空氣が穢れて居る

7 天氣は良いか悪い

本縣は三相異なる海洋に臨み内陸には起伏重疊せる數多の山系があつて、複雑なる地形を構成して居るから、各地の天氣状態も自から相異なつて居る、然れども一般的には天氣の良好なる處が多く、本邦中では孰れの地方に較ぶるも決して劣つては居ないが、只地勢の關係上局處的には多少不良な天氣を現はす所もある而し夫れは寧ろ例外である、本縣に於ける天氣は一般に十、十一月の兩月が最も可良で、快晴日數は兩月共に五日已上を算へ、雲量は五、五を超へない而して一耗已上の降水日は八日あるのみ、之に亞くは五月及八月であつて共に快晴日數は四日半で雲量は六、一に充たず一耗已上の降水日は九日を算へ

る、之に反して天氣の最も悪いは六月の梅雨季であつて快晴は二日を超へず、雲量は七、五を測り降水日数は十二日の多きに及ぶ、之に亞くは一月であつて冬季北西の寒風に伴ひ濕潤なる空氣は自然に不良なる天氣を現はし、快晴日数は六月よりは却て寡なく一日半に止まつて居る、而して雲量は六、八であつて降水日は十一日を示して居る、但し一月に於て斯く天氣の不良なるは専ら北部地方に於て見る處であつて、南部地方は之より遙に良好で、快晴日数の如きは北部に較べると五割已上も多い

今本縣を南部、北部、東部及遠賀、筑紫の兩平原の五部に別ち、各部に於ける天氣の状態を見るに、最も晴天日数の多いは南部地方であつて、一年間に平均二百日を算へるが、最多は柳河、榎津の各二百八日である之に亞くは東部地方で平均百八十七日を示し、最多は門司の二百六日である、最も不良なるは北部地方であつて、平均百七十一日に止まつて居るが最少は八幡の百二十六日である、然るに曇天日数は之と全く反對で、南部に於て寡なく平均百二十三日に止まり、最少は榎津の百十一日である、東部は之に亞ひて寡なく平均百二十七日であつて、就中門司は纔に百八日に過ぎない、最も多いは北部の平均百四十四日であつて、其中の最多は福岡の百五十九日である、之に亞くは筑紫平原で平均百四十三日を算へ、遠賀平原に較へ九日の多數である、又降水日数は略は曇天日数と其分布の状態を等しくするが、割合に東部に多く筑紫平原に寡ない、即ち最も寡ないは南部の平均百三十四日であつて、就中最少であるは榎津の百二十六日である、之に亞くは筑紫平原の平均百四十四日であつて、最少は久留米市の百二十九日である、最も多いは北部の平均百五十五日であつて、南部に較へると二十一日多い、其中の最多は福岡の百六十九日である、遠賀平原は之に亞いて多く平均百五十三日を示し、其中後藤寺の百六十七日を最とする

更に各季節に就て見ると、晴天は冬季に寡なく秋季に多いは一般の現象であるが、北部及遠賀平原は其差が著しく南部は其差が極めて小さい、即ち南部は四季に對する天氣の分布が頗る齊一であるが、北部及遠賀平原は不規律であつて年に依つても著しき差違がある、又曇天は夏季に於て最も寡なく秋季は之より纔に多い、而して冬季は一般に多現であるが、北部及筑紫平原は特に多く南部は著しく寡少である、雨天日数は稍々異なり東部、北部及遠賀平原は冬季に於て最も多く秋季に於て最も寡ないが、筑紫平原は夏季に於て最も多く秋季に於て寡なく、南部も亦夏季に於て最も多く秋、冬二季に於て最も寡ない

之を要するに、春夏の兩季は各部の降水日數に甚しき差違がなく、比較的東部に良好であるが、秋、冬兩季は筑紫平原及南部地方に著しく良好であつて、北部地方に著しく不良である、之れ本縣南部に聳ゆる分水嶺に依つて、幾分北西風を遮斷するが爲め、南北兩部に於て斯の如き天候の差違を生ずるに至るであらう、尙ほ各地に於ける局地的變化に至つては之より更に著しきものがある、例令は後藤寺に於ける降水日數の如きは附近に較べると卓越して多い、之れは土地が多少盆地を爲して居るが爲めで、又久留米地方は天氣が良好で降水日數も寡ないが、附近の山川村は高良山脈の裾に當つて居るから、昇騰氣流の影響で不時の降水を見ることが多い其外夏季に現はれる驟雨又は迅雷、急雨の如き多少突發的の降水は各地に出現するもので、一々此處には列記しないが、左表に示せる各部の天氣類別表を見れば略は其大勢を知ることを得るであらう

晴天日數 (午前十時)

地名	月												年						
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		春	夏	秋	冬	年	
門司	15	13	16	17	20	14	19	23	17	19	17	15	206	東部	48	49	50	40	187
小倉	11	10	13	15	16	11	13	19	14	18	15	12	166	遠賀平原	46	47	48	36	178
八幡	6	9	11	13	14	4	11	12	12	17	9	5	126	北部	43	46	47	35	171
行橋	15	13	14	16	17	12	16	21	15	18	16	15	188	筑紫平原	42	46	49	39	176
後藤寺	12	11	14	15	18	10	17	20	15	17	15	14	178	南部	47	51	54	47	200
直方	12	11	14	15	17	12	16	21	16	17	17	13	181	全部	45.2	47.8	49.6	39.4	182.4
飯塚	12	11	15	15	16	11	15	20	15	17	16	12	175						
芦屋	13	12	14	16	17	13	17	22	16	18	16	12	186						
福岡	11	10	12	12	13	8	13	16	18	15	15	11	149						
前原	12	11	14	15	16	11	16	20	14	17	16	12	174						
二日市	12	11	13	14	16	11	15	21	14	18	16	13	174						
甘木	13	12	13	14	15	10	15	20	15	18	17	14	176						
吉井	13	11	13	15	15	10	15	20	15	17	16	14	174						
久留米	14	11	13	14	15	10	16	21	15	18	17	14	178						
福島	16	14	15	15	16	12	17	21	16	19	18	16	195						
榎津	17	15	16	16	17	13	18	22	18	20	19	17	208						
柳河	17	16	16	16	18	12	18	22	17	20	19	17	208						
大牟田	16	12	14	14	16	10	19	21	16	17	16	16	187						

曇 天 日 數 (午前十時)

地名	月												年
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
門司	11	11	11	8	7	9	7	5	9	9	9	12	108
小倉	14	13	14	11	12	12	14	10	12	10	12	13	147
八幡	17	14	11	13	12	17	16	15	13	11	17	22	178
行橋	12	11	11	9	10	11	11	8	11	10	10	11	125
後藤寺	13	12	13	10	10	12	10	8	11	11	12	12	134
直方	12	13	12	10	10	11	10	8	10	11	9	13	129
飯塚	14	12	12	11	11	13	12	9	11	10	10	13	138
芦屋	15	12	11	9	10	11	10	7	10	10	11	14	130
福岡	15	13	14	12	14	15	14	11	13	12	12	14	159
前原	15	13	12	10	11	13	11	8	12	11	11	15	142
二日市	13	12	14	11	12	14	13	9	12	10	11	14	145
甘木	14	13	13	10	12	12	12	8	11	10	11	12	138
吉井	15	13	13	10	12	13	12	9	11	10	11	14	143
久留米	15	14	14	11	13	14	12	8	11	10	11	14	147
福島	13	11	12	9	11	12	10	8	9	8	10	12	125
榎津	11	10	10	9	10	10	9	7	8	8	8	11	111
柳河	11	10	11	9	9	11	10	7	9	8	9	11	115
大牟田	13	14	14	12	13	12	9	8	10	11	12	14	142

	春	夏	秋	冬	年
東 部	31	29	31	36	127
遠賀平原	33	31	32	38	134
北 部	35	34	34	41	144
筑紫平原	36	33	32	41	143
南 部	32	28	28	35	123
全 部	33.4	31.0	31.4	38.2	134.2

降 水 日 數

地名	月												年
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
門司	14	11	12	12	10	16	11	9	13	10	10	12	140
小倉	16	13	14	13	10	15	13	10	13	11	10	15	153
八幡	18	18	17	12	10	19	12	6	12	7	13	11	153
行橋	14	12	14	13	11	15	12	10	13	11	10	13	148
後藤寺	16	15	14	14	11	18	13	11	14	12	12	17	167
直方	13	12	13	11	11	14	13	10	12	10	10	13	142
飯塚	14	13	13	13	11	15	14	11	11	10	10	14	149
芦屋	15	13	14	12	10	14	12	9	12	10	11	15	147
福岡	16	15	16	13	12	16	14	12	14	12	12	17	169
前原	14	13	14	13	11	15	13	10	13	11	11	14	152
二日市	14	13	14	12	11	15	14	10	12	10	11	15	151
甘木	13	12	14	13	11	15	14	11	12	10	10	14	149
吉井	13	12	14	14	12	17	15	12	13	10	9	12	153
久留米	10	10	12	12	10	15	14	10	11	8	7	10	129
福島	11	10	13	13	11	16	14	11	13	10	8	11	141
榎津	9	9	12	12	11	15	13	9	11	9	7	9	126
柳河	11	10	13	13	10	15	13	10	12	9	8	11	135
大牟田	10	8	12	13	9	19	12	10	13	10	8	9	132

	春	夏	秋	冬	年
東 部	36	37	34	40	147
遠賀平原	37	40	34	42	153
北 部	38	39	35	44	156
筑紫平原	37	41	30	35	144
南 部	36	39	30	30	134
全 部	38.4	39.6	33.4	38.2	153.6

更に本邦の重要都市に於ける天気状態を見るに、快晴日数は本邦内地に在つては鹿島、東京が最も多く五十八日を示し、那覇が最も寡く十九日で新潟之に亞ぎ二十日である、福岡は四十四日であるから寡ない方ではない、月別では臺灣は九月に於て最も多く、九州は概ね十月が最多で四國、中國から東海道筋は十一月であるが、東京邊は十二月一月が最多である、又北海道は快晴日数が寡ないが、八月は割合に多く、鮮滿地方では年に百日已上を算へる處があるが、孰れも十月より三月に至る寒候に多い、曇天日数は金澤最も多く二百二日を算へ、大阪最も寡なく百十五日である、福岡は百三十四日で寡ない方である、鮮滿地方は百日未滿である、月別では臺灣は冬季に多く九州已北、關東地方までは六月が最多であるが、東京から北海道樺太及鮮滿地方は七月に多く、北陸地方は冬季に於て卓越して多い、降水日数の最も多いは北陸地方で、新潟の二百二十九日を最とし之に亞くは金澤の二百二十四日である、最も寡ないは内海地方で岡山は百三十日に過ぎないが滿洲では概ね百日未滿である、月別に就ては臺灣琉球は冬季に多く九州北部も亦冬季に多いが、日本海方面より北海道に亘りては降雪が頻繁であるから、冬は降水日が卓越して多い、然れども四國中國より關東地方に亘りては六月の梅雨期に於て多降なことは勿論である 詳細は左表に示す通りである

快晴日數 (其二) 本邦重要都市

地名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
臺北	2	1	1	1	1	1	4	4	7	5	3	2	32
那霸	1	1	1	1	1	1	2	2	3	3	1	2	19
鹿兒島	6	4	4	3	4	1	4	5	4	8	8	7	58
熊本	4	4	3	4	3	1	2	4	3	8	8	5	50
長崎	2	2	3	3	4	1	2	4	4	7	6	3	40
福岡	2	2	3	4	5	2	3	5	4	6	5	3	44
下關	1	1	3	4	4	2	3	4	3	5	4	2	36
廣島	2	2	3	4	4	2	3	4	3	6	6	3	42
松山	3	3	3	4	4	2	3	4	3	6	6	3	44
岡山	5	3	3	4	4	1	2	4	2	5	7	6	46
神戶	3	2	3	3	4	1	1	3	2	5	7	6	40
大阪	4	2	3	4	4	2	2	4	3	5	7	6	46
京都	2	1	2	3	3	1	1	2	2	4	5	4	30
名古屋	5	5	5	4	4	2	2	3	2	6	8	7	53
東京	12	7	5	3	3	1	1	2	1	3	8	12	58
金澤	0	1	2	3	3	1	2	3	2	3	2	1	23
新潟	0	0	1	3	3	1	1	5	2	2	1	1	20
石巻	4	4	3	4	3	2	1	1	2	3	4	4	35
函館	1	1	2	4	3	2	1	2	3	5	2	1	27
大泊	5	3	3	4	3	1	2	3	4	5	2	2	37
釜山	12	10	8	7	7	2	4	7	4	10	13	15	99
京城	11	7	5	4	4	1	2	2	5	8	8	8	65
旅順	11	12	11	8	7	5	3	5	10	11	10	11	104
奉天	16	14	12	7	6	3	2	4	8	12	13	17	114

曇天日數 (其二) 本邦重要都市

地名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
臺北	18	19	21	17	16	14	8	9	8	13	17	20	184
那霸	17	18	20	17	19	17	9	8	8	10	15	16	174
鹿兒島	9	10	13	14	15	20	13	7	11	10	7	6	135
熊本	8	8	11	12	13	18	13	8	12	9	6	7	125
長崎	12	12	13	14	14	19	14	8	12	9	8	11	140
福岡	12	12	12	12	12	16	12	7	12	9	7	11	134
下關	14	13	13	12	12	16	13	7	13	9	8	12	142
廣島	8	8	10	12	12	16	13	8	13	8	5	7	120
松山	9	8	12	12	14	18	14	9	14	10	8	9	137
岡山	7	7	11	13	14	18	14	10	15	11	6	5	131
神戶	6	6	10	12	13	18	15	10	14	11	5	5	125
大阪	6	6	10	12	13	16	12	7	13	10	6	4	115
京都	9	10	12	14	14	18	16	10	15	11	7	6	142
名古屋	5	5	9	12	13	17	14	10	14	11	6	4	120
東京	6	7	12	14	15	19	17	12	16	14	8	5	145
金澤	23	21	19	14	14	18	17	12	16	13	14	21	202
新潟	24	20	18	13	13	16	16	11	14	14	16	21	196
石巻	8	5	9	11	13	17	19	16	16	11	6	5	136
函館	14	12	12	10	13	17	18	14	12	7	11	15	155
大泊	9	8	11	12	17	19	20	16	10	9	12	13	156
釜山	5	5	8	10	10	14	14	10	12	7	5	2	102
京城	6	6	8	10	7	12	17	11	10	5	6	4	102
旅順	6	4	6	6	7	8	13	9	7	4	6	4	80
奉天	4	3	6	7	7	11	14	10	6	5	4	2	79

降水日数 (其二) 本邦重要都市

地名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
臺北	17	16	19	15	16	15	14	15	14	14	16	17	188
那覇	19	18	17	15	18	16	15	18	18	15	15	16	200
鹿島	14	13	16	15	14	18	16	14	15	11	10	13	169
熊本	13	11	15	14	13	16	15	13	14	10	9	11	154
長崎	16	14	15	14	13	16	14	12	14	11	11	15	165
福岡	17	14	15	14	12	15	14	12	14	11	11	16	165
下關	16	14	15	14	12	14	13	11	14	11	12	16	162
廣島	11	10	13	13	12	14	12	10	14	9	9	9	162
松山	12	10	14	14	12	15	12	10	14	10	10	11	144
岡山	8	9	13	13	12	14	12	9	14	10	8	8	130
神戸	10	10	14	14	12	16	12	10	14	11	9	8	140
大阪	9	10	13	14	13	15	12	10	14	11	10	9	139
京都	13	12	16	14	14	15	15	12	16	11	11	12	161
名古屋	9	9	13	13	12	15	14	12	16	11	10	9	143
東京	7	8	14	15	14	16	15	13	17	14	9	6	148
金澤	26	23	21	16	14	15	16	13	17	17	20	26	224
新潟	28	23	21	16	14	15	15	12	17	19	22	27	229
石巻	10	10	12	12	12	14	16	15	15	14	11	11	152
函館	21	18	18	12	12	13	14	13	16	15	19	22	193
大泊	14	12	14	13	13	14	14	13	14	14	17	17	169
釜山	7	5	9	10	9	13	13	10	11	8	6	4	105
京城	7	8	8	10	8	12	15	12	9	7	8	8	112
旅順	6	3	4	4	6	8	12	9	7	7	6	4	76
奉天	5	3	6	6	9	13	15	12	9	6	5	3	92

8 井水は良か不良か

氣候風土を論ずる上に於て、氣温と相並ひて重要な關係を有するものは、水の良否である、蓋し呼吸と消化の兩機關は生活上の樞機を司る大切なものであるから、空氣と水の善悪は健康上直接に多大の影響を與ふことは、論ずる迄もないことである、夫れで昔から住宅を撰定するにも、井水の良否を第一條件として居る、氣温の高底は同一都市に在つては、或る特殊の状態の許に在るものを除くの外は左迄著しき相違はないが、井水に至つては都市の部分々に依つて、相異なるのみならず、隣接せる住宅に在つても全く其水質を異にし、甚しきに至つては相並へる井戸で、甲は清冽なる淨水が滾々として湧出するに反し、乙は濁濁せる穢水が僅に滲出するに過ぎないものがある、地下水の分布の不規則にして且つ、變化の多いことは實に想像し難きものがある、之を以て水質、水量の善悪多少は其場所々々に依て調査すべきものであるから、茲には唯其概況を述べるに止める

元來本縣は至る處炭脈が縦横に走り、地下數百尺の處は殆ど全部炭層を以て掩はれて居る有様であるから、高峻なる山嶽の蜿蜒し來つて、堅固なる地盤を構成せる處か、又は砂礫層の土地か或は河沿ひの地で、河水が砂床で自然に濾過せられて滲出して來る様な土地でなければ、一般に清淨なる井水は得られない夫れ故に本縣では山地を除くの外は一體に井水は不良であるが、特に炭坑都市では頗る劣悪で、到底其儘では飲料には供せられない、各戸で夫々濾過して用ひては居るが、元來の水質が悪くて種々の鹽化物や硫化物を含んで居る計りではなく、澤山の有機物なども含有して居るから、飲料水としては甚だ不適當である、炭坑地方で風土病や諸種の傳染病が比較的が多いのは、此飲料水の不良なるに原因して居ることが多いと思はれる、夫れで近來は主なる炭坑や工場では、専用水道を設けて關係方面に給水して居る、八幡製鐵所は勿論後藤寺の田川礦業所、大牟田の三池礦業所などで設置して居る、上水道は稍々完全に近い爲めに是等の地方では衛生状態が餘程改善せられた様である

本縣内に於て井水の最も良好なる地方は、中央山嶽に接近した部分であつて、特に太宰府の如きは背後に純潔なる水脈を蓄へた、花崗岩より成る寶満山を控へ、其地質は砂質壤土であるから、井水は最も清冽無垢である、甘木の如きも秩父古生層よりなる朝倉山脈の麓に在つて、其土質は礫質壤土であるから、之

れ又清澄なるは勿論である、其外吉井、福島等の如きも之と略ぼ同様で、概ね砂礫層であるから、悪い筈がない然れども遠賀平原は昔から水が悪い、夫れは石炭は第三紀層の産出物であつて、表面の土質は概ね埴質壤土であるから濾過作用が更がない、夫れで種々の有機物や無機物が溶解して甚しく汚濁して居る北部の海岸地方では糸島、宗像兩郡の如く主に花崗石より成る土地は一般に良好であるが、福岡市附近及遠賀川下流附近は第三紀層の丘陵にて圍まれて居るから、下層は例令砂土であつても上層は概ね埴土であるから、一体に水が悪い又南部でも山門、三潞兩郡の如きは全く第四紀の沖積層で厚き埴土で掩はれて居るから、水質が頗る悪く到底飲用には供せられない、却て地表を流る、筑後川や矢部川の水の方が遙に清浄であるから、此等の地方では大抵川水を飲用して居る、夫れも一度濾過すると善いが昔からの習慣で其儘使用して居る、随分塵埃や微菌などが、澤山に浮遊して居つて危険であらうと思はれる、然し此地方では又舊慣に依つて如何なる下等社會のものでも決して生水は飲まない、一度必ず煮沸したるものでなくては飲用しないと云ふ、ことは劣悪なる飲料水を有する都市としては自然の結果である

斯の如く本縣の飲料水は、山地を除くの外は一般に悪いと見なければならぬ、然し其中には局部的には相當に清浄なる水の湧出する處がある、例令は福岡市に於ける東公園の松原水の如き、或は因幡町の共同井戸の如き、水質も純良なれば泉量も豊富で、如何なる旱天の時でも嘗て涸渴したことがないと言つて居る、現に大正十一年春の如きは十數年來見ざる旱魃で、河水は勿論井水も大概は涸渴したが、獨り是等の井戸の水は滾々として、盡くる處を知らなかつた、夫れは松原水は有名なる千代の松原の中に在るから、水源の涵養も充分であらうが、因幡町の井戸は表面上は附近の井戸と格別異なつた處はないに、水質水量共に優良であるのは其地下が局部的に砂礫層を以て掩はれ、自然に集注して來る地下水が濾過せられて、此處から湧出する爲めであらう、其外にも此種の井水は少くない如何に、水質の粗悪である炭坑地方でも、一市内に二ヶ所や三ヶ所は良水の湧出しない處はない、然し之れは需めて中々得られない事であるから、矢張一般に水質の良き土地を撰ぶの外はない、其撰擇の條件としては、土地の高燥なること、砂礫層の土地なること、花崗石又は粘板岩等の地層に近きこと、清き川沿ひの土地なること、水田、沼澤の附近ならざること、埴土又は埴質壤土の土地ならざること等である、而して飲料に供すべき水は無色、無

臭、無味にして硝酸鹽類、硫化水素、安母尼亞などを成へく含有しないものを可とする、是等を多量に含んで居ると腸胃を害し、消化機能を鈍らし諸種の傳染病などに罹り易く「マラリヤ」や窒扶斯などにも冒され易い、又諸種の有機物や菌類が混淆して居ると寄生蟲などが發生する、夫れで飲料水の悪い處は是非一度濾過するか煮沸しなくてはならぬ

今縣下の各都市に於ける井水の良否を調査するに、門司は全部水道水を用ひ殆ど井戸を使用する處はないから、飲料水に對しては最も安全である、小倉は南部は水質が不良であるが其他は普通である、全市にも水道の設けがある、八幡は東部の山手の方は概ね良好であるが、其他は普通で海岸の方は概ね不良である、八幡製鐵所は遠賀川の水を引いて完全な水道を布設して居るから、其關係者は全部水道の水を使用して居るが、市民の大部分は今尙ほ不完全な井水を用ひて居る、行橋は割合に井水が可良で濾過せずに飲料に供し得るものが多い、後藤寺、折尾、直方及飯塚は所謂炭坑地方であつて、井戸の最も悪い處である是等の地方の井水は金氣を帯びたり、又は溷濁して居て一種の臭氣を有するものがあるから、濾過せずして飲用し得るものは極めて稀である、夫れで各地共に簡易水道を布設して良水を市民に供給せんと目論んで居る、現に後藤寺町では株式組織の水道會社が出來て、大正十年十二月から通水を開始して、市内の三分通りには給水して居る、其外三井田川炭礦では數年前から、遠賀川の水を引用し來つて關係者に供給して居る、飯塚町も之に劣らぬ不良井土が多い、夫れでも三分の一は飲用し得ると言つて居るが、金氣が多く且つ汚濁して居つて到底悪水に慣れた人でなければ、飲料には供せられない、此處にも町營で水道布設の議が熟して居るから、近く實現するであらう

福岡も一般に井水の悪い處であるが、其中でも福岡部は割合に良好であるが、博多部は一般に不良で、特に海岸の方は鹽氣を含むことが多く、到底飲用に供することが出來ないのみか、洗濯其他の雜用にも使用することの出來ない處がある、此邊は一體に東公園の松原水を、購入して飲料として居るを見ても、水に不自由な處であることが判る、市附近の町村でも濾過せなければ、飲料に供することの出來ない井水が多いが、只那珂川に沿ふた地方だけは清澄なる井水が得らるゝ、而し川岸を去ること一町已上に及ぶと既に汚濁して居る、夫れは川沿ひの處丈けは地下十數尺の深さまでは、清浄なる砂層であるからである、之を以て福岡市でも先年來上水道の布設中であつたが、漸く竣工して大正十二

年からは一般に給水することになつて居る、今後は傳染病や他の疾病の流行に際しても、最早恐るゝ處はなくなつて衛生上には誠に結構である

太宰府、甘木、吉井等の如き中央山地に近ひ處は、前記せるが如く本縣では飲料水の最も可良なる地方であつて、何處を掘つても清水が滾々と溢れ出て居る、自然の水道が其地下を流れて居る様なものである、久留米は高良山脈の裾に纏へる一市街で、筑後川の清流が其傍を流れて居るから、井水は割合に良し然し北部と南部は餘り優良でないが、素より飲料には差向へはない、筑後平野は其東方山地を除くの外は、一體に不良で特に柳川、榎津の如きは總て埴土斗りで砂礫層が全くないから、孰れの部分も劣悪で良井を得ることは困難である、夫れでも一二水質の良好な井戸のないことはない、大牟田市は有名な炭坑地で地下一面に炭層が横はつて居るから、井水は一般に不良であるが只西方松原の井戸だけは纔に飲用に供することを得るに止まる、此地は下層が多少砂土であるが爲め、自然に濾過せらるゝ様である、同市には既に上水道が布設せられ、市内七八分通りには給水せられて居る、

要するに本縣の七都市中井水の比較的に良好なるは、久留米市で他は概ね不良であるが、而し孰れも既に上水道を布設し、或は將に完成せんとして居るから是等の都市は今後飲料水に對しては、格別の考慮を要しないであらう、其他に於ても後藤寺、飯塚の如き最も井水の劣悪なる處は、大抵簡易水道の設けがあつて、漸次飲料水の改善を圖られて居るが、只筑後の海岸方面のみは依然として舊慣に狎れ、平氣で河水を其儘飲用して居るは甚だ危険千萬である、今各主要都市に於ける、井水の良否及地下水の高さを各部に別つて調査すると左の通りである

地名	井水					地下水ノ高さ				
	中部	東部	西部	南部	北部	中部	東部	西部	南部	北部
門司	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
小倉	良	並	並	不良	並	尺 9.7	尺 8.7	尺 6.8	尺 3.2	尺 8.7
八幡	並	良	並	並	並	15—20	15—25	16—30	10—20	16—30
戸畑	並	良	不良	並	不良	18	12—18	10	12—20	12
行橋	並	並	不良	並	並	8	5	4	6	5
後藤寺	並	並	良	並	並	—	—	—	—	—
直方	不良	並	不良	並	不良	10	10	10	10	10
飯塚	稍並	並	並	不良	稍並	20	18	15	13	15
福岡	不良	不良	並	並	不良	15	15	15	15	10
前原	良	良	良	良	稍良	18	18	18	18	18
太宰府	良	良	良	良	良	—	—	—	—	—
甘木	良	良	良	並	良	12	6	6	6	9
吉井	良	良	良	良	良	10	10	12	9	9
久留米	良	良	並	並	並	15	30	12	12	18
福島	並	良	良	良	良	9	9	9	9	9
榎津	不良	不良	不良	不良	不良	—	—	—	—	—
柳河	不良	不良	不良	不良	並	9	9	9	9	9
大牟田	不良	不良	並	不良	並	7—9	7—9	7—9	7—9	6—9

9 土地が乾燥なか濕潤なか

土地の乾濕も亦氣象状態に依て異なるもので、降水の頻繁なる地方は、一般に濕潤で降水が寡なく天氣の佳良なる地方は、一般に乾燥である、然し土地の乾濕は降水量の多少よりは、寧ろ降水の頻度即ち降水日數の多少に關係することが多い、夫れは如何なる大雨でも、短時間の降水では直ぐ流れ去つて十分に土地を潤さないが、雨量は寡なくても長降りがあると、著しく濕潤になつて來ることは日常目撃する處である、然し夫れが又甚しく少量であつては、地中に滲透せずして直に蒸發するから、土地の乾濕は雨量の多少と、降水日數の多少との兩方に關係がある、其外蒸發の多少も亦頗る重要な關係を有するもので、從て氣温の高低、湿度の多少、及風の強弱等には密接なる關係がある、風の強く吹くときは、地面が早く乾ひて直ぐ塵埃の飛散することは誰れも知つて居ることである、氣象已外では其土地の地質に關係することが深い、土地が砂礫層であれば、雨水が容易に滲透して水は地上に貯藏せられないから乾燥するが、粘土質や埴質壤土などであると、粘氣が多く水は之に含まれて、滲入しないから何時までも濕めじめして居る、又土地が多少高燥であるか、或は傾斜を爲し

て居ると排水が善ひから、自然濕潤でなくなる、池湖、沼澤の附近を避くるは勿論であるが崖下や低地などの如く、風の流通が悪しく空氣が沈滞する處は成べく避くるがよい、夫れで土地の乾濕を論ずるには氣候、地質、地形の三方面より觀察する必要がある。

縣下に於ける降雨の多少、強弱は別項「雨は多いか寡ないか」の條に記述してある通り北部は一体に降水量が寡なく、降水日數も多くはないが、冬期は著しく天氣が悪しく、毎日曇雨天のみで経過し、好晴なる天氣は誠に少なく従つて空氣は甚だしく濕潤にして、蒸發も寡なく南部地方とは著しく異なつて居る、夫れで土地も概ね濕潤であつて、二毛作の出來ない田畑が多い、之れは勿論其土地が粘土質のもので、且つ地下水が高ひ爲めでもあるか、氣候の甚しく陰霖多濕であると云ふ事が、即ち地下水の流出を多くし、又土地が水氣を多く含む原因となるから、矢張氣象の影響と見るべきであらう

然し冬季に於て、空氣や土地が斯く濕潤であると云ふことは、人體の保健上左迄の悪影響を與へるものではない、若し寒氣の凛烈なる時季に於て、空氣や土地が著しく乾燥して居つたなら、夫こそ恐るべき災厄を齎らすであらう、流行性寒胃、實扶埤利亞、肺炎等の如き呼吸器性疾患は常に氣候の寒冷なるが爲めに猖獗を極むると云ふではなくして、寧ろ空氣や土地が甚しく乾燥して居ると云ふことが該病を誘發する一大原因であることは、大正八年の流行性寒胃の時に徴して見るも明なことである、夫れで冬季の濕潤は決して否むべきではない、却て歓迎すべき點がある、夫れは後章にも述べるが如く、本縣は本邦中にも火災に對しては安全地帯に屬して居る、即ち冬季大火災の寡ないことは、保險業者間にも一般に認められて居る事實で、保險率などは極めて低廉である、夫れは確に冬季の空氣が濕潤であることが、一原因を爲して居ると思はる、然れども夏季は之と大に事情を異にして居る、一体夏は高温、多濕であるから空氣や土地の如き周圍のものが、乾燥して居ると人体から水分なども、澤山に排除せられて非常に氣持が善く、血液の循環なども旺盛になつて、健康を増進するが外界が濕潤で水蒸氣の發散などが無いと、所謂蒸暑くて消化機能なども、大に衰へ新陳代謝が出來なくなるから、疾病などにも冒され易くなる、總て微菌などの繁殖増加するには、適度の温濕を要するから、濕度の多い處は従て種々の疾病を誘發せらるゝ譯である、夫れで夏季は成べく濕氣の寡ない、乾燥した土地を撰ぶ必要がある、彼の脚氣病の如きは勿論「マラリヤ」室扶斯「ワイ

ルス」氏病の如き熱性病が濕潤なる土地に多いは周知の事實で、誠に寒心すべきことである

管内に於て夏季降水量の最も寡ない處は、矢張北海岸であるが、然し海岸地方は海風の影響で、空氣は割合に濕潤であるから、土地も亦乾燥して居ない、山地は山の影響で空氣は濕つて居つて、土地も亦水氣を多く含んで居るが傾斜して居る地方は、排水が善いから非常に乾燥して居る處もある、然し一般には内陸に屬する平原地であつて、多少高臺になつて居る處が、最も乾燥せる土地である、然し筑紫平原や筑後平野の如く、一體に低卑なる地方は、灌漑用の爲め無数の沼澤を設け、縦横に溝渠を通して居るから、地下水が高く土地は一般に甚しく濕潤である、一概には言へないが、地下水が高く井水の不良なる地方は、概ね濕潤なる地方であつて、健康地とは言へない

今主要なる都市に於ける、土地の乾濕を見るに、門司は全體に著しき傾斜を爲して居るから割合に乾燥であるが、只中部と北部には濕潤な處が多い、土質は第四紀新層の壤土である、小倉は紫川、板櫃川が市内を流るゝ外、運河や溝渠が多いから土地は一般に乾燥などとは言へない、殊に南部及西部は水田に連なる低濕地であるから、一層濕潤である、中部は最も繁華なる街衢で、割合に乾燥で東部も多少の丘陵地に近ひから乾ひて居る、八幡市は海岸部か又は丘陵の間に狭まれた低地は濕潤であるが、大體は傾斜地で高臺を爲した處が多ひから、夫等の土地は概ね乾燥して居る、行橋町は平原の中央にある市街地で、河川が三又狀を爲して流れて居るから濕潤の土地が多い、中部、東部が稍々乾ひて居る、後藤寺町は第四紀古層の砂質埴土で、土地が稍々高ひから、西部を除くの外は割合に乾燥である、

直方町、飯塚町は共に埴質壤土で、四近には沼澤が多く、水排けが悪しくて頗る低濕な土地であるが、夫でも處々乾燥した部分はある、福岡市は海岸部の方も砂礫層は寡なく、概ね壤質砂土で掩はれて居るから濕つて居る、南部も川沿ひの一部を除くの外は、壤土で非常に地下水が高ひから、濕潤であるが中部及西部には稍々乾燥した土地がある、二日市、甘木及吉井は山麓又は夫れに近ひ處で多少傾斜して居るから、甚だ乾燥であるが、甘木の南部、吉井の西部は少し濕潤である、久留米市は筑後川が傍を流れて居るが川床が低ひから、地下水も低く土地は甚だ乾燥して居る、只南部に少し低濕な處がある、柳河、板津は全部非常に濕潤な土地斗りである、此處は筑後、矢部兩川から引來つた堀川が

一面に流れて常に濁水を溜めて居るから、地下水が甚だ高い、大牟田市は壤質埴土と壤質砂土の處とがある、其壤質砂土である、東部又は西部の方は少々乾燥して居るが、南部は埴土であるから著しく湿つて居る、尙ほ詳細は左表に就て見られたい

地名	種別 土地の乾濕					地質
	中部	東部	西部	南部	北部	
門司	濕	乾	乾	乾	濕	壤土 (第四紀新層)
小倉	乾	乾	並	並	乾	壤土 (第四紀新層)
八幡	乾	乾	並	乾	乾	壤質砂土 (第四紀新層)
戸畑	低地濕 臺地乾	低地濕 臺地乾	乾	低地並 臺地乾	並	壤質砂土 (第四紀新層)
行橋	乾	乾	濕	乾	並	壤質砂土 (第四紀新層) 砂質壤土 礫質埴土
後藤寺	乾	乾	並	乾	乾	埴土 (第四紀新層)
直方	濕	濕	並	濕	濕	埴質壤土 (第四紀新層)
飯塚	並	並	稍濕	濕	濕	埴質壤土 (第四紀新層)
芦屋	乾	乾	乾	乾	乾	砂土 (第四紀新層)
福岡	並	並	並	稍濕	濕	壤質砂土 (第四紀新層) 砂土
前原	乾	乾	乾	乾	並	壤質埴土 (第四紀新層)
大宰府	乾	乾	乾	乾	乾	砂質壤土 (第四紀新層)
甘木	乾	乾	乾	稍乾	乾	礫質壤土 (第四紀新層)
吉井	乾	稍乾	稍乾	稍乾	乾	壤土 (第四紀新層)
久留米	乾	乾	乾	並	乾	壤質埴土 (第四紀新層)
福島	並	並	並	並	並	埴質壤土 (第四紀新層)
榎津	濕	濕	濕	濕	濕	埴土 (第四紀新層)
柳河	濕	濕	濕	濕	濕	埴土 (第四紀新層)
大牟田	並	稍乾	稍乾	濕	並	壤質埴土 壤質砂土 (第四紀新層)

10 地方病が在るか無いか

地方病又は風土病と稱するものは、昔しは特殊なものか随分澤山に在つて、夫れか又可なり猖獗で、危険視せられて居たが、漸次に交通機關が發達して、彼是の往來が盛んになるに伴れて、段々に其境界が取り拂はれて昔の風土病も、今は風土病ではなくなり、普通の疾病と少しも異ならざるに至つたものか寡くない、例は脚氣病なども昔は都會病の様に言はれて居たが、今では如何なる僻遠な土地へ行つても、全く脚氣病のない處はない、有名な福岡の疫痢など

も今は本場よりは、却て他の縣に於て危険を感ずる位である、是等は醫學の進歩するに従ひ其病原も判然し、治療法や豫防法なども段々に研究せらるゝから罹病者も寡くなれば全治者も多くなる譯である、特に福岡は醫學の最高學府もあり、大家や名醫も澤山に居るから、今日では福岡に在住する人は最早夫れ程疫痢は恐れなくなつた

然し他縣から新に移住せんとする人の爲めには、本縣の疫痢などは、確に恐怖せらるゝものゝ一つに相違ない、新に來任せられた人が福岡は疫痢の本場で危険であるから、子供は前任地へ残して來たと云ふ様な話は、屢々聞さるゝことであるが之れは甚だ遺憾なことである、疫痢が眞の傳染病として取扱はるゝに至つたはつい近頃のことであるから、開業醫の方でも、傳染病としての疫痢は餘り重く見て居ないから、兎角届出でが不正確で眞の患者數が判らない、然れども決して室扶斯や赤痢の様に、患者の多いことはない、又其死亡率も實際は左程大きくはないが、統計上では非常に大きくなつて居る、夫れは患者の方で届出でを怠つて居る證據で、輕症のものは大概隠蔽して自宅で治療を爲し、重病者か又は死亡したものに限り、届出でるから死亡率が大變大きい様に見へるのである

何縣でも多少其地方に限り、特發する疾病のないことはない、福岡縣は氣候が温和で四季の變りも寡なく、健康上には誠に申し分のない處であるが、唯前にも述べたが如く全体に飲料水が不良であることが著しい缺點である、地方病や風土病の多いは、此井水の劣悪なるに原因して居ることが多い様である、然し飲料水の問題も近年は主なる都市には、大概上水道が布設せられ、又近き將來には逐々下水道も布設せらるゝの狀況であるから、市民の衛生状態は著しく、改善せられて地方病や傳染病は漸減する有様である、夫れで目下本縣の地方病として一般から注目せられて居るは、夏季に於ける小兒の疫痢病、炭坑地方に流行する「ワイル」氏病及久留米市附近に特發する、吸血病位のものである、腸室扶斯の如きも炭坑地方では、一種の地方病の如く見られて居て、何處に行つても其勢が可なり猖獗で患者數から見ても、死亡數から見ても此方が前記の地方病に較べて遙に注意警戒を要すべきものがある、其外脚氣や結核病の如きも地方に依り、又職業に依つて可なり高率の患者を出して居るか、特記する程のことはない、今前記の地方病に就き其概況を記すると次の通りである

疫痢は近年に至り法定傳染病の内に入れられたが、傳染性は赤痢や室扶斯

程には猖獗ではない、此病氣は主に小兒に起る病氣で、三四歳から十三四歳までの子供に多い、特に六七歳が最も危険である、乳兒は此病氣に罹ることは殆どない、症状は種々あるが多くは突然發熱して四十度以上に上り下痢を起す、下痢は初回は烈しくないが、二回、三回と次第に烈しくなつて、丁度淺海草若でも溶いた様な粘液便を下し、又血液を混ざることがある、最初から嘔吐を催したり、痙攣を起したりするものは、餘り症状がよくない、身體は著しく倦怠し囁言を發するに至り、重症のものは八時間乃至十二時間位で、心臟麻痺を起して仆れるのである。病因は寝冷から來るものが多い、又不消化物の攝取、過飲暴食から來るものも多い、夫れで夏は脂肪質の多いものや、果物などは多く與へぬがよい、枇杷などは特に悪いと言はれて居る、應急手當としては早く昆麻子油の様な下劑を飲ませ同時に灌腸をして腸の汚物を取り出すがよい、實際早く此手當を施すと、甚しく悪性のものでない限りは、大概生命を取り止めることが出来る、此病氣は瀰胞性腸炎の一種で、腸の一部に炎衝を起し、膨れ上つて粘液が出來、夫れが毒素を發生して腸を胃す様になるから、四時間置き位に引續き下劑を服用させて、其粘液を腸内に蓄藏せぬ様に排泄さして仕舞ふが一番よい様である

疫痢は本縣斗りではない熊本、大分、愛知、などでも昔から早手又は急性と稱して、一般から恐れられて居た地方病である、今では各府縣に擴がつて之に類似した病氣が澤山にある、福岡縣では今でも年に依つてはかなりの患者があるが、又極めて少ないこともある、大抵は應急手當を心得て居るから、急變のない限りは大概全治する、而し何分急性な消化器病であるから、醫師を招く前に家庭に於て、一通りの手當を施すが何よりも大切である、近頃九州帝國大學醫學部で、豫防注射液の發明があつた、夏初めに四五回注射して置くと、大概は罹らなくして済む、若し罹つても極めて輕症であるとのことで、希望者が甚だ多い夫れが的確であれば、誠に疫痢病者に對する一大福音である

疫痢に對する氣象の關係は未だ詳らかではないが、氣温が高くして湿度の大なる、所謂蒸暑い日に頻發することは確かな様である、福岡では六月の末から七月の初めに當り、梅雨の將に明けんとする頃より、急に氣温が上昇して來て非常な暑さを感じる、此時節は丁度風が弱くて湿度の大なる時であるから、特別に蒸暑くして夜中に小供などは、夜具の外に匍ひ出して寝冷を起したり、腸胃を害したりすることが多い、夫れが誘因となつて此病氣を引起すから、蒸暑い

夜は大に警戒を要するのである、寒い時でも偶には疫痢に罹ることがあるが、大概は平均氣温が二十度以上、最高氣温が二十五度以上の時季で、即ち六月の中月から九月の下旬までの間である、此時は湿度が八十%乃至八十三%で、年中で湿度の最も大なるときである、又氣温の較差は四五月又は十、十一月頃の氣候の最も温和なるときが、最も大なる時で十度半乃至十一度半に及ぶが、疫痢の猖獗な時季は八度内外で、之より二度乃至三度餘も小さい、即ち晝夜の温度の差が小さいから、相當の寝衣を纏つて居れば夜分なども成べく開放して、外氣を自由に流通せしむるがよい、無理に雨戸を締め切つて置くと、蒸暑くて却て夜具の外に飛び出し、寝冷へをして此病氣を引起すことがある、夏の感冒や腸胃病が却て高温の夜に多いは之が爲めである

今本縣下に於ける、大正元年から全十年に至る、十年間の疫痢患者及其死亡率を掲げると次表の通りである

類別	大正年次	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	計
患者		443	553	445	631	659	471	558	441	406	371	4,978
死者		222	327	293	367	421	285	344	289	287	228	3,063
死亡率%		50.1	59.1	65.8	58.2	63.9	60.5	61.6	65.5	64.4	61.5	61.53

即ち平均死亡率は六十一%五で、法定傳染病の内では死亡率が最も高い、虎列刺に較ぶるも二%方大である、之は前にも述べたるが如く、輕症者が届出を怠るからで、實際の死亡率は之より遙に低下してをる

更に大正二年より、全十年に至る九ヶ年間の縣下主要都市に於ける、疫痢患者數を掲げると次の通りである

地名	大正年										計
	2	3	4	5	6	7	8	9	10		
門司	28	28	36	29	33	51	34	18	18	275	
小倉	6	10	18	64	40	67	31	30	39	305	
八幡	3	4	7	21	15	18	21	26	6	121	
行橋	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
後藤寺	1	—	1	—	1	—	—	—	—	3	
直方	4	1	5	10	4	5	8	—	1	38	
飯塚	4	—	—	2	—	2	—	1	—	9	
芦屋	1	—	—	2	—	—	—	—	—	3	
福岡	102	67	87	91	47	45	44	49	46	578	
前原	—	—	5	3	1	2	—	1	2	14	
若松	23	40	27	20	12	19	10	7	7	165	
太宰府	2	2	—	2	1	—	2	1	—	10	
甘木	2	—	7	4	4	6	11	10	8	52	
吉井	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
久留米	1	6	5	11	7	13	4	11	9	67	
福岡	—	1	3	1	3	—	—	—	—	8	
柳河	2	1	—	2	—	4	2	—	—	11	
榎津	2	—	—	2	3	1	1	4	—	13	
大牟田	27	5	2	3	8	22	2	8	2	79	
折尾	—	2	2	1	2	—	1	—	1	9	
戸畑	7	8	5	6	9	8	4	3	2	52	

疫痢は夏季に發生する消化器病であることは申すまでもない事であるが、冬季に於ても點發することは珍らしくない、今月別にて表示すると次表に示すが如く、冬季の死亡率も可なり高い、然し疫痢と赤痢とは其症狀が餘程能く類似して居るから、區別することが困難な場合が多い、冬季に於ける死亡率の高いのは矢張重症者でないに届出でぬからである

種別	月												年
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
患者	2	10	4	12	19	45	164	245	139	88	32	14	777
死亡者	1	4	2	12	11	32	116	154	93	61	25	5	516
死亡率%	50	40	50	100	58	67	71	63	67	69	78	36	66.4

又疫痢患者は乳兒には殆どなく、三四歳より漸次に増加し六七才が最も多く十歳以上に及ぶと又著しく減少するが、十六七歳のものにも偶發することがある、今年齡別として一年間の平均患者數及死亡者數を示すと次の通りである

種別	年齢別			
	五年未満	五年已上 十年未満	十年已上 十五年未満	十五年已上
患者	192	162	26	9
死亡者	135	111	10	3
死亡率%	35.2	34.1	18.6	13.9

「フイル氏病」フイル氏病は一名炭坑病とも唱へて居る、炭坑内に特發する一種の風土病で、近頃は何處の炭坑でも該病に罹つたものは、之を公傷として取扱つて居る、即ち名譽の戦傷者と云ふ格である、醫療の手當は勿論家族の救助一切を坑主の方で引受けて居る、實際此病氣は坑内で罹ることが多いが然し絶對的のものではない、坑外に居住し全然炭坑業とは関係のない農夫などで此病氣に罹るものも多いが、格別恐れる程のものではない、一体此病氣は陰濕な土地に生息する病原菌が、鼠の媒介に依つて坑内に運ばれ、暗黒なる場所にて繁殖増加し、夫れが坑内に従業せる坑夫の体内に入つて、發患さすもので、坑外の清燥なる場處に住居するものは、該病に冒さるゝ様なことは稀である、症狀は種々あるが、概ね發熱が高く、黄膽の症狀を現はして來るものが多い、而して遂に心臟痙攣を起して仆れる、患者は老、幼年者には尠く壯年者に多い之れは炭坑従業者には壯年者が多いからでもあらう、死亡率は近年著しく低下して、十三%内外に止まつて居る、豫防法としては「ワクチン」注射が最も有効である、各炭坑では近頃は春秋二季に施行するから、著しく罹病率を減じて來た、一度注射して置くと大抵三年間位は有効である、該病の最も猖獗なるは後寺で、毎年數十名の患者が絶へない、全地の三井炭坑醫局では熱心に該病藤に對する研究をして居る、之に亞くは飯塚で同所も炭坑業に關係するものが多いから、毎年十數名の患者がある、若松、門司等は、石炭の集散其他の關係で炭坑地との往復が、頻繁であるから病菌が散布せられて居る、濕氣の多い土地に住居して居るものには、該病に罹るものが毎年數名ある、若松の如きは、大正十年より十一年に亘り、十數名の患者が續發して大に憂慮せられたことがあつたが、患者は概ね農家で肥料の關係から來ると言ふことであるが、裸足で泥田や溝渠を跋渉するから、自然に感染するのである、病菌は炭坑地方の濕地には其處、此處に存在して居るものと考へねばならぬ
今最近十年間に於ける、各郡市別の月別患者表を示すと左の通りで、都市では八幡が多く、郡別では田川が卓越して多い、之に亞くは鞍手、嘉穂の二郡で全

く患者を見ない郡市も五六ある。

「ワイル」氏病月別患者表

地名	月												年
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
小倉	—	—	—	—	1	—	1	—	3	1	—	1	7
八幡	1	1	—	2	1	1	4	5	6	4	3	1	29
若松	2	—	—	—	1	—	3	1	2	4	1	1	15
福岡	—	—	—	—	—	2	2	2	7	3	3	1	20
久留米	—	—	—	—	—	1	1	2	5	2	1	—	12
宗像	—	—	1	—	—	—	1	1	—	1	1	—	5
遠賀	2	—	2	2	4	3	4	10	15	12	5	3	62
鞍手	4	2	8	10	11	7	24	37	37	28	12	9	189
嘉穂	4	2	3	7	7	8	9	31	47	33	15	7	173
三井	1	1	—	—	—	—	—	4	6	9	2	—	23
三諸	—	—	—	1	—	2	3	6	3	2	2	—	19
八女	1	1	1	2	1	2	3	5	12	6	2	—	36
浮羽	—	—	—	1	1	3	1	8	16	17	2	1	50
企救	—	—	—	1	2	2	3	4	3	4	1	1	21
田川	9	12	14	13	22	22	42	52	67	45	23	22	343
京都	—	—	1	—	—	—	1	5	5	3	1	—	16

職業別患者數

	男		女		計
	男	女	男	女	
工業	42	6	—	—	48
下男下女	1	8	—	—	9
僧	3	—	—	—	3
官公吏	9	1	—	—	10
農	160	46	—	—	206
炭坑採	287	82	—	—	369
理髮	2	2	—	—	4
日傭業	13	1	—	—	14
商業	54	17	—	—	71
漁	2	1	—	—	3
學生	12	2	—	—	14
舟乘	6	—	—	—	6
荷馬車挽	3	1	—	—	4
教員	2	1	—	—	3
代書	1	—	—	—	1
會社員	5	1	—	—	6
車夫	2	1	—	—	3
仲仕	2	1	—	—	3
鍼灸	—	1	—	—	1
無職	6	4	—	—	10

年齢別患者數

	男		女		計
	男	女	男	女	
十才以下	—	—	8	5	13
二十才以下	101	39	—	—	140
三十才以下	160	48	—	—	208
四十才以下	137	39	—	—	176
五十才以下	115	26	—	—	141
六十才以下	54	10	—	—	64
六十才以上	31	7	—	—	38
計	606	174	—	—	780

更に之を職業別に分類すると左表に示すが如く、炭坑採が最も多く之に亞ぐは農業で、商工業に従事するものも可なり多い、其他各種の職業に亘つて患者を出して居るが、一般に男子の方が女子よりも、患者の割合が著しく多い様である
 又年齢別にして見ると、二十才以上三十才以下の壯年者が最も多く、六十才以上の老年にも可なり多いが、十才未満の少年には割合に尠ない、詳細は左表の通りである

吸血病 此病氣は久留米市附近に限られて猖獗を極むる甚だ諱むべき一種の地方病で、病原體は俗に宮入貝(蜃貝)と稱する小貝の中に棲息して居る、夫れが溝や泥河の中で繁殖して、人体の脚部其他の毛孔から侵入して、体内に入り腸中に生活して、自ら營養分を攝取するから患者は漸次營養不良に陥り、身體の發育を阻害せられ、充分の發達を遂ぐる事が出来なくなる、夫れ故に該病蟲の最も多く棲息する地方では、住民の體格が頗る劣悪で、今迄徴兵検査に一名も合格者を出さないと云ふ不名譽な町村もある、然れども該病は極めて慢性的のもので、罹病者は表面上何等の苦痛をも訴へないから、自然に其豫防警戒を怠り其病菌を驅除撲滅することが甚だ困難である、近頃に至り此劣悪な體格が子女の縁談にも、影響すると云ふ状態に陥つたが爲め、一部の村民は大に覺醒し來つて、病菌の媒介者である、宮入貝の驅除に注目するに至り、關係町村では相當の代價を以て、之を購入して大に其撲滅に勉めて居る、一方には又糞便の検査を勵行して保菌者を發見して、身體内に宿れる病菌を驅除することゝなし相俟つて其根絶を期せんとして居るが、因襲の深き容易に其目的を達成し得ざる有様である、現時該病の最も多き地方は、久留米市長門石及合川村の一部、宮の陣村の一部及佐賀縣三養基郡旭村の一部である

II 傳染病は多いか少ないか

本縣は三面海を圍らし海運の便が頗る、至大で内地の諸港は固より、支那南洋方面との交通も頻繁であるから、種々の病菌なども輸入せらるゝの恐れがある、特に門司、若松、福岡、三池等の如き開港地では年に依つては、多少蔓延するの心配もあるが、其他の都市では何等危惧する處はない、輸入病菌の内最も恐るべきは虎列刺、黒死病、痘瘡等であるが是等の惡疫に對しては、市民の警戒最も嚴重で消毒や豫防の方法なども、充分に能く心得てゐるから、蔓延する様なことは滅多にない、偶々數名の患者を出す様なことがあつても、夫れは概ね直接海運業に關係ある海員か、又は仲仕業者の如きものに限られてゐる、一寸考へると石炭の搬出や、物貨の集散の劇しい港灣であるから、傳染病なども絶へず點發する様に思はれるが、事實は決してそうでない、衛生状態は舊町村などよりは寧ろ遙に良好である、夫れは新進の都市であるから、種々の新しき設備が整ふて、道路なり家屋なり又上下水道なども、立派に完成せられてゐる上に衛生思想なども、幾分向上してゐるから、豫防法なども徹底的に勵行するか

らである、然し夫れは人爲的に防禦が足つてゐるからであつて、病菌其物の寡
ない譯ではないから、各自の警戒は元より大に必要である

本縣の傳染病の内最も多きは、腸窒扶斯患者で各都市を通じて、著しく卓越し
て居る、最近十年間の調査に依ると、一年間の患者總數は二千六百三十九人で、
死亡者五百三十四人であるから、死亡率は二十%に當つてゐる、斯く腸窒扶
斯患者の多いことは、東京を除くの外本邦中當縣に及ぶものはない、夫れは矢
張炭坑地は土地が濕潤である上に、比較的的低級な労働者が多いから、従つて罹
病者が多い譯である、夫れで腸窒扶斯は炭坑地方では、一種の準風土病である
かの如くに謂はれてゐる、之に亞くは赤痢患者で在つて、全十年間の統計に依
ると、一ケ年間の患者總數は七百九十九人で、死亡者は百四十七人であるから
死亡率は十八%四を示し、腸窒扶斯よりは死亡率が二%だけ低い、更に之に亞
くは疫痢で在つて、一ケ年間の患者總數は四百九十八人、全死亡者三百六人で
あるから死亡率が六十一%五であつて、虎列刺などよりも遙に死亡率が高い、
斯く疫痢の死亡率が大なるの理由は、疫痢と赤痢とは症狀の區別し難きものが
あるから、急性な小兒の赤痢は大概疫痢として取扱はるゝ傾きがある、又輕症
にして早く全治したものは、届出を怠る様なことがあるから、赤痢の死亡率が
低く疫痢の死亡率が自然に高くなつてゐる、日本全國でも赤痢の患者數は、割
合に福岡縣が寡ない、此外虎列刺が一ケ年間に、平均二百七十人あるが、虎列
刺は大正元年と大正五年とに流行した爲めで、全く發患しない年もあるから一
定しない、實布埜利亞は一ケ年間に平均三百十二人あるが、之れも格別多い方
ではない

今大正元年より全十年に至る、十ケ年間の毎年の傳染病患者數及死亡者數を表
示すると次の通りである

年 別	大正 元年	大正 二年	大正 三年	大正 四年	大正 五年	大正 六年	大正 七年	大正 八年	大正 九年	大正 十年	計
虎 列 刺	患者 816 死者 533 % 65.31	— — —	— — —	— — —	1,006 523 51.98	17.4 117 66.85	— — —	200 132 66.00	499 306 61.32	7 4 57.14	2,703 1,615 59.74
赤 痢	患者 768 死者 108 % 14.06	589 92 15.61	843 178 20.52	1,772 371 20.92	1,098 160 14.57	444 96 21.62	546 112 20.51	929 181 19.48	573 106 18.49	429 73 17.01	7,991 1,472 18.41
腸 窒 扶 斯	患者 1,684 死者 345 % 20.48	1,397 303 21.68	1,903 386 20.28	2,983 619 20.75	3,522 622 17.66	1,792 367 20.47	1,941 430 22.15	5,420 1,136 20.95	2,836 532 18.76	2,914 564 19.35	26,391 5,304 20.09
バ ウ チ フ ス	患者 114 死者 5 % 4.38	174 21 11.36	190 25 13.15	251 29 11.55	289 22 8.17	221 25 12.31	131 17 12.97	254 26 10.23	173 14 8.05	212 21 9.90	19,899 2,055 10.30
實 布 埜 利 亞	患者 210 死者 101 % 32.58	384 134 34.89	254 114 32.20	358 100 27.93	331 92 27.79	380 132 34.73	371 111 29.91	269 78 28.99	185 68 36.57	178 62 37.64	3,120 991 31.79
痘 瘡	患者 — 死者 — % —	2 — —	43 15 34.88	— — —	— — —	197 41 20.81	279 53 18.99	36 4 11.11	252 65 25.79	120 37 30.83	929 215 23.14
猩 紅 熱	患者 3 死者 — % —	4 1 25.00	1 — —	3 1 33.33	7 1 14.28	7 3 42.85	1 — —	6 — —	0 1 16.66	4 1 25.00	42 8 16.66
流 行 性 腦 炎	患者 — 死者 — % —	— — —	— — —	— — —	— — —	— — —	14 8 57.14	590 274 46.44	176 86 48.86	63 28 44.44	843 396 46.97
疫 痢	患者 443 死者 222 % 50.11	553 327 59.13	445 293 65.84	631 367 58.16	659 421 63.88	471 285 60.50	558 344 61.64	441 289 65.53	406 287 64.37	371 228 61.45	4,978 3,063 61.53
計	患者 4,138 死者 1,314 % 31.75	3,103 878 28.29	3,779 1,006 26.62	5,999 1,487 24.78	6,892 1,841 26.71	3,687 1,066 28.91	3,841 1,075 27.98	8,145 2,120 26.02	5,105 1,465 28.69	4,298 1,018 23.68	48,987 13,270 27.08

更に本縣下の七市及全郡市に於ける、赤痢、疫痢及腸窒扶斯病に就き、最近五
ケ年間に於ける、一ケ年の平均患者、死亡者及死亡率を掲ぐると左の通りであ
る

一ヶ年間の平均患者数及死者数

地名	赤 痢			疫 痢			腸 室 扶 斯		
	患者	死者	死亡率	患者	死者	死亡率	患者	死者	死亡率
門 司	15	4	26.7	31	21	67.7	82	28	34.1
小 倉	5	0.4	8.0	41	21	51.2	62	14	22.6
八 幡	33	7	21.2	17	11	64.7	79	27	34.2
若 松	12	2	16.7	11	9	81.8	46	13	28.3
福 岡	41	12	29.3	46	33	71.7	17.7	28	15.8
久 留 米	3	0.4	46.7	9	8	88.9	50	10	20.0
大 牟 田	13	2.4	18.5	8	6	75.0	12.1	21	17.4
全 郡 市	584	11.3	19.3	44.9	28.7	63.9	298.1	60.6	20.3

上表に示すが如く本縣に於ける傳染病の内特に著しいは、腸室扶斯及赤痢である、此病氣は虎列刺や黒死病などは違ひ、熱帯地方からの輸入病菌に依つて猖獗を極むる譯でないから、年に依つて多少の消長はあつてもさう著しい違ひはない、主に其地方の風土、氣候に依つて支配せらるゝものである、而し斯る地方的傳染病でも、其年の夏季の氣候の適否が直に病菌の盛衰に關係すると云ふではなくして、冬季已來の氣候の變化に遠因することもあり、又病菌の潜伏の状態や、衛生上の設備の如何等にも關係があるから、到底簡單なる氣候の變化のみにて、病勢の消長を論ずることは出来ないが、然し其地方に於ける氣候の良否は確に是等の傳染病發生に對する、有力なる一要素であるから、夏季に於て常に猖獗を極むる赤痢や腸室扶斯の死亡数と、氣象と如何なる關係があるかを、調査するは決して無用のことではない

最近十年間の内腸室扶斯の最も猖獗を極めたは、大正八年であつて、患者總数は五千四百二十八人、内死亡者千百三十六人で死亡率は二十一%に上つてゐる、之に反して最も寡なかつたは、大正二年で患者總数が千三百九十七人、内死亡者三百三人で死亡率は二十一%七である、此兩年を較べると、患者数は大正二年は大正八年の四分の一に過ぎないが、死亡率は兩者に於て格別の違ひがなく、却て大正八年の方が小さくなつてゐる、更に赤痢に就て見るに、大正八年は多い方で、大正二年は寡ない方ではあるが、最多は大正四年の患者千七百七十二人、死亡者三百七十一人で死亡率二十%九であつて、大正八年に倍加してゐる、最少は大正十年で患者數四百二十九人、死亡者七十三人で、死亡率十七%であつて、大正二年よりは二割方少ない、斯く全じ夏季に流行する傳染

病でも其發生の場所を異にし、蔓延の方法が異なるが爲めに、實際の患者数は年に依り著しき差違がある、即ち赤痢の如きは若し一地方で豫防の方法を誤り病毒を廣く撒布すると、附近の町村が擧つて其慘害を蒙むることになる、川の上流で緩かな汚物を洗濯した爲め、下流地方で猛烈なる流行を見たことこの例は屢々ある、元來赤痢は沼湖等に生活する「アミーバ」と稱する一種の微生物が飲料水の媒介に依つて、患者の腸中に入り病發するので、其時季は専ら夏より秋の央までで七、八、九の三ヶ月間が卓越して多い、腸室扶斯も「バチルス」が濕潤な土地に繁殖し、飲食物の媒介に依つて人體内に侵入し終に血液中に入りて發病するに至るので、其時季は勿論夏季に多いのであるが、赤痢程には顯著ではない、最も多い八月と最も少ない一月とを較べても約二倍位に過ぎない此疾病は全年を通じて止む時なく、又縣下を通じて多少の發生を見ない所はない位で最早今日では普通病の如く見做されて居る

今大正元年から全十年に亘る各年の是等の患者数と、氣温、湿度、雨量等の氣象要素とを對照すると左の通りである

患者数と氣象要素との對照表

種 別	大 正 年										平均
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
腸室扶斯患者數	1,684	1,397	1,903	2,983	3,522	1,792	1,941	5,420	2,835	2,914	2,639
全死亡者數	345	303	386	619	622	367	430	1,136	53.2	56.4	530
赤痢患者數	768	589	843	1,773	1,098	444	546	929	573	429	799
全死亡者數	108	92	173	371	160	96	112	181	106	73	147
平均氣温	14.7	14.3	15.6	15.3	15.6	14.2	14.4	14.9	15.0	14.5	14.9
最高氣温	19.8	19.7	20.8	20.2	20.8	19.0	19.2	20.1	19.9	19.6	19.9
最低氣温	9.8	9.4	10.8	10.7	11.0	9.9	9.8	10.1	10.4	9.9	10.2
平均較差	14.9	15.3	15.1	16.4	15.5	13.1	15.6	12.9	12.9	13.4	14.5
濕 度	79.2	78.8	78.6	79.2	78.5	77.2	78.2	78.7	80.2	78.5	78.7
水蒸氣張力	10.9	10.6	11.6	11.5	11.7	10.9	10.8	11.1	11.4	10.9	11.1
降 水 量	1592.4	1261.4	1820.3	1901.0	1676.8	1676.7	1838.0	1314.8	1369.3	1607.6	1605.8
日 照 時 數	1933.6	2052.7	2050.6	1951.2	2096.0	1906.1	1919.2	2056.1	1888.7	1990.6	1984.5

更に本縣の主要都市に於ける、腸室扶斯患者の最近九ヶ年間に於ける、年別發生數を見るに年に依り、又地方に依り多少異なつてゐる、即ち大正二年は各地共に其發生が寡ないが、全三年は大牟田に最も多く小倉、八幡は甚だ寡ない、四年は門司に多く福岡之に亞ひて多かつた、五年には小倉、八幡は非常に多かつたが、門司、若松は寡なく、南部では板津、柳河多く大牟田は割合に寡ない

六年は之に反して大牟田に多く其他に寡ない、又八年は福岡に多く後藤寺門司等之に亞ひで多く飯塚、久留米等も、未曾有の猖獗であつた、九年は福岡は頗る多かつたが、其他は少なく門司は三分の一にも足らなかつた、十年は福岡、大牟田は未曾有の多發であつたが、門、倉、若、幡、方面は頗る寡なかつた、斯様に縣下でも發生數に著しき消長のあるは、氣候已外に病菌の蔓延を助長すべき或る副因の存在するが爲であつて、未だ充分に衛生思想の徹底しない地方では、些少の過失から意外の流行を醸すこととなるからである

今住民千人に對する患者數の割合を見るに最も多いのは、後藤寺の二十四人四で、全處が腸室扶斯病を準風土病と見做してゐるも無理ならぬ事である、之に亞くは小倉の十八人五で、之よりは遙に劣つてゐる、更に之に亞くは順次に榎津の十六人九、大牟田の十五人一、戸畑の十四人九で、福岡は割合に寡なく十二人三で第七位に當つてゐる、門司は更に少なく九人九、八幡は八人三であるが、久留米は八人二で市としては最少率を示してゐる、蓋し腸室扶斯は専ら濕潤なる地方に頻發する疾病であるから、久留米や八幡の如く乾燥せる土地には其患者の寡ないのは當然である、遠賀平原の如き炭坑地は孰れも第三紀の粘土層であるから、排水が不充分で著しく濕潤である上に、飲用水が頗る劣悪であるから、自然腸室扶斯患者なども多い譯で何も炭坑業其物が直接に關係のある譯ではないが、其地方の風土が悪く病菌の繁殖を催進するが爲である

今大正二年から十年に亘る九ヶ年間に於て本縣の主要都市に現はれた腸室扶斯患者の年別表を掲げると次の通りである

腸室扶斯患者年別表 大正自二年九年間
至十年

地名	大正二年		大正三年		大正四年		大正五年		大正六年		大正七年		大正八年		大正九年		大正十年		計	人口千人ニ對スル患者數	
	眞症	疑似	眞症	疑似	眞症	疑似	眞症	疑似	眞症	疑似	眞症	疑似	眞症	疑似	眞症	疑似	眞症	疑似			
門司	34	10	56	14	100	21	88	1	74	1	64	2153	6	33	2	75	1	672	58	9.9	
小倉	11	4	19	1	61	34	177	33	39	12	28	2110	2	56	3	58	1	559	91	18.5	
八幡	13	9	15	14	59	16	124	16	37	28	51	5140	8	49	2	71	—	559	98	8.3	
若松	44	5	37	7	77	7	38	4	49	—	43	1	68	4	22	—	45	—	423	28	10.7
戸畑	11	—	9	6	14	2	50	14	30	7	17	—	69	3	25	2	58	—	283	34	14.9
折尾	3	—	2	—	6	—	21	1	2	—	3	—	15	2	5	—	4	—	61	3	8.7
行橋	—	—	—	—	5	—	1	—	1	—	—	—	12	—	3	—	—	—	22	—	2.8
後藤寺	22	—	38	—	60	—	93	—	52	—	63	—	180	—	52	1	44	1	604	2	24.4
直方	13	5	7	1	8	31	6	1	4	—	6	—	12	1	3	—	3	1	60	11	3.9
飯塚	8	5	30	6	17	5	21	4	7	—	31	1	91	3	155	7	33	1	293	32	13.7
芦屋	7	1	5	—	7	1	4	1	1	—	5	2	11	1	6	2	4	—	50	8	7.1
福岡	75	6	41	11	97	14	12	1	57	2	70	1	233	7	24	7	80	1	1189	50	12.3
前原	—	—	1	—	1	1	4	1	—	—	2	—	2	—	4	—	8	—	22	2	5.2
太宰府	—	1	1	—	9	—	1	—	2	—	9	1	13	—	9	—	3	—	47	2	10.1
甘木	—	—	2	—	—	—	3	—	15	4	—	—	10	—	—	—	2	—	32	4	5.3
吉井	—	—	—	—	9	—	1	—	1	—	—	—	17	—	—	—	1	—	29	—	7.4
久留米	15	2	12	2	39	3	44	6	40	7	8	14	101	20	19	5	30	3	308	62	8.2
福島	—	—	111	1	2	—	6	1	2	—	5	—	—	—	1	—	2	—	27	2	5.0
柳河	1	—	1	—	3	—	18	4	—	—	5	—	4	—	5	—	—	—	37	4	6.1
榎津	—	—	20	—	18	18	57	3	13	1	2	2	11	—	45	—	20	—	186	24	16.9
大牟田	37	6	25	18	75	19	72	15	99	11	52	4	121	11	69	6	17	11	867	101	15.1

更に月別患者數を見るに、年に依りて多少の相異はあるが、概ね一月か最も少なく夫より徐々に増加するも、四月は僅に寡なく五月より急に増加し八月に至りて最大に達す、夫より順次に減少するが、十一月よりは急に衰退して一月の最少に至るのである、然し年に依つては随分甚しく違ふ場合がある、大正十年の如きは、一月乃至三月は甚しく猖獗を極めたが、四月は急に減少して半分位になつてゐる、之に反して八年は一二月は寡なくつて、三四月か著しく多い斯の如く年に依つて發患數に著しき變化のあるは、其年の氣象に關係することが甚大である

又月別死亡率を見るに十一月、十二月は最も大きく、二十六%餘を示し一月は最も小さく、十二%餘に止まり其半數にも及ばない、三、四月は再び多くして二十%を超へてゐるが、五月乃至八月は割合に小さい、特に六月は一月に亞ぐの最小であるが、發患數の多い月が却て死亡率が小さい結果を示してゐる、之れは格別病菌が悪化した譯ではなく、死亡者は大抵發患してから三四週間後に

現はれるものであるから、患者数の最大と死亡率の最大とは、普通一ヶ月違ひ位になつてゐる、詳細は左表に示す通りである

大正 自六年 至十年 腸室扶斯患者月別表

年	月	患者数												計	死亡率
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
大正六年	患者	85	63	96	54	82	95	193	219	243	177	178	65	1,650	
	死者	14	11	14	8	20	19	37	40	47	44	42	37	333	
大正七年	患者	112	125	94	98	140	111	140	268	299	174	132	117	1,810	
	死者	18	18	19	19	30	17	34	54	62	56	43	28	398	
大正八年	患者	250	325	425	472	440	517	547	622	575	346	294	240	5,053	
	死者	37	73	88	109	94	101	110	104	120	88	65	85	1,074	
大正九年	患者	117	89	122	134	195	361	341	322	257	248	193	260	2,639	
	死者	14	14	20	20	36	41	66	68	50	39	56	64	488	
大正十年	患者	251	219	214	130	177	262	303	348	314	238	176	175	2,087	
	死者	20	43	56	25	26	39	44	69	75	60	53	39	548	
計	患者	815	821	951	888	1,034	1,346	1,524	1,779	1,688	1,183	973	957	13,959	
	死者	103	159	197	181	206	217	291	335	354	384	258	253	2,481	
	死亡率	12.6	19.4	20.7	20.9	19.9	16.1	19.1	18.8	21.0	24.3	26.5	26.4	20.4	

次に赤痢患者の各町市に於ける年別表を見るに、最も多いは福岡で一年間の患者数は五十一人である、之に亞くは順次に八幡の二十九人、若松の二十一人、門司の十八人等であるが、後藤寺、柳河及榎津は最も少なく、九年間に總に一人の患者を出したのみ、而して人口千人に對する、九ヶ年間の罹病率を見るに前原の八人八が最も大きく、福岡の四人五之に亞き若松、行橋更に之に亞ぎて四人四を示す、八幡、門司、大牟田等は割合に寡なく二三人に止まり、久留米は最も寡なくて、僅に〇人四に過ぎない、各年に就て見ると大正二年は福岡が卓越して多く、若松、戸畑、大牟田等も稍々多かつたが、其他には殆どなく三年は若松、福岡が飛び切つて多く門司、福岡が之に亞ひで多く其他は少ない、四年は小倉に最も多く行橋之に亞き若松、福岡更に之に亞く、五年は福岡卓越して多く百三十二人を出したが、若松之に亞き三十四人を出した、六年は門司方面に寡なく、福岡、若松は比較的に多きのみ、七年は大牟田に多く八年は福岡のみ多く他は著しく寡少である、九、十年は八幡に於て著しく多發で、福岡之に亞くも門司、小倉、若松方面は甚だ寡なく、大牟田地方も亦寡ない、之を要するに福岡は大正五年を除くの外は各年を通して格別の違ひはないが、門、倉、若地方は漸次に患者を減少してゐる、詳細は別表の通り

赤痢患者年別表 大正 自二年 至十年

地名	大正二年		大正三年		大正四年		大正五年		大正六年		大正七年		大正八年		大正九年		大正十年		計	罹病率	
	真症	疑似	真症	疑似	真症	疑似	真症	疑似	真症	疑似	真症	疑似	真症	疑似	真症	疑似					
門司	3	6	15	10	16	14	22	2	12	3	11	6	17	6	8	4	8	2	112	53	2.2
小倉	—	—	6	2	49	10	12	8	3	4	7	5	2	2	1	—	1	—	81	31	3.1
八幡	—	3	9	5	23	17	17	18	5	4	6	3	15	3	52	11	63	3	190	67	3.2
若松	14	3	39	4	37	1	8	—	19	2	6	13	8	1	4	1	1	1	162	26	4.4
戸畑	11	5	11	3	4	2	19	4	13	2	3	1	6	2	2	2	1	—	70	21	4.3
折尾	2	—	—	2	2	3	2	2	1	—	—	—	1	—	—	—	—	—	9	7	2.1
行橋	—	—	1	—	28	—	3	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	1	34	—	4.4
後藤寺	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	0.0
直方	—	—	—	—	1	11	2	—	—	—	—	—	1	1	1	—	—	—	5	2	0.3
飯塚	—	—	2	—	1	—	4	—	—	—	1	—	1	1	—	—	—	—	9	1	0.4
芦屋	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
福岡	29	5	15	22	32	5	32	12	38	1	37	2	29	3	33	3	95	—	404	55	4.5
前原	—	—	—	—	5	6	2	—	—	—	—	—	7	1	12	4	4	—	30	11	8.8
太宰府	1	1	—	—	—	—	1	—	1	—	—	—	1	—	—	—	1	—	3	3	1.4
甘木	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	3	—	—	2	4	—	0.5
吉井	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1	—	—	—	2	—	0.5
久留米	1	—	—	—	—	—	4	—	2	—	5	3	1	3	—	—	—	—	7	12	0.4
福島	—	—	15	2	—	—	1	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	17	2	3.2
柳河	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	0.1
榎津	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1	1	0.1
大牟田	9	5	—	3	3	5	84	3	5	1	34	5	4	1	4	1	—	—	74	25	1.5

更に月別数を見るに、該病が七、八、九、十の四ヶ月間に於て卓越して多きことは明なる事實で、各年に就て見るも同様である、就中八月に於て最も多く、平均百三十四人の患者がある、夫から漸次減少して十二月より、翌年五月迄は甚だ少ないが、特に二月は最も少なく、平均僅に三人の患者があるのみで八月に較べると大變な違ひである、然るに死亡率は夏季よりは秋季に於て大きい、最大は十月の三十三%五、亞きは九月の二十八%六で、最も寡ないは一月の十一%一である、只二月に於て四十%を示してゐるは異例とする處である、全年の平均死亡率は十八%七であつて、腸室扶斯の死亡率に較べると一%七丈け小さい

今大正六年から十年に至る最近五ヶ年間に於ける赤痢の患者数、死亡者数及死亡率等を月別に示すと次の通りである

大正自六年至十年 赤痢病者月別表

年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
大六 正年 {患者	8	2	3	6	1	12	94	80	73	47	31	3	360
正年 {死者	2	2	—	2	1	1	10	11	25	13	7	—	74
七 年 {患者	5	3	2	3	11	12	77	149	81	38	26	5	412
年 {死者	—	1	1	1	3	2	12	20	24	12	6	2	84
八 年 {患者	2	—	—	1	2	40	211	164	173	125	78	11	807
年 {死者	—	—	—	—	—	4	20	27	57	28	13	2	151
九 年 {患者	2	4	2	4	7	11	126	167	102	58	21	12	506
年 {死者	—	2	—	—	—	—	13	27	26	15	3	1	87
十 年 {患者	1	6	12	4	16	13	56	122	67	42	13	7	359
年 {死者	—	1	2	—	2	2	6	23	10	5	6	2	59
計 {患者	18	15	19	18	37	88	564	672	496	310	169	38	2,444
計 {死者	2	6	3	3	6	9	61	108	142	73	35	7	456
計 {百分率	11.1	40.0	15.8	16.7	16.2	10.2	10.9	16.1	28.6	33.5	20.7	18.4	18.7

次に「バラチフス」に就て見るに、此疾病は腸室扶斯とは全く其症状を異にするから、發生する場所も自然に異なつてゐる、最も頻繁なのは大牟田市で毎年十四五人の患者を出してゐる、多い年になると三十人近い患者がある、此地方では地方病の一つに算へてゐる、其他の都市は之より遙に少ない、福岡の如きは、大正四年と全十年を除くと、一ケ年に纔に三四人に過ぎない、又腸室扶斯の猖獗なる後藤寺の如きも、殆ど該患者を見ない位である、門司、小倉、八幡等は割合に多い方であるが、夫でも一ケ年平均五六人に過ぎない、死亡率は腸室扶斯よりは更に低率で十%三に止まつてゐる

今大正二年から全十年に至る九ケ年間本縣の主要都市に現はれたる「バラチフス」患者の年別表を掲げると次の通りである

バラチフス患者年別表 大正自二年至十年九年間

地名	大正二年	大正三年	大正四年	大正五年	大正六年	大正七年	大正八年	大正九年	大正十年	計
門司	—	1	5	18	12	7	3	3	7	56
小倉	2	4	3	9	8	9	13	—	3	51
八幡	8	2	4	6	12	6	7	—	2	47
行橋	—	—	4	—	—	—	1	—	—	5
後藤寺	1	—	1	—	—	—	—	—	—	2
直方	1	1	2	—	1	—	1	1	—	7
飯塚	—	—	—	1	1	—	—	2	2	6
芦屋	2	3	—	—	—	—	—	—	—	5
福岡	2	1	11	—	4	1	5	9	18	51
前原	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
太宰府	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
甘木	—	—	—	2	30	1	—	—	3	36
吉井	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
久留米	—	—	—	—	—	—	4	1	—	5
福島	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
柳河津	—	—	—	2	—	—	—	—	—	2
榎津	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
大牟田	28	19	8	11	5	1	23	12	22	129
若松	1	—	—	2	3	2	1	1	—	10
戸畑	3	—	6	6	10	2	3	1	1	32
折尾	2	—	1	6	3	1	—	3	1	17

實扶埤利亞は殆ど一般的のもので、患者も廣く一樣に分布せられてゐる、年に依り固より流行の多少はあるが、夫れも著しい違ひはない、然し此疾病は主に十歳未満の兒童に發するものであるから、氣候の變化の峻烈なる年は多發を免れない、夫れで冬季一二月の頃には患者が最も多く、夏季七八月頃には最も寡ないで、約三分の一位のものである、普通に考へると、實扶埤利亞は冬季に限つた疾病の様態に考へてゐるが左様でなく、夏季でも死亡率が可なり高い、主要なる都市の内最も患者の多いは門司であつて死亡率も亦高い、同じ海岸でも若松は洞海湾に面し、北西に山を負ひ海風を遮つてゐるから、市内の氣候は幾分緩和せられ、呼吸器病者なども割合に寡ない

此外痘瘡が大正六年以來毎年の様に流行し、特に大正七年全九年の如きは、二百人以上の患者と五六十人の死亡者があつたが、其發生地は殆ど開港地に限られてゐて、内地には時々點發する位である、流行性感胃は大正七年十月本邦各地に襲來して非常の慘害を醸した、本縣も亦其侵害を受け住民の約三割は罹

病したが死亡率は割合に少く、患者百人に對し一人餘に止まつてゐる、其中最も猖獗を極めたは郡部にては浮羽郡で、全郡民の六十%四が罹病したことになつてゐる、之に亞ぐは三池の五十二%五、三井の四十八%五、田川の四十八%三、粕屋の四十二%六、早良の四十%五等であつて、最も小なるは企救の十六%六、糸島の二十五%二である、又市部では大牟田の四十三%四が最も大きく、八幡の十四%八が最も小さい、概して市部は郡部に較べ罹病率が割合に小である、然るに死亡率は之と全く反對で八幡が最も多きく、患者百人に對し二人四の死亡者を出してゐる、之に亞くは嘉穂の一人九である、最も小さきは早良の〇人五であつて亞きは三井の〇人六である、之を以て見ると罹病率の大きい處が却て死亡率が小さい、夫れは八幡の如き低級の労働者の多い都市では重病者でなければ醫師の診断を受けないから、從て届出を怠ると云ふ様な缺點もあると思はる、福岡は稍々正確であると思はれるが、夫れに依ると罹病率が十六%六で死亡率が〇人九八を示してゐる、兎に角該病の流行したのは、大正七年十月十九日から十二月三十一日まで、七十五日間に左表の如き多數の患、死者を出したを以て見るも、如何に猛烈なる流行であつたかを想像せらるゝ、但し此感冒の流行は實に本邦許りではなく、實に世界的の流行であつたから、一地方の氣候風土の如何に依つて、罹病率に大差ある譯ではないが、夫れでも其地方の保健、衛生上の思想が富んでゐるや否やに依つて、多少の違ひはあると思はる

大正八年一、二、三月及十一月にも小流行を見たが、此時の患者数は前年の二割にも足らなかつたが、八幡では最も猖獗で罹病率も死亡率も共に大きかつた大正九年中には再び大流行があつて、各郡市にては二三千人から、一萬人已上の患者を出した、此時最も猖獗を極めた地方は、嘉穂郡で患者總數一萬五千六百人に上つて死者が九百七十六人あつた罹病率は若松が最大で、人口百人に付十二人九の患者が在つた割合で死亡率は糸島郡が最大で、患者百人に付十人一の死亡者が在つた割合である、此率は前兩年に較べると非常に大きく病勢が著しく悪化して、肺炎などを併發するものが多く、老人などは之れが爲め斃れたものが多かつた、全體の患者数は大正七年の二分の一か三分の一位しかなかつたに死亡者は夫れの二倍乃至三倍に及んでゐたを見て判る、福岡の如き大正七年には總患者一萬五千六百人に對し、死亡者は纔に百五十四人であつたに大正九年は總患者九千九百人に對し死亡者六百八十八人の多きに達して

ゐる、只久留米、大牟田のみは割合に死亡者が寡ない、爾後引續き毎年多少の發患者があるが、次第に其數を減じてゐる
詳細は別表に就て見られたい

流行性寒胃患者死者表

種別	大正七年 自十月十一日至十二月三十一日				大正八年 一二月三月				大正九年 流行中				大正十年 流行中			
	患者	死者	罹病率%	死亡率%	患者	死者	罹病率%	死亡率%	患者	死者	罹病率%	死亡率%	患者	死者	罹病率%	死亡率%
福岡	15,677	154	16.62	0.98	912	18	0.93	1.97	9,908	688	10.39	6.94	2,765	23	2.63	1.01
若松	13,708	198	35.28	1.44	342	18	0.82	5.26	6,362	457	12.90	7.03	404	3	3.06	0.74
八幡	12,556	302	14.82	2.40	1,256	76	1.40	6.05	8,023	714	8.00	8.90	727	7	6.46	0.96
久留米	9,893	143	21.49	1.44	149	2	0.31	1.34	1,865	81	4.27	4.37	765	7	1.08	0.91
大牟田	29,427	361	43.39	1.22	457	6	0.64	1.31	3,796	298	5.90	7.85	—	—	—	—
門司	18,683	285	26.04	1.52	292	3	0.39	1.02	6,061	467	8.44	7.70	324	4	4.35	1.22
小倉	8,270	122	23.36	1.47	84	7	0.25	8.33	2,397	236	7.05	9.85	575	1	1.01	0.17
粕屋	31,589	319	42.59	1.00	161	3	0.20	1.86	3,182	281	3.45	8.83	313	2	3.69	0.63
宗像	13,914	162	29.14	1.16	108	7	0.24	6.48	1,882	115	4.48	6.11	88	—	1.95	—
遠賀	33,643	416	31.34	1.23	1,024	22	0.85	2.14	7,049	518	5.45	7.34	655	3	5.20	0.45
鞍手	34,094	426	26.89	1.24	1,267	25	1.00	1.89	9,268	375	6.81	4.04	398	5	2.99	1.27
嘉穂	43,668	821	29.39	1.87	1,510	47	0.89	3.11	15,603	976	8.00	6.26	291	1	1.55	0.34
朝倉	28,161	258	32.72	0.91	169	6	0.21	3.55	1,611	59	2.14	3.66	—	—	—	—
筑紫	25,172	251	27.34	0.99	1,228	22	1.33	1.79	2,073	88	2.06	4.24	1,382	14	1.34	1.01
糸島	15,357	189	25.16	1.22	634	14	1.06	2.20	2,633	265	4.73	10.07	243	5	4.02	2.05
早良	18,543	95	40.53	0.51	372	3	0.85	0.80	2,325	228	5.06	9.81	171	2	3.08	1.16
三井	42,477	234	48.47	0.55	150	4	0.18	2.66	456	23	5.34	5.00	423	11	5.12	2.61
三池	31,503	254	30.60	0.80	208	2	0.22	0.96	2,325	67	2.49	2.88	918	5	9.18	0.54
山門	32,096	292	35.44	0.90	235	—	0.29	—	827	22	1.16	2.66	117	3	1.51	2.59
三池	34,851	229	52.48	0.65	145	3	0.22	2.06	768	16	1.11	2.08	—	—	—	—
八女	32,727	331	26.81	1.01	783	10	0.65	1.27	2,365	212	2.59	7.39	247	7	2.09	2.87
浮羽	36,445	319	60.42	0.87	262	1	0.40	0.32	2,853	66	5.55	2.31	374	8	7.04	2.13
企救	13,011	162	16.57	1.24	269	22	0.33	8.17	1,700	78	1.88	4.59	479	3	5.34	0.62
田川	61,549	393	48.31	0.63	755	16	0.52	2.11	7,902	560	4.55	7.08	38	2	0.24	0.52
京都	19,798	231	31.18	1.16	339	2	0.60	0.59	2,136	140	3.95	6.55	634	29	1.11	4.57
築上	19,324	177	29.26	0.91	573	8	0.99	1.39	2,382	192	4.12	8.06	68	4	0.12	1.58

近來各府縣にても肺結核患者が漸次増加するの傾向あるは、甚だ寒心に耐へざる處である、本縣でも該患者が寡ない譯ではないが、他府縣に較べ格別多いこともない、然し統計の上では可なり多き數を示してゐるのは、本縣は工業都市であつて呼吸器病などには甚だ善くない、工業に従事してゐるものが多いから自然患者數が多くなつてゐる、例令は紡績業、綿絲業、機械業又は化學工業など一つとして、呼吸器病によいものはない、是等の業務に従事するものが呼吸器病に胃さるゝことは止を得ないことである、之を除くときは一般人に對する

患者の割合は決して多いことはない、夫れは氣候の上から見ても、風土の上から考へても判ることである、言ふ迄もなく結核患者は郡部に少なく、市部に多いことは一般の現象であるが、本縣に於ては郡部の内でも、炭坑業其他の工業の熾なる處では、市部に劣らざる患者を出してゐる、又同じ都市でも工業の熾なる都市に患者の多いことは事實である、今最近五ヶ年間に於ける、肺結核患者の死亡數と總死亡數に對する割合とを見るに、左表に示すが如く死亡數の割合の最も大きいのは、市部では門司で總死亡者の十一%二八は結核病者である、之に亞くは八幡の十一%〇三である、最も寡なきは大牟田の六%一五である、郡部は之より遙に寡なく最も大なる早良郡は、六%〇三之に亞ぐは順次に企救郡の五%七五、田川郡の五%六五、遠賀郡の四%八五等であるが早良、企救兩郡の大なるは都市に隣接せるからである、田川、遠賀は工業の熾なるが爲めである、最も小さいは宗像の二%四三、之に亞ぐは糸島の二%四五で、市部の平均八%七四に對し、郡部の平均は僅に四%〇二にして、其半にも及ばず郡部が健康地であることは、之を以ても知らるゝであらう

最近五ヶ年肺結核死亡者平均及其割合 (自大正六年至大正十年)

地名	種別	死亡者數		總對合人口%		種別	死亡者數	總對合人口%		地名	種別	死亡者數		總對合人口%	
		數	割合	數	割合			數	割合			數	割合		
門司		146	0.20	11.28		遠賀	109	0.09	4.85	山門		86	0.11	4.08	
小倉		69	0.19	8.85		鞍手	118	0.09	3.78	三池		70	0.10	4.18	
八幡		154	0.15	11.03		嘉穂	118	0.06	3.48	八女		131	0.11	4.20	
若松		66	0.14	7.40		朝倉	71	0.09	3.18	浮羽		50	0.10	3.45	
福岡		145	0.14	7.33		筑紫	133	0.14	4.63	企救		116	0.13	5.75	
久留米		93	0.19	9.15		糸島	36	0.06	2.45	田川		198	0.12	5.65	
大牟田		89	0.11	6.15		早良	69	0.15	6.03	京都		51	0.09	3.30	
粕屋		49	0.05	2.73		三井	82	0.10	3.98	築上		73	0.12	4.68	
宗像		31	0.07	2.43		三諸	94	0.10	3.58						

12 天災地變火災などは頻繁なか頻繁でないか

I 天 災

本縣で天災として算へるべきものは落雷、暴風雨、洪水及海嘯等である其内落雷は本邦中でも可なり多い方であるが、暴風雨の害は割合に寡ない、又洪水や海嘯の害は一局部に限られて居る、但し縣下の巨川筑後、矢部兩川の如きは屢

々猛烈なる水害を醸し、沿岸住民の蒙むる損害は莫大である、特に大正十年の大洪水の如きは、損害價格五百萬圓にも上り、非常の慘害を呈したが、然し近年は河川の改修堤防の修築等に依つて、著しく災害を軽減せらるゝ様になつた今左に之等の天災に就き其概況を述べん

一、落雷 本縣は地勢の關係上電雷の發現が最も頻繁なる地方である、夫れは支那東海に發生する低氣壓が朝鮮海峽を通過して、日本海に出でんとする際北九州地方に副低氣壓が發現して、渦雷雨を起し又盛夏の候には、盆地を爲せる筑後平原では氣温が劇昇して、此處に局發的熱雷雨が發現する、而して是等の雷雨は次第に發達して、瀬戸内海を経て近畿地方にまで及ぶのである、夫れで本縣は關西地方の電雷の發現地であると謂はれて居る、従て落雷回數なども随分多く被害も年々寡なくない、劇烈なる雷雨になると、一日に數十ヶ所にも落雷して多數の人畜を死傷し許多の家屋、財産を烏有に歸せしむることも珍らしくない

今本縣に於ける、落雷の分布を見るに最も多いのは筑後平原であつて、一方里に對する落雷數の割合は三池郡が最も多く、之に亞くは三井、山門、浮羽、朝倉郡等の順序である、北西部は之より稍々寡ないが早良、糸島の二郡は可なり多く粕屋、宗像二郡は甚だ寡ない、遠賀平原は電雷は可なり多いが落雷は割合に寡ない、北東部の海岸は之より一層寡なく、門司邊は數年間に纔に一二回あるに過ぎない、之れは工業都市である許りではなく、地勢の關係上雷雨の針路に當つて居ない關係もある、夫れで門司には昔から夕立がないと謂はれて居る全くない譯でもないが、熱雷雨の發生は極めて稀であるし、渦雷雨も亦全市附近を通過することは珍しいから、雷はあつても劇烈なものはなく、落雷も自然寡ない譯である、東部の京都、築上兩郡は、縣下では最も落雷の寡ない處であつて、築上郡の如きは一年間に一回あるに過ぎない、雷の嫌いな人は須らく東部地方に移住すべきである、七都市の内では久留米最も多く、大牟田、福岡之に亞ぎ又最も寡なきは門司であつて若松、八幡之に亞ひて寡ない

今明治三十一年より大正六年に至る二十年間に於て、縣下の四市十九郡内に、落雷した回數及月別雷雨表等を掲げると次の通りである、(大正八年本所刊行雷雨報告参照)但し表中落雷とあるは、落雷せし箇所數を示したものである

郡市別落雷表

郡市名	三池	三井	山門	浮羽	朝倉	早良	鞍手	八女	糸島	遠賀	筑紫	三浦	嘉穂	粕屋	宗像	田川	企救	京都	築上	久留米	福岡	小倉	門司
落雷總數	87	135	112	89	119	66	101	109	78	83	69	113	90	56	45	49	25	52	20	49	80	15	1
一方=里對スル割合	39	31	28	27	26	25	25	21	19	17	17	16	15	15	14	10	9	7	4	150	110	64	2

時刻別電雷及落雷表

月	時												年					
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	電雷	落雷				
0-1	2	1	3	5	5	5	1	11	10	5	1	3	2	46	7			
1-2	1	1	3	6	1	2	3	18	3	7	3	5	1	43	9			
2-3	3	2	1	3	3	2	1	4	8	9	2	8	1	43	12			
3-4	1	1	2	1	1	1	5	12	7	11	3	9	2	52	15			
4-5	1	1	2	6	4	6	3	10	12	9	9	1	2	60	13			
5-6	1	1	1	5	1	4	6	10	11	7	8	1	6	47	18			
6-7	1	1	2	5	2	6	2	15	2	10	6	4	3	49	10			
7-8	1	1	6	2	2	5	3	16	2	13	1	8	2	54	9			
8-9	1	1	1	4	3	4	2	15	14	3	9	3	1	53	5			
9-10	1	1	4	4	5	9	2	14	1	20	3	14	4	73	11			
10-11	1	1	5	6	3	5	19	4	29	6	4	1	2	73	11			
11-12	1	1	2	6	1	4	1	5	30	9	31	28	16	98	41			
0-1	1	1	1	3	1	2	13	1	29	2	58	15	30	141	21			
1-2	1	1	4	4	5	8	1	12	5	60	48	106	45	238	118			
2-3	2	1	6	4	2	8	3	25	9	66	77	107	78	266	202			
3-4	1	2	4	6	6	12	1	19	12	59	124	74	147	208	326			
4-5	1	1	4	6	4	2	2	17	8	65	113	60	141	190	303			
5-6	1	1	3	3	3	7	1	12	10	39	70	27	94	111	189			
6-7	1	2	1	5	1	1	3	3	27	37	29	71	13	91	117			
7-8	1	2	2	3	1	5	4	2	28	5	19	58	13	82	77			
8-9	2	4	3	10	1	3	1	16	8	17	9	6	14	66	32			
9-10	1	2	6	3	3	5	1	12	5	7	1	6	5	49	12			
10-11	1	3	2	1	7	1	1	5	2	5	4	3	1	28	11			
11-12	3	1	3	4	2	3	7	1	9	1	5	2	4	44	7			
計	24	32	172	510	363	1118	72	597	526	691	733	320	181	49	832	29	2205	1576

二、暴風雨 本邦には暴風雨が多くして、被害の甚大なることは世界でも比類の寡ない位である、中でも臺灣、琉球列島及本州の南海岸では、最も被害が激甚である、彼の二百十日前後に襲來する猛烈なる颱風の衝路に當つた地方が悲惨なる損害を蒙むことは、殆ど毎年のことである、農夫が夏の炎天下に辛酸を嘗めて漸く出來た美田が、一朝暴風雨に見舞はれたが爲め、一粒の收穫を

も得るに至らなかつた例は珍らしくはない、幸に北九州は直接の經路に當つて居ないから、其様な慘害を蒙むことは極めて稀れである、然して本縣の暴風回數を見るに九、十月頃は却て寡ない、十二月より翌年三月に至る冬季の間支那大陸の高氣壓が著しく發展して、北西の寒風が膚を劈く様な時が、最も暴風の多い季節である、然れども家屋や樹木を倒伏する様な、最も劇烈なる大風は矢張夏季に多く、而も其方向は大概南又は南東である、之れは颱風が支那東海より朝鮮の南部を経て、日本海に出でんとする頃が、本縣では其影響を享くことの最も著しい時であるから、風向は概ね南寄りである、特に福岡や小倉の様に北西が海に面して居り、南東が狭き通路に依つて廣き海、又は平野に連なつて居る様な處では特に強い風が吹く、然し斯様な處では風の方向が一定して居るから、建築物などには相當の防禦を施すことが出来る、其外大牟田、八幡なども可なり風が強いが、門司は背後に風師山脈を負い、若松は石峯山の蔭になつて居るから、北西風を受くることが弱い、又久留米は内陸に在るから冬の季節風も海岸地方程には強くない、之を要するに本縣に於ける、主風の方向は北西か又は南東であるから、其方位さへ充分に防いだ處であれば、海岸地方でも暴風の災害を蒙むことは寡ない、風速三四十米に耐ゆる構造にさへして置けば家屋なども先づ安全である、内陸地方では夫れ已下でも充分であると思はる、一體本縣は暴風雨の災害は、決して多い方ではない、船舶の海難なども割合に寡ない方であるが、何分門司、若松等の如きは、石炭其他の貨物の輸出入の爲め、帆船や小蒸氣船の出入が非常に頻繁である上に、有名なる玄海灘の荒波を受けて居るから、數の上では可なり大なる値を示して居る
今暴風雨の爲めに蒙りたる、最近五ヶ年間の災害表を掲げると左の通りである

月別難破船數

年	5	6	7	8	9	計	平均
1	25	31	31	40	76	203	40.6
2	32	30	24	48	30	164	32.8
3	31	27	27	38	37	160	32.0
4	21	25	17	40	27	133	26.6
5	14	17	29	40	24	124	24.8
6	9	16	10	26	11	72	14.4
7	11	27	77	47	7	169	33.8
8	16	23	17	35	12	103	20.6
9	17	18	17	40	21	113	22.6
10	22	20	19	44	31	136	27.2
11	27	32	25	44	16	144	28.8
12	13	23	19	50	40	145	29.0
年	238	292	312	492	332	1,666	333.2

各港灣ニ於テ一年間ノ難破船數

博多灣	7.8	對馬灘	3.3
支海灘	20.0	門司港	92.0
若松灣	148.3	關門海峽	29.8
響灘	17.0	周防灘	15.5
三池港	12.2	朝鮮海	1.0
有明海	4.2		

暴風雨被害表 (其一) (福岡縣調査)

年次	河川堤防		道				橋				港灣及海岸		用冠水				
	箇所	間數	箇所	間數	損失	箇所	間數	損失	箇所	間數	損失	箇所	間數	損失			
5	—	—	25	178	1020	82	9462	—	—	—	2	140	942	9	2,218		
6	—	—	2	33	428	89	14,926	—	—	—	1	40	135	—	—		
7	4	14	2089	89	6987	16,347	56	2580	5	227	3	147	11	257	6,673	7	806
8	9	252	3410	—	—	—	9	37,810	—	—	—	75	4,538	258,013	1	243	
9	1	120	11,870	12	110	2,069	133	33,349	3	2,000	3	1,641	—	—	—	8	2,967

暴風雨被害表 (其二)

年次	死傷		住家		非住家		田				畑		土地		損失總額	被町市數	被段別	
	死	傷	流失	破損	流失	破損	流失	荒破	米	麥	米	麥	破壞	浸水				
5	—	—	—	—	1	—	40.0	27.5	115	—	—	—	—	—	3.6	25,895	41	278.6
6	—	—	—	20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	15,529	32	—
7	—	3	34	1,455	1	—	—	—	88,077	—	136	—	1.1	—	2903,746	104	1.1	
8	—	—	3	1,117	1	53	—	191.8	2,422	100	—	50	—	11.5	430,599	28	210.6	
9	1	12	34	2,268	—	—	2.0	3.0	20	—	—	—	1.7	—	76,436	27	6.7	

三、洪水 本縣では筑後、矢部及遠賀の三大川は毎年多少の水害を見るが、其中でも筑後川は昔から洪水の氾濫の多いことで有名である、而し先年河川の改修を施してから後は大に災害を軽減したが、夫でも尙ほ時々大氾濫を爲して沿岸町村に莫大の損失を與へることがある、明治十八年、全二十二年及大正十年の大洪水の如きが夫れであつて、最後の水害の如きは、災害復工事丈けでも

五百萬圓以上に上つて居るから、全體の損害價格は千萬圓を超へたであらう、其中でも三井、三瀬、浮羽、朝倉諸郡が最も激甚である、矢部川流域は之に較べると平常は被害が遙に寡ないが、大正十年の際は水源地方の山嶽が、豪雨の爲め崩壊して一時に多量の出水を見たから、堤防の欠潰、家屋の流亡等が澤山に出來て、非常の慘害を蒙つた、遠賀川は先年十年計畫の改修工事が完成して排水が非常に圓滑となつたから、往時の如き大氾濫を見る様なことはないが夫れでも、大正十一年の如きは可なりの損害であつた、之を要するに本縣の水害は前記の三大河川に沿ふたる低地に限られたもので、其他の地方には格別水害として恐るゝものはない

今筑後川の洪水回數を調べて見ると、明治十七年から大正八年に至る、三十六年間久留米瀬の下に於て、水位が十尺以上に上つた回數は、合計二百九十三回であつて、其中十五尺以上が百回、二十尺以上が十一回、二十五尺以上が二回である、夫れで十尺以上の洪水は一ケ年間に八回、十五尺以上のものは三回ある割合で二十尺以上は、三年間に一回二十五尺以上は十八年間に一回ある割合である、更に之を往昔に遡つて調査して見ると、天正六年から明治元年まで二百九十五ケ年間に舊史に載せられて居る洪水の數は九十三回で、三年に一回あつた割合で、近年の二十尺以上の洪水の發現の割合と同一である、又家屋の流失、人畜の死傷等あつて非常の慘害を極めた大洪水は十六回あつて十八年間に一回あつた割合で、丁度二十五尺以上の洪水の發現數の割合と同一である、之に依ると今も昔も洪水の起る割合には餘り變りはない様である、大體豪雨の降る有様は、縣下を通して甚しき相違はないから、之に依つて其一斑を窺ふことが出来るであらう(大正十年本所刊行「洪水と豫報」参照)主要都市の内にて水害の最も頻繁なのは久留米、榎津、柳河等であつて之に亞くは、小倉、吉井、行橋、直方、折尾等である其他には水害は甚だ少ない、但し大正十一年には此外後藤寺、飯塚、門司、福岡等にも多少の被害を見た
尙ほ最近五ケ年間に於ける、縣下の水害表を掲げると次の通りである

水害表 (其一)

種 別 年 次	堤防		國道		縣道		里道		橋梁ノ損害									
	決	潰	破	損	決	潰	破	潰	決	潰	破	潰	損	損				
	個所	間數	個所	間數	個所	間數	個所	間數	個所	間數	個所	間數	個所	間數				
大正 5	214	1,746	614	7,747	—	—	420	—	5,509	143	748	756	4	6	25	117		
6	389	3,954	681	12,604	—	—	11	11	707	129	135	1,092	382	1	610	140	105	
7	434	6,414	1,049	15,467	4	165	20	4	124	196	481	16,992	4,683	—	916	181	193	
8	48	700	39	1,076	5	750	41	25	1,038	186	46	531	124	1	7	21	29	
9	64	71	99	3,307	—	—	2	—	—	180	39	54	30	1	—	2	13	20

水害表 (其二)

種 別 年 次	種 別 個所	水路		死傷		住家		非住家		田		畑		其他土地		損失總額	被町 村 害數	被害反別	
		個所	間數	死	傷	流	浸	流	浸	流	浸	流	浸	流	浸				
		個所	間數	傷	失	失	水	失	水	失	水	失	水	失	水				
大正 5	94	212	1,243	14	24	11	1,864	7	107	367.0	393	11.0	10.0	5588.0	6.0	18526.0	321.124	158	46,804.3
6	34	130	785	3	317	258	8	81	163.0	351	76.0	17.0	5572.0	5155	125.4	464.142	136	41,568.9	
7	51	254	1,598	1	2	954	5	227	8.7	838	7.6	3.0	1570.2	4.7	905.6	792.754	171	10,879.8	
8	39	116	652	—	—	18	—	1	6.7	1300.4	—	—	81.0	—	196.1	179.145	105	1,584.2	
9	10	49	297	—	—	1,414	—	—	—	69.8	—	—	0.2	—	—	348.316	82	70.0	

四、海嘯 海嘯の起る原因は種々あるが、地震又は火山の爆裂に依つて、海底に非常なる變動を起し、夫れの震動を海水に傳へて海嘯を起すものと、暴風雨の爲め海面が隆起を爲し、又は高浪を起して陸地に襲來して來るものとが普通である、本縣には幸に活火山もなく大地震も亦寡ないから、前因に依つて起る海嘯は殆どないと謂つてもよい、只今から百三十年程前に温泉嶽が破裂した際、有明灣に大海嘯が起つて筑後の沿岸地方に、莫大の損害を與へられたことがある、然し後因に依つて起る海嘯は屢々現はるゝが、其被害は輕微であつて格別憂慮すべき程のものではない、近年に起つた海嘯の内最も顯著なるは、大正三年有明灣を襲つた高潮であつて、熊本縣の沿岸は殊に多大の潮害を蒙つた、本縣では三池、山門、三瀨の海岸に海潮の浸入した爲め、堤防の破壊、田畑の荒廢、家屋の浸水等夥しかつた、北部地方でも小倉市の沿岸、企救、遠賀、糸島、早良の諸郡の海岸にも潮水が浸入して稻田の被害が多く、收穫皆無の地方もあつた

此時は颱風が南洋方面から來て、沖繩列島を横斷して支那海に入り、北北東に進み九州の北西部を斜斷して、日本海に向つて突進したもので丁度低氣壓の中心が五島列島附近にあつて其示度が七百二十耗に降つた頃には筑後方面は南西

風が頗る猛烈であつたが爲め、海水膨滿して遂に一大高潮となり有明灣に殺到し來つたものであるが、本縣に襲來する海嘯は、斯る經路に依るものが多い、夫れで海潮は概ね南西風か又は西風に誘はれて起るから、其方向に開港してゐる處は、其害を受けることが多い、主なる都市では大牟田、若津、小倉が災害を蒙ることが多い方で、門司八幡等は高臺で、若松は山蔭で福岡は灣底に在るから海岸都市であるけれども、共に高潮の害を受ける恐れが寡ない、大正八年に襲來した高潮も同様に三池、山門、三瀨、諸郡の海岸に於て被害が激甚であつた

2 地 變

本縣に於ける地變としては、地震及山崩等であるが、本縣には火山脈がなく又著しき地震帯も存在して居ないから、顯著なる地震はなく、孰れも局發性の小地震許りである、唯だ明治三十一年八月糸島郡可也村に可なり、強烈な地震が勃發して許多の家屋を倒壊し道路、堤防等にも多大の損害を與へたが、震域は割合に狹隘であつて、矢張局發性地震の範圍を脱しなかつた、然し餘震が甚だ多く福岡市に感じたもの許りでも、二百回以上に及んで居る、其後尙ほ五六年間は毎年三四十回の地震があつた、現今では年に七八回在るに過ぎない、夫れも精密な地震計で觀測した數であつて、普通人體に感ずるものは、二三回を出でない、北部地方は斯の如く地震が寡ないが、南部地方は之より稍々多い、而し夫れも格別著しい地震帯が存在して居る譯ではないが、明治二十二年に起つた熊本地震は全市から、金華山附近に亘つて最も激烈を極め、多數の死傷者や例潰家屋を出したが、其後の餘震の發生する場所を見ると、全國の北部なる高潮、長洲方面に於て最も頻繁であるから、有明海の東岸に沿ふて、一個の弱線が南北に走つて震源帯を爲して居る様である、本縣の最南部なる三池郡の沿岸は其延長に當つて居るから、其當時から小地震が頻發して、有感覺震の數丈けでも、毎年數十回に上つた爾後段々に其數を減して來たが、尙ほ時々小地震を感ずるから、北部に較べると餘程多い

東部地方の海岸も周防灘に存在する震源の活動に依り、又は豊後水道附近に發する海底地震の餘波に依つて、折々地震を感ずるが孰も小地震許りで、其數も年に四五回を超へない位である、遠賀平原の中部及筑後川の上流なる、大山村附近にも時として強震を發し、小石原村の如き山嶽地方に於て、能く該地震を

感するが孰も急性なる短震動で、震域は極めて狹隘である之を要するに本縣の地震は、概ね熊本縣や大分縣に發したものの餘波を感じるに過ぎないから、地震に對しては格別恐怖することはない、然し従來の例に依て見ると、大地震の發生した地方は却て平素地震の寡ない地方で、且つ火山などにも關係の淺い地方が多いから、地震が寡ないからと謂ふて油斷は出來ない家屋の建築なども、出來る丈には耐震的の構造にして置くがよい、一體或る地方に於ける、震動の方向には多少の僻のあるもので、崖壁に近ひ處や河川に沿ふた處などでは夫れに直角の方向に土地が動き易ひは勿論であるが、地層の方向に依つても異なるから、豫め其地方に於ける震動の方向を調べて置く必要がある、既往十年間福岡に於て觀測した地震の方向を見るに、南東が最も多い夫れで福岡では、南東及北西の方向を丈夫にして置けば、風に對しても地震に對しても都合のよい譯である

3 火 災

火災の多少は其地の氣象と密接な關係がある、夫れは空氣の乾濕の度合、特に冬季に於ける風の強弱、濕度の大小等が直接に火災を起す誘因となるからである、本邦中でも東京は昔から大火の多い處であるが、之れは強ち只家屋が密集して居る許りではなく、冬季の空氣が甚しく乾燥して居て、其上に風が強いからである、何處でも冬季に火災の多いは、一般に世人が火氣に親しむことの多いに依ることは勿論であるが、他の一面では風力が強くて、濕度が小なるが爲めである、特に大火を起し多大の災害を興ふる主なる原因は、却て後者にある即ち夏季は假令誤つて火を失するも、空氣が濕潤であるから廣く他に延焼する様な恐れが寡ないが、冬季は空氣が乾燥して居るから、些少の過失も忽ち大火となつて莫大の損害を興へる様になる、夫れで季節には餘り關係のない、煙草の吸殻から起る失火でも、冬季の方が夏季よりは其數が遙に多くなつて居る。太平洋沿岸は大抵冬季は天氣が良く、空氣が乾燥して居るから、火災に對する危険の度が大きいから、従て火災の保險率なども高ひ譯であるが、日本海に面した方は冬季の季節風は、表日本よりは一層強いが、天氣が陰鬱で空氣が濕潤であるから、火災などは自然に寡ない、新潟や金澤などにも折々は大火があるが、夫れは空氣が乾燥した折の失火であつて、一般に火災の多い譯ではない、我福岡縣は大體に裏日本の氣候に支配せられて居るから、冬季には曇雨天が

多く、濕度が大きいから火災などは甚だ起り悪い處である、夫れで失火の度數も少なければ各失火に對する類焼の損害も亦甚だ輕微である、即ち火災に對しては極く安全地であるから火災保險率なども甚だ低廉である

今本縣に於ける最近五ヶ年間の失火の月別表を見るに、最も多いは一月の三十六回八であつて、之に亞くば三月の三十五回六である、更に之に亞くは十二月、四月の順序で二月は割合に寡ない、又最も寡なきは九月の十五回四で、亞ぎは七月の十回六である、即ち最多は最少の約二倍である、之を以て見るも本縣では冬季に於ける、失火の度數が甚だ寡ないことが知れる、放火の度數は四月が最も多く、二月三月と順次に亞き、七月に於て最も寡ないが、冬季と夏季とに於て著しい差違がない、又雷火は當然夏季に多かるべき現象であるに拘はらず之れも亦冬と夏とに於て大差のないのは、矢張夏は空氣が濕潤であるから火災が起り悪いからである

次に失火の原因に就て類別して見ると、焚火から發したるのが最も多く、年平均で五十二回六を示して居る、之に亞くは竈より發火したるもので、四十八回六である、更に之に亞くは捨火、小兒弄火等であるが、煙草の吸殻から發したるものも十一回四の多數を示して居る、詳細は別表に示す通りである

月別火災數

種別	月												年	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
失火	大正													
	5	45	42	43	39	27	18	7	15	16	17	15	23	307
	6	28	22	34	33	44	20	16	16	6	11	20	42	292
	7	48	35	40	29	21	17	13	15	15	13	25	35	306
	8	26	29	23	40	39	23	16	15	16	24	22	43	316
火	9	37	28	38	32	33	18	26	19	24	19	25	31	330
	計	184	156	178	173	164	96	78	80	77	84	107	174	1551
	平均	36.8	31.2	35.6	34.6	32.8	19.2	15.6	16.0	15.4	16.8	21.4	34.8	310.2
放火	5	3	7	4	6	7	1	2	3	1	5	3	5	47
	6	1	4	1	4	4	1	1	1	1	1	3	2	24
	7	5	3	3	4	—	5	4	3	15	2	5	—	49
	8	7	9	3	12	5	7	1	12	1	4	2	5	63
	9	1	1	2	6	6	2	—	—	5	6	4	1	34
火	計	17	24	13	32	22	16	8	19	23	18	17	13	222
	平均	3.4	4.8	2.6	6.4	4.4	3.2	1.6	3.8	4.6	3.6	3.4	2.6	44.4
	雷	5	1	1	1	4	1	2	2	3	2	1	3	2
6		1	2	5	2	2	1	2	1	4	1	—	—	21
7		1	3	—	1	—	1	2	—	—	—	2	3	13
8		3	3	1	2	—	—	7	—	2	—	4	—	22
9		2	2	—	1	3	2	1	4	5	2	1	—	23
火	計	8	11	7	10	6	6	14	8	13	4	10	5	102
	平均	1.6	2.2	1.4	2.0	1.2	1.2	2.8	1.6	2.6	0.8	2.0	1.0	20.4
	總計	209	191	198	215	192	118	100	107	113	106	134	192	1875
平均	41.8	38.2	39.6	43.0	38.4	23.6	20.0	21.4	22.6	21.2	26.8	38.4	375.0	

原因別失火數

種別	年									計	平均
	5	6	7	8	9						
電	34	54	45	76	34	243	48.6				
風呂釜	2	4	6	6	2	21	4.2				
煙突	16	19	19	24	19	97	19.4				
暖爐	4	5	8	9	4	30	6.0				
炬燵	8	9	4	11	8	40	8.0				
洋燈	15	8	6	9	5	43	8.6				
火鉢	9	4	5	7	4	29	5.8				
捨火	28	33	26	18	40	145	29.0				
消炭	6	3	2	6	2	19	3.8				
蠟燭	6	8	9	17	6	46	9.2				
焚火	64	57	51	48	43	263	52.6				
摺付木	12	2	8	11	9	42	8.4				
石灰	6	8	8	5	2	29	5.8				
燈火	14	12	8	8	20	62	12.4				
電氣	3	—	3	4	8	18	3.6				
瓦斯	—	1	1	—	2	4	0.8				
火消壺	—	2	2	1	1	6	1.2				
子兒弄火	18	21	27	2	42	110	22.0				
火置輪	15	10	7	10	11	53	10.6				
煙草吸殻	11	4	8	16	18	57	11.4				
蚊道火	2	4	1	4	5	16	3.2				
其他	33	24	52	24	45	178	35.6				

警察署別平均失火數

福岡	19	飯塚	17	松崎	6	若津	11
箱崎	6	大隈	3	吉井	13	城島	10
東郷	9	甘木	14	福島	14	小倉	16
若松	8	二日市	6	黒木	4	門司	6
折尾	15	前原	13	大牟田	10	行橋	20
八幡	7	西新	7	柳河	11	八屋	14
直方	17	久留米	11	瀬高	5	後藤寺	16

13 上水道や下水道の設備か出来て居るか居ないか

上下水道の設備如何は、其地方の風土衛生に重大なる関係のあることは、既に前章飲料水の項に於て述べた通りであるが、本縣は一體に井水の不良なる處が多く、特に炭坑地方は最も劣悪であるから、本縣の地方病とも稱せらるゝ疫痢や、赤痢又は腸窒扶斯などの流行する場合は固より總ての傳染病は、飲料水に關係するものが多いから、夏季に於て不完全なる井戸の水を使用するなどは、假令水質が如何に善良であつても、甚だ不安なものである、特に或る町村の如く河水を煮沸もせず、其儘使用するなどは危険千萬である、河水に病菌が混じて居たが爲め、下流地方で非常に悪疫が流行したと云ふ例は随分珍らしくない邊陲なる村落ならば兎も角、立派な市街を爲せる都會地でありながら、未だ上水道の布設を見ないのは甚だ寒心に耐へない次第である、特に本縣などの如き水質の悪い地方では、孰れの都邑にも完全な水道を布設するの必要がある然し近頃は一般に衛生思想が著しく向上したると共に、飲料水に關する問題な

ども各處に於て大分考究せられ、今や本縣では主要なる都市には既に上水道が布設せられ、或は將に布設せられんとして居るから、茲十數年を経過すれば上水道が一般に普及せられて飲料水に對する、危惧は一掃せらるゝであらう、下水道は不生産的のもので、且つ其影響が多少間接であるから兎角閉却され易いもので、本縣の各都市では未だ完全な下水道の布設せられた處がないのみか、近き將來に於て完成すべき豫定の地方もなく、纔に一二の都市に於て計畫中である位のものである、而し飯塚、直方、折尾の如き濕潤な地方では、上水道の必要已上に下水道の布設が必要である、諸種の傳染病や地方病の流行は此下水道の不完備なるより來ることが多い、夫れは下水道が不完全であると、有機性や無機性の微菌が用捨もなく、井水中に浸入して來るからである、各々自家の下水を奇麗に掃除し完全なる汚水の貯溜地を設け、吸込みの儘に放置しないのは各自の衛生上に必要な許りではなく、市民として公徳上是非務めなければならぬ事である、今本縣の主要都市に於ける、上水道の設備の梗概を記すると次の通りである

各市水道の種類及料金等の表 (大正十一年十一月現在)

種別	地名	小倉	門司	若松	後藤寺	大牟田	福岡
水道領域内給水戸數	(戸)	六、八六	二、九三三	九、三三三	二、二五五	一、六四九	一、六七七
水道ノ種類		放任 計量 計量 計量 計量 計量 計量	船屋 船屋 船屋 船屋 船屋 船屋 船屋	公設 公設 公設 公設 公設 公設 公設	私設 私設 私設 私設 私設 私設 私設	共用水 共用水 共用水 共用水 共用水 共用水 共用水	専用水 専用水 専用水 専用水 専用水 専用水 専用水
各ス種ル水使道用ニ戸對數		専用水 一、九五五	共用水 二、七三三	船屋通設 三、四二二	公設通設 三、四二二	私設通設 三、四二二	共用水 三、四二二

種別	地名	小倉	門司	若松	後藤寺	大牟田	福岡
水道		計量 計量 計量 計量 計量 計量 計量	船屋 船屋 船屋 船屋 船屋 船屋 船屋	公設 公設 公設 公設 公設 公設 公設	私設 私設 私設 私設 私設 私設 私設	共用水 共用水 共用水 共用水 共用水 共用水 共用水	専用水 専用水 専用水 専用水 専用水 専用水 専用水
料金	(一ヶ月)	一月 一石 一石 一石 一石 一石 一石	一月 一石 一石 一石 一石 一石 一石	一月 一石 一石 一石 一石 一石 一石	一月 一石 一石 一石 一石 一石 一石	一月 一石 一石 一石 一石 一石 一石	一月 一石 一石 一石 一石 一石 一石
一年平均使用量	(石)	一、八〇〇	一、八〇〇	一、八〇〇	一、八〇〇	一、八〇〇	一、八〇〇
現在給水戸數		一、三〇〇	一、三〇〇	一、三〇〇	一、三〇〇	一、三〇〇	一、三〇〇
水道引込ニ要スル費用		小形約 二五圓	大形約 三〇圓	一戸平均工費 一七、七〇	一戸平均工費 一八、八〇	延長十間ニ付家用一 三三、六〇	トシテ 二九圓

上表に就き給水の状態を見るに、門司は紫川の水を引き中谷村頂吉に貯水池を設け、一萬六千戸に給水し得べき設備を整へてあるが、現時の給水戸数は一萬一千餘戸で全戸数の八割弱に當つて居る、料金は普通の共用が三十錢、普通の専用が九十錢である、小倉は紫川の上流の水を引き、一萬二千戸に給水し得べき装置であるが、現時は四千六百八十餘戸に給水して居るから、總戸数の七割六を占めて居る、一ケ年間に於ける一戸平均使用量は一石八斗である、料金は普通共用が二十五錢乃至三十五錢、普通専用が一圓二十錢位である、若松水道は八幡製鐵所の經營せる八幡水道の分水で、遠賀川の水を引き約一萬戸に給水し得る設備である、現時は八千六百餘戸に給水して居るから、全戸数の九割二に當つて居る、一年間の一戸平均使用量は、一石六斗餘で料金は共用二十五錢乃至五十錢、専用は一圓内外である、大牟田水道は熊本縣玉名郡清里村より引水したもので、二萬戸に給水し得べき設備である、現時は七千九百餘戸に給水して居るから總戸数の四割三に過ぎない、一戸の平均使用量は年一石一斗八升で、料金は普通共用が三十三錢、普通専用が一圓六十錢已上である、後藤寺町は株式會社の經營に係り松尾山より發する河水を引きたるもので、布設の日尙は淺く僅に五百戸内外に給水せるのみで、總戸数の二割に過ぎないが、千六百戸に給水し得る設備で、一戸平均一石の豫定である、料金は普通共用九十錢普通専用が一圓八十錢位である、福岡は室見川の上流なる曲淵に水源を有し、夫れより十八時の送水管に依つて平尾山淨水地に送り、三十時の配水管に依つて市内に配水する装置で、現下十二萬人に給水し得るが、尙ほ多少の加工を施せば二十萬人にまで給水し得る筈である、水道の種類は専用と共用とがある、専用は一戸六十石までが一圓五十錢、夫れ已上は一石に付一錢乃至二錢五厘を加へる、共用は六十錢である、一般の通水は十二年度から開始する、八幡は製鐵所専用の水道が布設せられて居る、同水道は遠賀川の水を引き同市大藏に一大貯水池を設け、關係方面に給水して居るが、未だ市全體に亘たものはない、其他飯塚、直方、大川等にも夫々計畫中であるから、近き將來には設置の運びに至るであらう

14 保健や衛生上の設備は整ふて居るか居ないか

氣候と疾病とが密接な關係のあることは、誰しも承知のことであるが、衛生や保健上の設備が完成して居れば、氣候や風土の影響に打勝つて、或る程度まで

は其地を健康地とすることが出来る、例令ば井水の悪い地方も水道を布設すれば良水が得られるし、濕潤なる土地も下水道を布設し又地盤を高めて、排水を長くすれば乾燥なる都市とすることが出来る譯である、早い話しが繁華なる市街地でも、撒水を勵行すれば塵埃の飛散することを防いで、空氣を清淨にすることが出来るのは我々が毎日實驗して知つて居る事柄であるが、一都市の衛生状態を良くするには市民が共同的に努力しなくては、効果を上げることは困難である、夫れで是非一般市民の衛生思想を向上せしむるが、何よりも大切である、本縣の新進都市が割合に保健や衛生上の設備が整つて居るのは、住民に進歩的人が多く、智識程度が多少高いからであつて、田舎の町村の如く只徒に舊慣に捉へられない爲めに、種々の新設備を整へて傳染病の如き外敵に對しても、充分之に打勝つだけの準備が出来て居るからである、本縣に至る處氣候が温和であるから、都市の優劣を比較するには、實際其土地の氣候風土よりも、寧ろ保健や衛生上の設備が完全であるか否やを、調査する方が早道である、如何に天然の氣候風土が善長であつても今日では最早や、衛生上の設備の欠けて居る地方は決して完全な健康地であるとは言へない、近來は結核病者や其他種々の恐るべき疾病を有する患者が、氣候の良い處を逐ふて轉療に出懸けるから是等の設備の欠けて居る處は却て甚だ危険である

而し保健や衛生上の設備如何は、土地に依つて種々相異なる譯であるから甲、乙兩地を比較して其優劣を定むことは困難である、甲地には夫れ程必要でなくとも乙地には是非設置しなくてはならぬものもあり、又之と反對に甲地には必要であつても乙地には無用のものもあるから、一樣には論ぜられない、上水道や下水道の布設の如きも、土地の狀況に依つて其必要の程度を異にするから、布設してないと謂つて必ずしも設備が不充分など云ふ譯ではない、筋肉労働者の多い門司、若松、八幡の如き工業都市には幼兒保育所や貧民救護所の設置も必要であれば、常設の衛生組合や防疫機關の活動も急務であるが古き都市である柳河、大川などでは夫等の設備は餘り必要はないが、飲料水の劣悪極まる處であるから何よりも、先きに上水道の布設が必要である、然し傳染病院や避病院の如きは何處の町村でも之を設置するの必要があり又屠殺場や火葬場の如きも充分完全なる設備を整へて居らねばならぬが、實際に於ては有名無實な處が多く不完全極まるものが少くない、夫等の詳細は別項に記載する表に就て見られたい今各都市に於ける醫師、産婆、看護婦數等に就て述べると概略次の通りである

大正十年末の調査に據ると、醫師數の最も多いは市部では、福岡の二百十六人であるが全市には大學醫院に勤務せる醫師が多く、實際の開業醫は七十六人である、之に亞ぐは小倉の八十七人であるが、全市も亦市立病院等に勤務せる醫師が多く、實際の開業醫は三十四人である、而して最も寡なきは若松で醫師の總數が四十人で内開業醫は二十六人に過ぎない、又人口に對する醫師の割合を見るに、小倉に於て最も大きく三百九十人に對し、一人の醫師ある割合で福岡は之に亞ぎ、四百四十一人に對し一人の割合である、之に反し最も小なるは若松

あつて千二百三十三人に對し、一人の割合で小倉の約三分の一に過ぎない、之に亞ぐは八幡であつて、千百六十五人に對し一人の醫師ある割合である、一般に新進の都市は人口に對し、醫師の數が割合に寡ない様である、夫れは斯様な處には強健なる筋肉労働者が多く、老幼者が比較的に寡ないから従て患者の數が多くないからである、郡部の内では市に接續せる處に於て、其割合が小さいのは當然である、即ち筑紫郡の四百二人に對し醫師一人あるを最大とし、之に亞ぐは三井郡の七百九十人に對し一人ある割合である、之に反し最も小なるは田川郡であつて、千六百五人に對し醫師一人あり、遠賀郡之に亞ぎ千五百二十四人に對し一人ある割合である、之を要するに醫師の分布は、市部と郡部との間に於て著しき懸隔がない、若松や八幡に較べ却て醫師數の割合が多い郡も少なくない、而し醫師一人の擔當する患者數は、郡部と市部とに於ては著しき差違があらう

次に齒科醫に就て見るに市部の内にては、小倉に於て其割合が最も大きく二千二百人に對して、醫師一人ある割合で之に亞ぐは若松である、又其割合の最も小さいは八幡であつて、七千人に對し醫師一人ある割合である、更に郡部に就て見ると最も少ないは三池、早良の兩郡であつて郡内に只一人の齒科醫あるのみである、此兩郡は繁華なる都市に隣接して居るから、患者は概ね市部の醫師に依るので其割合が小さい、最も大なるは遠賀郡であつて、九千人に對し齒科醫一人ある割合で之に亞ぐは山門郡で、九千六百人に對し一人の齒科醫ある割合である

産婆數の割合の大なるは市部では小倉が第一である、即ち人口六百四十人に對し一人の産婆ある割合で最も小さいのは八幡であつて、人口千六百人に對し一人ある割合である、郡部では糸島郡の人口六百人に對し産婆一人あるを最大とし築上郡七百人に對し産婆一人あるを其次とす、之に反し割合の最も小な

るは三潯郡であつて、二千人に對し一人ある割合で之に亞ぐは鞍手郡の千五百人に對し一人ある割合である、之を要するに産婆數の人口に對する割合は郡部でも市部でも著しい相違はない

看護婦は市部では大概看護婦會の設けがあるから、患家の需に應じて隨時に出張して來るが、郡部では殆んど其設置を見ないから、患家は近くの市部から雇聘するの外はない、夫れで別表に掲げてある、看護婦數の如きは概ね公立又は私立病院に勤めて居る看護婦であるから、患家用として招聘することの出来るものは只其一部に過ぎない

鍼灸按摩術業者も矢張市部に多く郡部に寡ない、其内市部で最も多いのは、福岡市で最も寡ないのは若松市である、郡部では田川郡が最も多く、之に亞ぐは鞍手郡であつて、炭坑地の如き労働者の多い地方には營業者も自然に多いが純農村よりなる糸島、三井兩郡の如きは最も其數が寡ない

傳染病院、隔離病舎は各市に必ず一ヶ所宛はある、其中には完全なるものもあるが、中には随分不完全で改築せねば役に立たぬものもある、郡部に至りては更に甚しく不完全なものがあるが、其中には全部完全なものもある、三井郡の如きは最も完全な隔離舎がある、宗像、三潯、兩郡の如きも大部分は完全であつて、改築を要するものは全部に一、二ヶ所あるのみである、尙ほ詳細は次表に就て見られたい

47
42

大正十年醫師藥劑師産婆等の數

地名	種別	醫師數	醫人ニ對スル一對人	開業醫	齒科醫	藥劑師	産婆	看護婦	鍼灸術	按摩術	鍼灸按	牛乳業	乳牛頭	傳染病隔離會		
														完全	不完全	計
福岡		216	441	76	27	28	62	311	68	82	39	3	78	1	—	1
若松		40	1,233	26	13	10	37	34	10	28	29	3	31	1	—	1
八幡		86	1,165	52	16	27	68	52	35	16	39	4	60	—	1	1
小倉		87	390	34	17	15	58	103	31	48	27	—	—	1	—	1
門司		76	936	37	13	10	67	61	65	43	39	2	18	1	—	1
久留米		77	566	54	12	15	60	71	57	21	20	2	35	—	1	1
大牟田		63	1,020	42	11	15	65	48	60	7	21	1	44	—	1	1
糟屋		98	939	45	3	2	54	10	37	4	—	2	70	6	15	21
宗像		30	1,397	30	4	3	32	3	36	4	—	4	21	15	1	16
遠賀		84	1,524	67	14	18	112	31	16	7	3	8	105	8	11	19
鞍手		102	1,325	70	10	8	86	28	48	16	11	5	49	7	10	17
嘉穂		130	1,498	73	14	14	143	57	43	7	17	11	104	4	17	21
朝倉		52	1,073	49	7	5	70	10	64	6	—	2	33	12	12	24
筑紫		248	402	66	9	16	81	2	28	3	3	9	134	9	8	17
糸島		52	1,069	51	5	4	48	—	8	—	—	1	12	16	3	19
早良		26	1,764	23	1	—	48	1	21	1	1	1	5	2	9	11
三井		108	790	51	4	3	64	1	13	3	—	5	30	19	—	19
三浦		71	1,313	68	8	2	50	9	41	5	13	2	13	14	1	15
山門		63	1,186	62	8	9	58	9	62	1	14	1	30	2	7	9
三池		44	1,561	36	1	2	50	—	56	5	18	4	29	8	3	11
八女		82	1,348	77	7	5	113	6	24	3	2	1	15	19	14	33
浮羽		50	1,028	49	7	6	50	3	?	?	?	?	?	10	8	18
企救		65	1,390	39	3	5	94	—	?	?	?	10	89	2	11	13
田川		108	1,605	75	13	11	146	65	68	27	21	6	45	10	11	21
京都		47	1,148	46	6	3	69	3	23	6	5	6	18	6	15	21
築上		69	841	66	3	2	36	6	43	9	7	5	23	10	12	22

更に主要なる都市に於ける汚物掃除數を見るに、塵埃搬出量の最も多いのは福岡市であつて、一戸に對し平均三百六十六貫目を示して居る、即ち全市は塵埃搬出の世話が最も能く出来て居ると見ることが出来る、之に亞ぐは若松の三百五十五貫目である、之に反して最も寡きは後藤寺の一戸平均七十一貫目で、亞ぎは八幡の百四十三貫目である、是等は工業都市であつて割合に小家屋が密集して居るから、戸數の多い割合に實際の塵埃量は寡ない様である、又汚泥搬出量の一戸に對する割合は直方が最も多く、百二十七貫七を示し、戸畑が最も寡く十三貫三を示して居る、之れは多少其土地が濕潤なか濕潤でないかに關係がある、糞尿搬出量の割合も亦直方に於て多く、戸畑に於て寡ない結果を示して居る、要するに是等の結果は直接に其土地が清潔であるかないかを現はす標準

とすることは出来ないが、都市全體の狀況と周圍の關係を考慮するときは其地方の衛生組合の活動の狀態などを窺ふことが出来るであらう

大正十年汚物掃除表

地名	種別	掃内戸數割	塵埃搬出量	汚出泥量	糞搬出尿量	一ス搬割		一ス搬割	
						戸ニ塵埃ノ對量	戸ニ搬出ノ對量	戸ニ汚泥ノ對量	戸ニ搬出ノ對量
福岡		17,624	6,464,640	430,480	1,066	366	24.5	0.06	
八幡		20,768	2,975,780	377,740	4,350	143	18.2	0.21	
若松		7,768	2,759,000	196,000	—	355	25.2	—	
直方		3,276	5,233,499	418,508	4,186	160	127.7	1.28	
久留米		8,133	2,274,220	666,512	456	280	82.0	0.06	
柳河		1,195	183,856	30,800	600	154	25.8	0.50	
大牟田		12,645	2,824,057	391,980	—	224	31.0	—	
小倉		6,095	1,489,680	548,145	533	244	90.0	0.09	
門司		15,921	3,729,160	625,670	2,111	234	39.3	0.13	
戸畑		6,180	1,252,000	825,000	200	203	13.3	0.03	
後藤寺		1,721	122,180	62,000	—	71	46.0	—	
伊田		1,651	302,850	—	—	184	—	—	

第二編

主要都市の氣候風土

本縣に於ける氣候風土は、地勢の關係上凡そ之を六部に大別することが出来る、即ち東部、北東部、北部、南部及遠賀、筑紫の兩平原地方とす、此中東部は瀬戸内海に面し、北東部及北部は玄海灘に向ふて居るが、共に裏日本の氣象に支配せられるから冬季の氣候は概して不良であつて北西風が強く、天氣は常に陰鬱である、而して雪霰が滋く來り、極めて峻烈なる氣候を現はすことが多い、然れども夏秋の頃は天氣が最も清明で、烈しき風雨の襲來する様なことも寡く氣象の變化も亦著しくない、然るに南部は有明海に臨み、太平洋方面即ち表日本の氣象に類似する處があつて、冬は北部よりは稍々温暖であるが、其換り夏は多少蒸暑く落雷降雹等も頻繁であつて、氣候の變化が著しい、遠賀、筑紫の兩平原は内陸地方に屬するから、風は強くはないが、表裏兩方面の影響を受けて寒暑の變化が甚しく、氷雪の季節などは他の方面よりは一週間已上も早い、特に遠賀川流域地方は炭坑業の、最も隆盛なる地方で、物質上には屢々として今尙は向上發展を續けて居るが、所謂新進の都市であつて、衛生上の設備なども充分に整つて居ない處もあり、又飲料水なども劣悪な處が多いから、一般に風土衛生の上から見ると、健康地とは言へないが、本縣已外の地方に較べ決して劣る様なことはない、尙は各方面に對する氣候風土の概要を記すると次の通りである

一 北東部地方の氣候風土

本縣の北東部は響灘に臨み、天氣の變化稍々多く濃霧などの發生も頻繁であるが多少海洋氣象の影響を享けるから、氣候は温和であつて気温は東部地方よりも遙に高温である、其上天氣も冬季を除くの外は、割合に良好であつて雨量も寡ない、特に門司は最も高温で一年中に最低気温が、一日も氷点已下に降つたことのない年もある位で、結霜や結氷の現象も寡なく又落雷、驟雨等も甚だ稀である、門司は昔から夕立がないと言つて名高い位である、而し東西に走つた海峡に面して居るから、冬季北西風の強ひ時は、風波が荒く峻烈なる氣候を現はすことがあるが、他の季節は存外に温和である、此方面は所謂北九州の工業地帯であつて、諸種の大工場が附近に散在して居るから、商工業が頗る旺盛で近時は著しき發達を遂げて居る、従て諸物價も漸次騰貴し、生活は簡易な方

ではないが、諸般の設備も段々に能く行き届き、教育、衛生等の機關なども比較的に完備して居るから決して住み悪い土地ではない、更に主なる各都市に就いて梗概を記すると次の通りである

Ⅰ 門 司 (大正十一年六月調)

門司は本邦でも有數の貿易港であつて、海陸旅客の來往織るが如く、頗る殷賑を極めてゐるが、所謂浮浪の徒が多く土着の民が寡ないから、自然に人氣が荒く質實勤儉の風に乏しい、加ふるに物價が高く衛生状態なども良くないから住み易い土地ではないが、然し近來は大に改善の域に向つてゐる、氣候は割合に温和で平均気温は十五度八を示し、南部の海岸を除けば高温な方である、而して最高の平均は十九度七、最低の平均は十一度八を示し、較差は七度八で在つて甚だ小さい方である、但し高極は三十六度に達し低極は氷点下五度に降つたことがあるが、普通には冬季と雖も気温が氷点下に降ることは、極く罕れで全く降らなかつた年も珍らしくない従て結霜や結氷の現象は寡なく、降雹や落雷等も甚だ稀である、之れは海洋に突出してゐるが爲めで同地に夕立や驟雨の寡ないことは、昔から名高いことである、風は地形上の關係から西又は東風が優勢で南北風は甚だ寡ない、天氣は冬季は素より不良であるが夏秋の候は格別悪いことはない、雨は年量千七百三十耗餘で小倉よりは稍々多いが、日量の最多は百七十耗で小倉より少なく、降水日數も亦寡ない

市街地は殆ど全部多少の傾斜を爲してゐるから、土地は乾燥である、飲料水は築港方面の一部を除けば概ね良好である、但し其築港部の方でも濾過すれば大概飲料に供し得る程度のもので、井戸の深さは下町の方で、二間乃至三間であるから上町の方は夫より遙に深い、傳染病は開港市であるから、毎年海外より輸入せらるゝ病菌に感染して、多少の患者を出すか検査其他防疫事務が行届いてゐるから、比較的罹病者が寡なく蔓延する様なことは滅多にない、然れども腸窒扶斯病の如きは其跡が絶へない、虎列刺、痘瘡の如きは年に依つては随分多發することがある、現に大正十年の如きは痘瘡患者六十一名を出したが、是等は總て支那、印度等から病菌を移入したものであるから、夫等の仕事に従事してゐるものゝ外は感染することは稀である、其外疫痢、實扶埤利亞等も相當にある、「ワイル」氏病は大正九年中に十四五名あつた、又結核病者も多く死亡者は月に四五名あるが、格別恐怖する程のことはない、大正十年の總死亡率は住

民四十五人に付一人の割合である、上水道は既に門司市一般に亘つて、布設せられて在るが、下水道は未設である傳染病院は市立のものは一ヶ所であるが、設備の完全せる鐵道病院があつて醫師、看護婦等數名之に專屬してゐる、其外開業醫院が數ヶ所にある、醫師數は合計六十五人で、千百人に對し一名の割合である、看護婦會は五ヶ所に在つて、看護婦が百二人ゐる、又産婆の數は五十人であつて住民數に對して、是等の割合は格別小さくない、交通機關としては門司一折尾間を運轉する九軌電車が、毎五分間に時を違へず兩處から、發車し迅速なる速力を以て北九州の工業都市を繞つて走つてゐるから、交通上には實に至便である、其外市内には自動車六臺、人力車二百四十二輛あつて、市内に停車場を設けて乗客を俟つてゐる

此市附近は一帶に石炭の供給が豊かな上に、海路の便があるから工場が多く近頃財界の變動で、多少の打撃を受けたが現今尙は大なる工場數は二十五を算へる、其中淺野「セメント」神戸製鋼所、門司伸銅工場及淺野「スレート」工場の如きは其主なるものである、是等の工場から吐出す煤煙が港内狭きまでに淀泊せる大小艦船より送り來る黒烟と相和して、常に天空を蔽ふてゐる、殊に淺野「セメント」工場の附近は飛散し來る「セメント」の爲め家屋庭園の別なく全部灰白色の粉末で被はれてゐる、夫れで市内の空氣は極めて清淨などとは言へないが、然し天氣の好い日には清澄なる海風が徐ろに、吹き涉つて來て胸襟を洗ふから爽快極りがない

遊園地としては清瀧公園、畑田公園がある、縣社和布刈神社境内も亦散策に適する好地である、教育方面では縣立高等女學校、市立商業學校、商工補習學校門司學館を始め、小學校八校、幼稚園、圖書館がある、近く中學校の設立を見んとしてゐる、隣接せる大里町には豊國中學校、豊國商業學校、豊國學校等がある、主なる官衙には門司税關、港務部、西部管理局、電話交換局、市役所、陸上及水上警察署、郵便局、植物検査所門司支所などがある、大會社としては日本郵船會社、大阪商船會社を初め銀行、會社等の支店又は出張店等は殆ど算へ難き程ある

門司の累年氣象表は左の通りである

門 司 の 氣 象

種 別	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
氣	平 均	6.18	5.73	8.52	13.34	17.62	21.60	25.32	27.27	23.77	18.03	12.82	8.18	15.75
	最高平均	9.46	9.04	12.40	17.85	22.49	25.66	29.67	31.41	27.71	22.26	16.56	11.38	19.66
	最低平均	2.90	2.41	4.65	8.3	12.85	17.56	21.98	23.13	19.82	13.79	9.07	4.98	11.83
	平均較差	6.56	6.63	7.75	9.02	9.64	8.10	7.69	8.28	7.89	8.47	7.49	6.40	7.83
温	最高ノ極	20.0	19.0	21.4	28.4	29.0	34.5	35.9	36.0	35.0	28.0	24.5	20.1	36.0
	最低ノ極	-5.0	-4.5	-2.0	-3.0	4.6	9.0	15.0	18.0	11.0	6.5	1.0	-5.0	-5.0
風	靜 裡	3.3	2.6	3.9	4.4	6.1	4.9	4.1	4.9	5.6	4.5	4.3	3.1	51.7
	疾風以上	6.2	3.8	3.2	4.1	3.1	2.5	2.4	1.9	2.2	2.8	3.5	5.2	40.9
	最多風向	W	W	W	E	E	E	E	E	E	E	E	W	E
天	快 晴	4.6	4.6	5.6	9.8	9.9	6.6	7.9	9.9	7.3	7.9	6.2	4.1	84.3
	晴	10.8	8.1	9.9	7.6	9.8	7.6	11.4	12.6	9.9	11.1	10.7	11.1	120.6
	曇	11.2	11.4	10.6	7.6	6.7	8.6	6.8	5.2	8.9	8.7	9.2	12.0	106.9
	雨 雪	4.4	4.4	4.9	5.0	4.5	7.5	4.9	3.3	3.9	3.6	3.9	3.8	54.1
雲量平均	6.6	6.9	6.3	5.6	5.2	6.5	5.7	4.8	5.9	5.6	6.1	6.8	6.0	
降 水	總 量	71.6	83.1	124.3	178.1	136.4	337.2	223.2	113.3	193.1	131.8	65.1	76.4	1733.6
	一日最多	52.0	55.0	65.0	86.6	12.70	170.5	109.6	72.5	112.5	106.2	45.0	64.0	170.5
	降水日數	13.6	11.4	12.4	11.7	9.6	15.7	11.1	8.9	12.5	10.1	10.4	12.2	139.6

2 小 倉 (大正十一年三月調)

小倉市は海陸交通の要衝に當り、昔から有名な都市であつて街衢井然とし商業般賑を極め近時俄に勃興した工業都市とは、多少異なつた處がある、市民は概ね土着の人で氣風は一般に純樸であつて、毫も陰險な處がない、然れども戰時諸工業の勃發と共に此地方も一体に、非常なる發展を爲して北九州に於ける、一大工業地と化し縣外より移住し來るものも漸く増加し、往時の美風は失墜し諸物價は益々高騰し、次第に生活上の脅威を感ずるに至つた、附近の諸工業場に接せる地域には煤煙多く、空氣も甚しく汚濁してゐるが、其他は割合に清潔で北は玄海灘の一部を望み南は帆立山脈を負ひ、海陸交風の調節に依つて氣候は概ね温和であつて變化も激しくない、然れども冬季は北西の寒風頗る強く、降霰連りに霰り曇雨天が多いから、著しく氣候が不良なる様に見へるが、稀に發現する大陸低氣壓の襲來を除くと、冬季に於ける氣温も亦決して低くはない、寧ろ北部又は東部の何地よりも多少高温である、平均氣温は十五度七であつて較差も割合に小さい、風は地勢の關係上夏期は東風多く、冬期は西風が卓越し其他の風位は極めて罕である、降水量は千五百八十八耗であつて少ない方であ

るが、最多日量は二百三十二耗であつて多い方である
 飲料水は海岸地一帯は概ね不潔で紫川附近足立村邊も亦良好でない、故に此邊の井水は雑用に使ふのみで、飲料水は全部水道の水を用ひてゐる、全市には未だ完全なる下水道がなく只個々に設けてあるが排水が充分でない、練兵場附近は殊に不潔であつて下水を自然に吸込ましてゐる處が多い、鳥町邊は井水が稍々可長であるが、構造が不完全であるから、濾過せずには用ひられない、其上に下水道も此邊は皆悪い、近時上水道の布設せられてから、赤痢患者の如きは著しく減少した様である、今最近五ヶ年間に於ける傳染病患者及其死亡數を記すと次の通りである

年	痘		流行性腦膜炎		赤痢		虎列刺		腸チフス		パラチフス		實扶羅利亞			
	患者	死者	患者	死者	患者	死者	患者	死者	患者	死者	患者	死者	患者	死者		
大正六年	9	2	—	—	34	13	7	—	2	1	43	10	6	1	3	—
全 七年	3	—	—	—	69	37	10	1	—	—	26	9	9	2	12	1
全 八年	—	—	23	13	30	14	4	—	12	8	108	28	11	—	5	1
全 九年	—	—	10	3	29	20	1	—	2	—	51	10	—	—	3	1
全 十年	—	—	2	1	39	23	1	—	—	—	52	10	3	—	4	2

全市は昔より繁華な都市であるから、諸種の設備が能く行き届き、教育衛生等の機關も亦能く完備してゐる、現時當市に開業してゐる醫師は、四十五名、齒科醫は十一名ある、市立病院及紀念病院は共に模範的であつて、専門醫が各二十二三名専屬して診療に従事してゐる、又看護婦會が四ヶ所に在つて、看護婦八十人を置き市内外よりの患家の依頼に應じてゐる、其外市立傳染病院がある交通機關としては、九州本線の小倉驛は市の北部に在つて此處より豊州線が分岐してゐるから、毎日數千人の旅客を吞吐し頗る雜沓を極める、又市内を貫通する九軌電車は五分間毎に發着して門司、折尾間を連絡し其速力能く汽車を凌ぐから之に由て運ばるゝ旅客も亦寡くない、其外人力車二百五十輛、營業用自動車六臺、馬車十五臺あつて、小倉一北方間又は會根、松ヶ枝街道等を往復してゐる、市の東部即ち東小倉より香春、伊田を経て上添田に至る小倉鐵道は毎日六回の發着を爲し旅客及貨物の運搬に便してゐる、市内には旅館四十軒、料理屋九十軒を算へ、飲食店は百三十軒の多きに達してゐる、其外遊園地一ヶ所劇場二ヶ所、活動寫真館三ヶ所あつて慰安的の設備も整つてゐる
 教育方面には縣立師範學校を始め縣立中學校、全工業學校、全高等女學校及商業學校、勝山女學館、商工補習學校等がある其外小學校が五校と幼稚園が一校

ある官公衙の主なるものは、十二師團司令部、市役所、區裁判所、警察署、郵便局、砲兵工廠小倉支所、監獄等である其外主なる工場は鐵道院小倉工場、東京製鋼小倉工場、日本硬質陶器、小倉製紙、九州軌道發電所等である
 今小倉に於ける累年の氣象表を掲ぐるに左の通りである

小 倉 の 氣 象

種 別	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
		平 均	6.01	5.56	8.63	13.67	17.67	21.97	25.93	27.21	23.69	17.81	12.51	7.72
最 高 平 均	9.80	9.44	13.19	18.64	22.86	25.98	29.64	31.18	27.82	22.35	17.13	11.63	19.97	
最 低 平 均	2.22	1.67	4.08	8.70	12.42	17.96	22.21	23.04	19.55	12.85	7.91	3.80	11.37	
平 均 較 差	7.58	7.77	9.11	9.94	10.44	8.02	7.43	8.14	8.27	9.50	9.22	7.83	8.60	
最 高 ノ 極	2.09	21.0	25.5	29.9	31.1	35.0	36.0	36.2	34.0	29.5	26.5	22.6	36.2	
最 低 ノ 極	-5.4	-5.0	-4.5	-1.0	4.5	9.5	13.8	17.0	8.0	4.7	0.2	-3.5	-5.4	
靜 穩	5.8	5.2	4.6	3.9	3.3	3.6	3.0	2.2	4.7	3.6	4.3	4.8	48.0	
疾 風 已 上	4.1	3.4	3.7	3.2	3.1	1.3	2.7	2.8	1.7	2.1	3.2	3.4	34.7	
最 多 方 向	W	W	W	N	W	E	E	E	E	E	W	W	W	
天 晴	3.9	4.3	5.7	8.2	9.3	4.1	4.8	6.7	4.6	8.0	6.6	5.1	71.3	
天 曇	7.5	6.1	6.8	6.4	7.1	7.0	8.4	11.9	9.1	9.6	8.2	6.8	94.8	
天 雨	14.1	12.7	13.7	10.8	11.6	12.1	13.6	9.7	12.0	10.0	12.4	13.4	146.1	
天 雪	5.5	5.1	4.6	4.6	3.6	6.8	4.2	2.4	4.3	3.4	2.7	5.8	53.0	
平 均 雲 量	7.3	7.2	6.8	6.2	6.2	7.5	6.9	5.9	6.8	6.0	6.5	6.9	6.7	
降 水 總 量	72.6	85.4	117.7	152.9	124.8	276.3	226.8	120.3	160.7	107.0	65.7	78.0	1588.3	
一 日 最 多	35.0	78.0	43.0	104.7	111.0	232.0	169.0	88.1	104.0	128.7	50.0	56.0	232.0	
降 水 日 數	15.6	13.3	13.9	12.8	9.9	14.5	12.6	10.2	12.5	10.6	10.4	15.2	151.5	

3 若 松 (大正十一年一月調)

若松市は明治二十二年頃は、戸數僅に入百餘に過ぎない一寒村であつたが筑豊炭田が開拓せられ、筑豊鐵道が布設せられてから、石炭は概ね當港から搬出せらるゝ様になつて、今は日本に於ても屈指の輸出港となり、船舶の出入織るが如く港内に碇泊してゐる帆船は常に千を以て數へ帆檣林立して實に洞海灣を埋むるの光景である、同市は新市街であるが設備は割合に能く整ひ、大通りは家屋櫛比し街路も亦清潔であるが、裏通りは甚だ不潔であつて、今尙ほ往時の漁村の面影を止めてゐる、同市は石炭集散の爲め下級労働者の住宅甚だ多く、朝鮮其他より出稼し來れるものも寡くない、足一度其地を踏めば路上狭きまでに建連ねた飲食店に出入せる労働者を見ても、直に開港都市であることが首肯せられる、現在在住する石炭仲仕の數は、二千五百人を超へてゐるとの事であ

る
 同市は唯二島、小石の一部を除くの外は、七八分は上水道が通じてゐる、之れは八幡製鐵所より分水せられたもので、水源は遠賀川の支流である、明治四十五年四月一日から開通し、大正十年度末に於ける現住戸數九千四百七戸（人口四萬二千三百十八人）の中八千六百戸に給水してゐる、此地は洞海湾に望んでゐるが、北西には石峰山高く聳へて、冬の季節風を遮るから風力割合に弱く、氣候は頗る温暖で變化が寡く、降水量も亦極めて寡量である
 衛生状態は近年著しく改善せられ、十年前までは恰も傳染病の淵源地の如くに見做されてゐたが、今は衛生組合の如きも著しく發達して、其施設の如きも縣下稀に見る處で現時の組合數は二十七個に及び、一組合の人員は二百人乃至八百人を算へ、組合長には最も徳望ある人を擧げ、各組競つて事務の刷新を期し醫師と連絡を取つて、互に其成績を擧ぐるに勉めて居る、特に傳染病流行の時などは、各戸相警めて病菌の撲滅に腐心せるが爲め、民度の低きに拘はらず、衛生思想は割合に發達してゐる、然れども朝鮮其他から移住する労働者が多いから傳染病などの蔓延を見ることがないとも言へない、特に稻荷町、田町の如き低濕地は梅雨期になると、下水が逆流して路上に溢れ出す様な事があつて、甚しく不健康地である、最近五ヶ年間に於ける傳染病患者及死亡者數を掲げると次の通りである

年	痘瘡		腸脊髄膜炎		疫痢		赤痢		虎列刺		腸チフス		パラチフス		實扶埜利亞	
	患者	死者	患者	死者	患者	死者	患者	死者	患者	死者	患者	死者	患者	死者	患者	死者
大正六年	2	—	—	—	12	12	23	2	11	10	51	13	2	—	5	1
全 七年	36	10	2	1	16	15	19	1	—	—	43	16	2	1	3	2
全 八年	3	—	—	—	10	8	8	5	1	1	72	22	1	—	—	—
全 九年	7	4	1	1	7	4	5	—	38	22	23	4	—	—	2	1
全 十年	9	4	1	—	7	7	2	—	—	—	43	10	1	1	1	—

左表に示すが如く此地方にも腸窒扶斯は可なり多く年中點發せるが、之に亞くは赤痢及疫痢である、特に疫痢の死亡率が甚だ大きい、同病は一般に其傳染力を輕視するの結果重病者でないと思ふからである、又痘瘡、虎列刺の如きは朝鮮及支那方面から輸入せらるゝことが多く、現に同市に在住する朝鮮人が三百人以上に及べると見ても知られる、然れども是等の傳染病に對しては警戒が頗る嚴重であるから、容易に猖獗を極める様なことはない、夫れは市民の衛生思想が向上してゐると言ふよりは、寧ろ商工業に及ぼす打撃が甚大で各自

の生活上に一大脅威を齎すからである、大正十年より十一年に亘つては「ウイルス」氏病が多發したが患者は農家已外のものに多かつた
 市内には公立病院一ヶ所、私立病院二ヶ所ある、傳染病院は公立のものが一ヶ所ある醫師數は合計四十四名であるが、其中、開業醫が三十三名ある外に齒科醫十一名、産婆三十五名ある、看護婦會は四ヶ所にあつて、各三四名の看護婦を置き患家の需めに應じてゐる、交通は筑豊線の起點若松驛は市の西端に在つて石炭の搬入極めて多く、貨車の出入は毎日數百輛に及ぶ、對岸戸畑との間には連絡船ありて、一時間數回の發着を爲し又洞海湾巡航船ありて、本市と枝光八幡間を航行してゐる、營業自動車は三臺あつて驛前と二島間を往復し、乗合馬車は四臺あつて脇浦行と二島行とがある、又人力車は六十五輛、電話は七百三十餘の加入者がある
 教育機關としては、大字小石に縣立中學校、市内葦屋に高等女學校がある、其外に私立若松高等裁縫女學校、實業補習學校等もあるが、小學校は市内に七校ある、官公衛は市役所、警察署、郵便局、税關支署等であつて主なる會社は、若松築港株式會社、三菱商事株式會社支店等三十餘を算へる、最も風景に富めるは金比良山遊園地、白山神社境内等である

4 戸 畑 (大正十一年一月調)

戸畑町は若松市と相對して、洞海湾の口を扼し戰時石炭界の好況に連れて急速なる發展を遂げたる處であつて、今尚ほ隆々として止まざるの勢である、蓋し戸畑町は水陸の便至大なるが上に、工業地として諸種の特徴を有してゐるから東洋製鐵會社を始め、大工場が此地附近に創設せらるゝものが多く、町勢益々進展して、現時は戸數六千九百十八戸、人口三萬二千五百七十五人を算へ、西は八幡、東は小倉と相接し宛然一大都市を形成してゐる、然れども新市街であるから石造、煉瓦造等の如き高壯なる建物もなく、名所舊蹟の語るべきものもないが、商業は隆盛で市民は甚だ活氣に富んでゐる
 飲料水は高臺の方は概ね可良であるが、低地は總て不良である只東部の低地のみは、稍々可良で中央部は一體に普通である、土地に就て見るに臺地は乾燥で空氣も亦清淨であるが、低地は概ね濕潤で塵埃が多い、而して西部は大部分乾燥であるが北部は稍々濕潤を帯びてゐる、地下水は十尺乃至二十尺である、一體に此地方では低地と臺地とに於て、多少氣候風土を異にしてゐる、即ち低地は工

場地として煤煙や塵埃が頗る多く、且つ飲料水も不良であるから、健康地とは言へないが、下水道は市街地は全部完成してゐる、臺地は展望廣潤で空氣清澄である上に飲料水も良いから、住宅地として最も適當で且つ風波の穩なる洞海湾に望んでゐるから、氣候も温和で衛生状態も可良である、此地方には特種の疾病もなく、傳染病は夏季に於て消化機系統に屬する疾患が多少多い、十年間の平均に依ると一ケ年六十二人で、九月に最も多く十四人を示し、十二月は最も寡く二人に過ぎない

教育方面では有名なる明治専門學校は、大字中原に在つて機械、採鑛、冶金應用化學、電氣の五科に分れてゐる、其外には完全な中等程度の學校はないが、實業補習學校と裁縫女學校がある、又小學校は二校ある、交通機關としては九州本線の戸畑驛は石炭の集散地として有名で、其外に九軌電車があつて戸畑、門司間を往復し若松とは、小蒸氣船を以て絶へず連絡を取つてゐる、官署としては町役場、警察署、郵便局、税關支署派出所等がある、主なる會社は東洋製鐵所を始め明治鑛業、明治製糖、戸畑鑄物、明治紡績、旭硝子工場等の大工場が多い主要なる産物は銑鐵、綿絲、可鍛鑄鐵、合金鑄物、窓硝子、曹達、散炭、精糖、煉瓦等である、此地方には風水害は稀であるが、火災は折々ある最近十年間の統計に依ると風害三千二百圓、水害一萬五百圓、火災五十六萬九千圓である今最近十年間に於ける、月別傳染病患者數を示すと左の通りである

男女別	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	計	死亡數	死亡率
男	2.5	3.3	3.0	1.2	1.3	2.0	3.1	3.9	8.7	4.1	1.2	1.1	35.4	10.5	30%
女	1.8	2.1	1.1	0.8	1.3	1.8	3.4	3.1	5.6	3.8	1.4	0.8	27.0	7.8	29%
計	4.3	5.4	4.1	2.0	2.6	3.8	6.5	7.0	14.3	7.9	2.6	1.9	62.4	18.3	30%

5 八 幡 (大正十一年一月調)

八幡市は明治二十二年頃戸畑と分離して八幡村と稱し、戸數僅に三百七十戸に過ぎざる一農村であつたが、明治二十九年製鐵所が此地に創設せらるゝに至つてより急速なる發展を爲して、東洋の一大工業地と化し、三十三年には戸口千七百戸となりて町制を布き、夫より第二期、第三期の擴張を経て大正六年附近町村を併せて、市政を施行するに至つて非常なる膨脹を爲し現今には、人口拾壹萬、戸數二萬二千を越ゆる龍然たる大都市となり、尙ほ暖々として止まざ

るの勢であつたが、近時財界の不況と共に商業も著しく沈滞したる傾向がある全市は海岸地であるから、氣候は割合に温和で變化が極めて寡ない、即ち平均氣温は十六度三で門司、小倉よりも暖かく較差は六度四で之よりも小さい、而して最高の極は三十五度一に止り、最低の極は氷點下三度五に過ぎない、風は海岸地方である關係上、疾風已上の日數が一ケ年中の約三分の一を占めてゐるが、方向は十月から翌年一月迄は北西風が強く、其他の月は全部南東風が卓越してゐる、天氣は煙霧が常に天空を掩ふてゐるから、曇天日數が甚だ多い、降水總量は千七百三十四耗で小倉より多く、門司と略等しいが日數は小倉より寡く門司よりは多い

八幡は洞海湾の南岸に沿ふた地方であるが、平坦地としては製鐵所構内及之に隣接せる一帯であつて、市街の大部分は傾斜又は丘陵地を爲してゐるから、山手の方は飲料水が割合に良好であるが、海岸地は一體に惡ひ即ち略ぼ電車線路を境界として上手の方は可良であるが、下手の方は概ね不良である、然し濾過するか煮沸すれば大概飲用に供し得る程度のものである、只第四區なる枝光驛附近は最も劣惡で鹽氣を帯びてゐる、井戸の深さは山手の方は三間已上の處もあるが平坦地は一間半位である、但し製鐵所にては全市大藏に遠賀川上流から水を引きて淨水地を設け、關係方面に給水してゐるが、一般住民は日常尙ほ此井水を飲用してゐる、而して下水道は未だ布設の運びに至らないが、當市の如き細民の多い都市では、井水中に汚水の混入するの恐れがあつて衛生上面白くない、元來製鐵所に通勤する職工は二萬四五千あるが、是等は概ね中流已上の生活を營み所謂市民の中堅を爲してゐるが、全所に勞役する人夫も亦二萬四五千あつて雜役に服してゐる、是等は妻子を有せざる浮浪の徒が多いから常に喧々擾々として、市民の秩序を亂り傷害等の犯罪事件を醸すことが、一日十數件に及ぶことがある。

傳染病患者は北九州の工業都市としては、格別多くもないが消化器に關する疾患は著しく多い特に赤痢の如きは、毎年百名近くもあるが其割に死亡者は寡ない、腸窒扶斯も略ぼ同數の患者があるが、死亡率は之より遙に大きい只疫痢は此地方としては割合に寡ない方である、呼吸器疾患は北九州地方は、冬期に於ける氣候の變化大なるに拘はらず、當市は多少海洋氣象の影響を享け、氣温の變化寡なく、且つ新鮮なる海風は絶へず汚濁せる空氣を洗滌するを以て、一部の地方を除くの外は、患者は一般に寡なく、實扶瑛利亞の如きも一ケ年間數名

に過ぎない

醫師数は合計七十八人であるが、其中製鐵所に勤務してゐるものが二十四人ある、又看護婦は八幡市に七十一人、黒崎に六人ゐる、是等の看護婦の大部分は病院又は醫院に勤めてゐるが、市内には看護婦會が四ヶ所にあつて、看護婦が十數人ゐる、其外齒科醫十七人（内製鐵所二名）産婆七十四人ある

交通機關としては、九州本線八幡驛は市の中央に在つて、多數の乗降客を吞吐し、門司折尾間を連絡する九軌電車は市を貫通し、市内に四五ヶ所の停留所があつて、五分間毎に上下してゐる、其外自動車六臺あつて、戸畑、中央區間を運轉し、乗合馬車は四臺あつて黒崎、上津役間を往復してゐる、又人力車は百五輛あつて夫々の立場で客を待つてゐる、宿屋、料理屋、飲食店等は非常に多く、近頃簡易食堂の看板を掲げて在る家も處々に見受ける、又劇場二ヶ所、寄席四ヶ所、活動寫眞館九ヶ所あつて、娛樂場、遊園地等は殊に多い

教育方面では、縣立八幡中學校、高等女學校、實業補習學校、圖書館及、製鐵所職工養成所等がある、小學校は市内に十二校ある、主なる官署は製鐵所、市役所、警察署、郵便局等で、大なる工場は安川電機製作所、九州製鋼、枝光製釘、九州耐火、九州化學工業等の諸會社がある

今八幡に於ける、最近四ヶ年間の氣象統計表を掲げると、次の通りである

八 幡 の 氣 象

種 別	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
氣	平 均	5.71	6.75	9.31	14.57	18.03	21.90	26.53	27.96	23.97	18.14	13.01	9.07	16.25
	最高平均	8.26	9.79	12.75	18.40	21.97	24.93	29.82	31.19	26.94	21.62	16.06	11.55	19.44
	最低平均	3.16	3.71	5.86	10.73	14.09	18.86	23.23	24.72	20.99	14.65	9.96	6.58	13.05
	平均較差	5.10	6.08	6.89	7.67	7.88	6.07	6.59	6.47	5.95	6.97	6.10	4.97	6.40
温	最高ノ極	15.0	20.0	20.5	28.6	29.2	31.5	34.6	35.1	32.2	28.5	25.0	19.5	35.1
	最低ノ極	-3.5	-2.5	-1.3	1.7	7.6	7.3	14.0	20.4	11.7	7.4	-0.6	-2.5	-3.5
風	靜 穩	3.5	1.8	2.3	2.0	3.0	2.3	1.8	0.8	2.3	6.4	4.5	2.3	33.0
	疾風以上	1.00	9.5	12.0	11.0	9.5	9.0	7.0	10.2	8.0	8.0	7.0	10.5	111.7
	最多方向	NW	SE	SE	SE	SE	SE	SE	SE	SE	NW	NW	NW	SE
天 氣	快 晴	2.0	3.0	5.5	7.3	6.0	2.5	2.3	3.3	3.3	6.3	3.0	0.7	45.2
	晴	4.0	5.5	5.8	5.5	7.3	2.8	9.0	12.5	8.8	10.3	7.8	4.3	8.36
	曇	17.0	13.8	12.3	13.5	13.8	17.5	15.5	13.5	12.8	11.5	15.8	22.3	179.3
	雨 雪	8.0	6.0	7.5	3.8	4.0	7.0	4.3	1.8	5.3	3.0	3.5	3.7	57.9
降 水	總 量	82.2	109.6	166.6	106.0	108.8	313.6	192.5	122.7	234.8	75.2	81.0	91.0	1734.0
	一日最多	24.8	34.0	49.5	76.1	47.0	203.0	98.7	132.9	111.6	38.0	29.9	49.6	203.0
	降水日數	17.0	16.7	16.0	10.3	9.7	15.3	12.3	4.7	12.7	8.7	12.7	10.5	146.6

二 東部地方の氣候風土

東部地方は内海に面して居るから、氣候は温和な筈であるが、豊前地方は裏日本に近ひから、冬季には北西風が背梁山脈を超へて吹き込んで來る、夫れで氣候が割合に峻烈で風も相當に強く、氣温も割合に低いが、只氣温の較差は内海地方の特性として、他の方面よりは著しく小である、夫れは唯に一年間に於ける、寒暖の差が小なる許りではなく、一日中に於ける晝夜の氣温の差も亦甚だ小である、天氣も冬季を除けば先づ長い方であるから、多少氣温は低くても氣候上から言ふと善良な方である、全方面でも行橋附近には工業會社などが勃發して來たが、其他には純農村が多いから割合に住民なども質實温健である

1 八 屋 (大正十一年一月調)

八屋は東部地方の内では、最も南方に位して居るから、日本海方面の惡天氣の影響を享けることが割合に寡ない、且つ南海岸地方に在つて氣温の變化が激しくないから、氣候は稍々温和であるが氣温は門司、小倉等の如き北東部地方に較べると少しく低温である、即ち年の平均氣温は十五度四であつて行橋よりは〇、二度高いが、北東部の海岸に較べると〇、三度位低い、斯く内海地方に面する海岸地方で在つても、年に仍つては可なりの變化のあるもので、最高氣温の極は三十八度に達したことがあれば、又最低氣温の極は氷點下九度五に及んだことがある、風は寒候には北又は北西風が優勢であるが、暖候には東又は北東風が卓越する、疾風以上の回数は東部地方の内では多い方である、天氣は夏秋の二季は可良であるが其他は餘り善くない、降水量は千六百十耗余で縣下では寡ない方である、最多日量は頗る大きく三百耗に及んだことがあるが、之れは少し例外である

八屋町は宇ノ島町と相隣接した都邑で今は殆ど町續きとなつて、其中間に豊州線の宇ノ島驛がある、土地は海岸に沿ふて平坦であるが、多少高臺を爲して居る處もある、夫れで飲料水は先づ可良なる方で、濾過せずとも飲料に供することが出来る、下水道の如きは格別の設備はない、狹隘なる市街であるから、自然の流出に委して居る、地方病や傳染病は極めて寡ない、之れは海岸地氣候がよく、空氣も清潔で健康地であるからである、元來八屋は極めて質朴な古風な小都會であるが、宇ノ島の方は多數の帆船などの碇泊する漁港であるから、料理屋や飲食店が相備比して居つて、風儀なども餘り善くない、兩邑共に

多少は人口も増加して居るが、海陸共に格別の産物もなく、地域も狭隘であるから特記すべき程のものもない、此附近は養蠶が可なり盛んで純農民が多いから、概ね土着の人で一般に人氣は悪くない

交通は前記宇ノ島驛の外此地を起點として、耶馬溪に通ずる宇ノ島鐵道が在つて、遊覽客の昇降するものが多い、兩驛前には十數輛の人力車が客を待つて居るが、賃金は他の地方に較べると多少低廉である、又旅舎も八屋町寄りの方に數軒ある、孰も規模は小さいが宿料は廉である、官公衙としては郡役所、警察署、郵便局、町役場等の外縣立築上中學校、高等女學校及農學校等がある、其外小學校と圖書館がある、娛樂場には劇場、玉突場等がある

今八屋に於ける累年の氣象表を掲げると次の通りである

種別		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
氣	平均	5.34	5.15	8.42	13.23	17.56	21.98	26.08	27.13	23.35	17.64	12.23	7.20	15.44
	最高平均	9.62	9.44	12.87	18.44	23.37	26.18	30.04	31.60	27.82	22.45	17.01	11.46	20.03
	最低平均	1.05	0.86	3.73	8.02	12.16	17.77	22.12	22.66	18.87	12.82	7.43	2.93	11.62
	平均較差	8.57	8.58	9.14	10.42	11.21	3.41	8.92	8.94	8.95	9.63	9.58	8.53	8.41
溫	最高ノ極	21.5	20.0	25.2	28.6	30.0	35.0	38.0	36.7	37.0	29.6	26.6	21.3	38.0
	最低ノ極	-7.5	-7.6	-5.5	-0.6	1.5	8.0	12.0	16.5	10.5	4.4	-3.0	-9.5	-9.5
風	靜穩	4.1	4.0	3.1	3.3	1.5	2.8	1.3	1.6	2.4	2.0	2.2	2.6	3.09
	疾風已上	7.2	6.2	6.3	4.1	4.4	2.9	3.7	4.1	3.3	3.2	5.6	6.5	5.75
	最多方向	W	NW	NW	NW	NE	NE	E	E	NE	NW	W	NW	NW
天	快晴	5.0	4.4	5.6	6.8	6.2	3.9	5.4	5.4	4.8	7.2	7.4	5.5	6.87
	晴	9.5	7.6	8.0	7.9	8.8	7.8	9.5	13.4	9.1	9.6	9.6	8.2	10.90
	曇	12.2	11.4	11.5	10.2	11.6	11.4	12.1	8.6	11.0	10.4	9.6	12.9	13.29
	雨雪	4.2	5.0	5.8	5.2	4.2	6.9	4.0	2.3	5.0	3.9	3.6	4.5	5.46
平均雲量		6.7	7.0	6.7	6.4	6.3	7.5	6.9	5.5	6.7	6.2	6.2	6.7	6.6
降水	總量	54.7	73.2	115.2	153.2	120.4	291.0	241.8	122.2	21.00	11.82	55.9	55.6	1611.4
	一日最多	38.0	63.5	52.3	129.9	104.2	120.0	180.0	95.0	303.5	134.0	45.0	49.0	303.5
	降水日數	11.2	11.2	12.7	12.8	10.0	14.5	12.0	8.7	12.5	9.2	8.5	10.6	133.9

2 行 橋 (大正十一年六月調)

行橋町は行事、大橋、宮市の三町よりなり戸數千四百四十一、人口七千九十七を有す、氣候は内海に面してゐる割合には温和でなく、冬は玄海灘を吹き渡つて來る寒風が、企救半島を超へて京都平野に及ぶから、福岡邊よりも却て寒く感ずる位で梅、櫻の開花期なども一週間位遅れる様である、然し多少内海氣候

の影響を享けるから、氣温の變化は寡ない即ち平均氣温は十五度二であるが、平均較差は九度一である、而して最高の極は三十七度五に昇り、最低の極は氷點下七度三に降つたことがある、風は靜穩の日は甚だ寡なく、疾風已上の日が多い、風向は夏秋雨季には北東風が最多であるが、其他は西風が優勢である、天氣は遠賀平原地方に較べると好晴の日が多いが、降水量は甚だ寡ない方である、飲料水は各方面共に可良であつて、濾過せずして飲料に供することが出来る、然し井戸は淺く構造が不完全であるから、少し旱天が打續くと著しく水量を減する、然し水質には關係がない、下水道の設備は未だ出来てゐないが最も繁華なる中央部では自然の儘に吸込ましめ或は附近の溝渠に放流せしめてゐる、元來此地方は諸方から細流が流れ合つてゐるから、下水が停滯して土地は一体に濕潤な方である、然れども近來は各町に衛生組合を設け、消毒法や清潔法の宣傳に勉め、春秋二季の大掃除の如きも、町民が自ら進んで勵行する様になつて衛生思想なども餘程向上するに至つた、人氣は表面温良であるが、多少執拗な點があるとの非難がある

當町は豊州線行橋驛の所在地で、田川線は此處に起り伊田、後藤寺、添田方面に達してゐる、自動車二臺、乗合馬車四臺あつて久保村より行橋を経て今元村に至る間を往復してゐる、人力車は合計三十五輛あるが、内二十輛は停車場構内にある、宿屋は十二軒あるも高等な旅館はない、其外料理店二十六軒、飲食店十七軒ある、此郡の農村は一般に有福であつて、農家一戸當り一町一二反を所有し、優に自給自活してゐるから勤儉の美風に乏しく、衣食住は割合に發達して茶、書畫、骨董等の如き娛樂が熾に行はれ、從て高價なる品を賞翫せらるゝから、自然に優良品を産出せらるゝのである、近時經濟界が非常なる不況に陥つたけれども、本町附近は農を以て主業としてゐるから、打撃を享けることが寡なく郵便局、銀行等の貯金は今尙ほ増加してゐるとのことである

附近の特産物は米及蝦、烏賊、蟹、章魚等の海産物と材木、竹、木炭等の林産物を産出するも是等は少額である、近時は梨、葡萄、桃等の果實の栽培が漸く熾になつた

官署は郡役所、警察署、稅務署、區裁判所、土木管區事務所、町役場、郵便局等があつて公衆電話は五十二口ある、學校は約半里を距つる豊津村には縣立豊津中學校があり、泉村には郡立農學校、縣立高等女學校がある、町内には私立裁縫女學校がある其外小學校、圖書館が各一つある娛樂場としては劇場、活動

寫眞館、玉突塲等があり工場には明治紡績行橋工場がある、名所舊蹟として著しきものはなく、行橋正八幡宮、大橋八幡宮は共に縣社で春秋二季の大祭日には遠近より人出多く、三日間位大に賑ふ
行橋に於ける累年の氣象表を下に掲ぐ

行 橋 の 氣 象

種 別	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
氣 温	平 均	5.38	5.12	8.17	12.92	17.40	21.71	25.89	26.87	23.06	17.21	11.86	7.20	15.23
	最高平均	9.53	9.41	12.76	17.52	22.63	26.04	29.72	30.92	27.62	22.42	16.97	11.61	19.76
	最低平均	1.23	0.83	3.60	7.90	12.18	17.37	22.07	22.81	18.49	12.01	6.75	2.75	10.67
	平均較差	8.30	8.58	9.16	9.62	10.45	8.67	7.65	8.11	9.13	10.41	10.22	8.86	9.09
温	最高ノ極	21.5	19.0	25.6	27.8	31.0	34.5	37.5	37.5	35.0	29.0	36.5	21.8	37.5
	最低ノ極	-7.0	-7.3	-4.5	-1.5	1.5	8.0	10.7	15.0	8.0	2.7	-1.0	-7.2	-7.3
風	靜 穩	4.5	5.0	3.0	2.6	2.8	2.6	1.6	2.4	4.5	5.3	5.8	4.2	4.43
	疾風以上	4.8	4.0	4.1	4.0	3.5	3.4	3.2	3.8	1.4	2.2	3.4	4.2	4.45
	最多方向	W	W	W	NE	NE	NE	NE	NE	E	NE	W	W	NE
天 氣	快 晴	5.5	5.1	6.2	7.4	8.4	4.3	6.4	8.8	5.1	7.0	6.5	5.6	7.59
	晴	9.4	7.9	8.1	8.1	8.6	7.9	10.0	12.0	10.1	10.8	9.8	9.1	11.18
	曇	11.5	10.9	11.1	9.3	10.2	11.0	10.5	7.7	11.0	9.6	10.4	11.4	12.46
	雨 雪	4.6	4.7	5.6	5.2	3.9	6.9	4.2	2.5	3.8	3.5	3.3	4.7	5.29
平均雲量	6.4	6.8	6.5	6.0	5.9	7.4	6.4	5.1	6.6	6.0	6.2	6.3	6.3	
降 水	總 量	65.1	83.8	119.2	155.7	133.8	296.3	256.8	119.5	176.8	122.1	64.9	72.2	1666.2
	一日最多	35.0	73.0	50.0	162.0	110.3	140.0	240.0	80.0	180.0	190.0	60.1	47.0	240.0
	降水日數	13.6	12.4	13.7	12.9	10.6	14.6	12.1	10.0	13.0	10.6	9.7	13.0	146.5

三 遠賀平原地方の氣候風土

遠賀平原は氣候の餘り良い處ではない、夫れは内陸であるから夏は風が弱く、氣温が高いから蒸暑く、時としては異常の高温を示すことがある、大正三年八月には添田にて三十九度五（華氏百三度）を示した、冬は又北部地方の如く大陸高氣壓の發展に依つて、北西風が強く内陸に吹き込んで來るから、屢々猛烈なる氣候を現はすことがある、大正六年十二月には後藤寺に於て氷点下九度五を示した、斯の如く寒暑の變化が大であるが、晝夜の變化も之と同様に著しい、且つ天氣の變り易い處であるから、雨量も多く晴朗なる天氣は寡ない方である、夫れで毎年初霞、初霜の現象なども、他の方面から較べると一週間已上も早く晩霜は又一週間已上も後れるのである

I 折 尾 (大正十年十一月調)

折尾は九州本線と筑豊線との乗換驛に當り、旅客の集散頻繁なるが爲め、近年に至り著しき發展を遂げ、大正九年末に於ては戸數千五百〇三、人口八千〇四十を算へ尙ほ益々増加しつつあるが、住民は商人四分、農民六分の割合である之を以て近年は郡役所、警察署、稅務署、中學校、女學校等主なる官署は概ね全町に移轉又は新設せらるゝに至つた、氣候は北部の海岸に近い關係上冬季の天氣は良好ではないが、内陸地方の如く氣候の變化は激しくない、風は相當に強いが雨は寡ない方である、全町は土地頗る濕潤で蔬菜類などの出來も悪しく二毛作は得られない、一般に飲料水が甚だ劣悪で、稍々可良なものが二三ヶ所あるのみで他は總て涸濁甚しく、濾過するも飲料に供せられないものが多い概ね遠方から汲んで來て、纔に飲料を充たすの有様で、雜用としては川水を用ひ又は堀川の水を使用してゐる處が多い、兎に角全町は用水の甚だ不自由なる處で下水道の如きも一部分には布設して在るが、何分地下水が極めて高く井水面の如き地下纔に一間にも足りないから、土地が低濕で排水が不充分で不潔な處が多い

斯の如く井水が不良で土地が濕潤であるから、健康地とは言へないが、然し割合に傳染病なども寡く、腸室扶斯を始め赤痢や疫痢の如き消化機病なども、平常に於ては格別流行する様なことはない、然れども海陸の交通便なるが爲め夏期に於て虎列刺や痘瘡の如き縣外から、輸入せらるゝ傳染病に對しては大に警戒する必要がある、特に附近の炭坑地では年中多少の腸室扶斯患者が絶へない、傳染病院は一ヶ所あつて、醫院は町内に五ヶ所外に出張所が二ヶ所ある、住民千百五十人に對し醫師一人の割合で其比率は少し小さい方である
交通機關は九州本線と筑豊線の交錯点であるから、乗換客が非常に多く發着毎に昇降客が常に驛に溢るゝの状態である、其外當所は九軌電車の終點で毎日門司方面に來往する旅客多く、發車數も亦頗る頻繁で且つ其速力は普通の汽車を凌ぐの有様で交通上至大の便利を與へてゐる外に、人力車が二十台、乗合馬車が十台ある馬車は折尾—蘆屋間、則松—永犬丸間及折尾—二島間を往復してゐる、自働車は折尾、蘆屋間の運轉出願中である、當地には彼の堀川と稱し遠賀川より洞海湾に通ずる有名なる、運河が町の中央を貫通してゐて、毎日該運河を往復する船數が千艘を超へてゐる、是等は總て高松、大島等の諸炭坑から石

炭を洞海湾沿岸に運搬するもので在つて、之れ又貨物に對する大なる運輸機關である

當町は石炭の供給が自由にして、且つ洞海湾にも近いが爲め附近に工業會社の設立せらるゝもの多く、三好鑛業、日本製鐵、洞海鑛業、日本電氣冶金等の諸會社勃興し一時は殷賑を極めたが、財界の變動に遭ひ作業を休止したものが多い、然れども汽車其他石炭の使用多きが爲め、驛附近は煤煙甚しく空氣著しく汚濁し健康上宜しくない、郵便局は三等局で電話は約百番位ある、此地も冬季に於ける空氣が甚しく濕潤であるから、火災などは甚だ寡く最近十年間に纔に一二回あつただけである

重なる官公廨としては郡役所、警察署、稅務署、郵便局、土木管區事務所等が在る學校は縣立東筑中學校、高等女學校、郡立農學校及小學校が二校ある

2 直 方 (大正十年十一月調)

直方町は遠賀川の二大支流たる嘉麻、彦山兩川の相會したる地點に在つて昔から此附近では最も繁華なる都會である、氣候は遠賀平原地方の内では割合に良好なる方であるが、夫でも海岸方面に比べると氣候の變化が可なり大きく、霜雪の季節などは、福岡に較べると一週間已上も早い、平均氣温は十五度四、最高の平均は二十度三、最低の平均は十度六で在つて飯塚に較べると、約〇度二高い風は冬と夏とは南風が多く、春と秋は北風が多いが孰れにしても風力は強くない、天氣は不良なる日が多いが降水日數及其量は内陸の中では多い方ではない

直方は筑豊線の乗換驛に當り、毎日筑豊炭田より搬出せらるゝ莫大なる石炭は總て當驛を通過して洞海湾の方に運搬せらるゝから、夫れに關連せる旅客の來往は頗る頻繁で、昇降客の雜踏することは、九州の他の孰れの都市に較ぶるも決して劣らざるの状態である、此地附近には諸種の工場、特に鐵工所が多數に存在して居たが、財界の不況に伴れ近時は休業して居る處が多い、之を以て驛附近は煤煙常に天に漲り、砂塵濛々として空氣甚しく汚濁せるも、町内は割合に清潔で在つて、大通りは商度相備比し物價の需給は可なり潤澤で、些の不自由をも感じない、然れども此地は從來よりも物價の著しく高値なる地方で特に近時は炭坑業の發展と共に、益々暴騰を來したから、生活狀態は決して簡易ではない

同町も又炭坑地方の通有性なる飲料水の不良なることは、附近の町村に譲らない、井水は大概金氣を帶び、且つ混濁甚しく其中の良水と雖も、一度漏過せざれば飲料には供せられない、只遠賀川に沿ひたる地方、即ち大字山部一帯は河水の自然の濾過に依つて稍可良なる井水が湧出してゐる、又西町方面二百餘軒の住民は共同して簡易水道を設置し、一部の鑛業家は遠賀川の河水を汲上げ之を濾過して使用して居るが、然し是等は概ね其關係者に限られてあつて、一般の町民の使用する飲料水は頗る不良である、下水道は町の中央に大溝渠が貫通して居るが同町は一體に低地で在つて、之に流入すべき小下水路が常に停滯して居るから、従つて戸々の下水は甚しく不潔で衛生上頗る遺憾とする處である近時下水新設の議があるが、實行は甚だ困難である、之れが爲め腸窒扶斯患者は毎年五六名乃至十數名ある、傳染病院は町内に一ヶ所あつて、町醫に診療を囑託してある、醫院は直方病院の外開業醫十六名あつて、合計三四十名の醫師が居る譯であるから、住民五百人に對し醫師一人ある其外齒科醫六人、産婆十二人ある、尙ほ町内に看護婦會が二ヶ所あつて、十五名の看護婦が常勤して居る

此地方には折々痘瘡患者が多發することがある、大正九年には十一名の患者が出て其中六名は死亡した、又幼児の死亡率も割合に多く、四十%位を示してゐる、然れども亦八十歳已上の高齢者も寡くない、大正十年十一月の調べに據ると男二十九名女三十四名、合計六十三名あるから、住民三百人に對し一人ある割合である、又大正九年度に於ける出産數は男二百九十二名、女二百四十三名で合計五百三十五名に對し、死亡者は男二百三十六名、女二百一人、合計四百三十七人で在つて、一ヶ年間約百人の人口増加を示して居る

交通機關としては前記、筑豊線中で伊田線と上山田線との分岐點に當つて居るから汽車の發着が頗る頻繁である、外に當町より福丸に通ずる輕便汽車がある、其外荷馬車の數四十七臺、人力車の數九十輛、營業用自働車二臺あつて現今直方一下境間及直方一若宮間を運轉して居る、尙ほ此外に直方一神湊間は大正十一年中には開始の筈で直方一木屋瀬間は運轉出願中である

主なる官署としては郡役所、警察署、稅務署、小林區署、土木管區出張所、登記所出張所、中學校、高等女學校、實業補習學校等がある、又高等小學校及幼稚園もある、郵便局は二等局であつて外に無集配局が二ヶ所ある、電話は約五百番あつて町内に自働電話が二ヶ所ある、遊園地としては直方驛の南方約二

町の處に多賀神社がある、其の苑内は高燥にして展望の勝がある、主なる工場としては中村組鐵工所（職工六十）直方鐵工所（職工四十）等がある、其外魚市場三ヶ所、野菜市場、果物市場等がある、此地は火災が甚だ寡なく大正十年に一戸焼失した計りで其外に火災はない、先づ安全な地方に屬する様である
今直方に於ける氣象表を掲げると次の通りである

種別	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
氣	平均	5.22	5.19	8.32	13.51	17.84	22.07	6.19	27.31	23.44	17.16	11.92	7.07	15.44
	最高平均	9.65	9.66	13.13	19.15	23.56	26.78	30.34	31.80	28.03	22.62	17.29	11.65	20.31
	最低平均	0.78	0.71	3.53	7.86	12.12	17.35	22.03	22.82	18.84	11.70	6.55	2.48	10.56
	平均較差	8.87	8.95	9.60	11.29	11.44	9.43	8.31	8.98	9.19	10.92	1.074	9.17	9.75
温	最高ノ極	22.6	21.8	2.45	23.0	32.0	35.8	36.7	37.0	3.50	29.6	28.0	23.0	37.0
	最低ノ極	-7.6	-6.0	-4.2	-1.5	2.5	8.0	11.3	15.0	8.0	1.0	-2.5	-8.5	-8.5
風	靜穩	7.2	6.6	8.2	5.1	5.7	7.3	5.5	4.4	6.4	6.5	8.3	7.3	7.85
	疾風已上	1.7	1.1	2.7	1.8	1.6	1.9	1.7	1.7	1.0	1.8	2.7	1.8	2.15
	最多風向	S	N	N	N	S	S	S	S	N	N	N	S	S
天氣	快晴	3.8	3.8	5.4	6.8	7.3	4.1	4.6	5.5	4.7	5.4	6.2	4.2	6.18
	晴	8.4	6.7	8.9	8.1	9.4	7.8	11.7	15.8	11.4	11.7	11.2	8.8	11.99
	雲	12.4	12.6	12.2	9.6	9.7	11.4	10.4	7.6	10.0	10.7	9.4	12.9	12.89
	雨 雪	6.3	5.1	4.5	5.6	4.5	7.0	4.3	2.0	3.9	3.2	3.1	5.2	5.47
雨量	平均	6.6	7.3	6.4	5.8	5.3	6.5	6.2	5.4	6.1	6.2	6.3	6.8	6.2
	總量	7.29	87.4	114.8	151.5	124.3	236.0	257.4	138.7	183.4	117.8	66.7	99.4	1685.8
降水	一日最多	36.7	45.0	69.0	121.5	98.9	238.0	155.4	88.5	122.6	97.8	42.7	40.0	238.0
	降水日數	13.4	11.6	13.4	10.5	13.1	13.9	12.8	10.1	11.6	10.0	9.67	13.4	140.8

3 後藤寺 (大正十一年八月調)

後藤寺町は明治二十四五年頃までは、戸數纔に數十を算する一寒村に過ぎなかつたが、三井鑛業所が此處に炭坑業を開始して已來、急劇なる發展を遂げ今日では接續せる伊田町を加へ、人口五萬餘に達せる龐然たる一大市街地を形成し尙ほ駭々として止まざるの状態である、氣候は遠賀平原の中でも變化の最も多い處である、夫れは冬期は北西の寒風が吹込んで來るから、風は強くはないが氣温は著しく低下することがある、又夏期は内陸のこどゝて、氣流の移動が寡ないから、異常の高温を呈することがある、特に炭坑地方は一般に變化が著しい、平均氣温は南筑海岸に比敵する程の高温で、年平均は十五度九である、而して最高の平均は二十一度〇、最低の平均は十度七であつて、較差は十度三に及んでゐる、風は四季を通じて弱く疾風已上の日數は頗る寡い、方向は夏季三

ヶ月間は南西風か又は東風が多いが、其他は總て北西風が優勢である、天氣は快晴が寡なく曇天が多い、降水量は千八百四十六耗、降水日數は百六十四日であつて共に多い方である

井水は舊村時代から、甚だ不良で且つ水量にも乏しく人口の増加と共に、漸次飲料水の不足を來し、十數戸に對し纔に一個の井戸を使用するの有様であつた夫れで田川鑛業所では、遠賀川の上流より引水して簡易なる水道を造り、關係従業者に供給してゐたが、近年に至り水道株式會社が組織せられ、大正十年十二月より通水を開始し、現今では四百餘戸に給水してゐるから、一二年の後は全部水道を使用するに至るであらう

後藤寺町の現住戸數(大正九年十二月調)は六千二百七十五戸、人口は二萬八千百十一人で伊田町の現住戸數は二千四百七十一戸、人口は二萬二千三百七十七三人である、是等多數の人民は孰れも他町村より、移住し來つたもので所謂土着の民は一人もないから、眞に都市永遠の利益を考へるものは甚だ寡ない、從て商業なども可なり繁榮で、旅客の出入多きに拘はらず、都市全體としては道路と云い建築物と云い頗る貧弱なるを免れない、又衛生思想なども甚だ低く、流行病の猖獗なる夏期などには、特に寒心すべきものがある、元來同地の炭坑業は三井家の經營に屬し現業員の數は總計一萬四五千人に上り、諸般の設備等も充分に整ひ醫局の如きは醫師十二人、藥劑師三人、看護婦四十人を使用し毎日外來患者千人乃至千二百人を診療してゐる、且つ重病者を收容する爲め病室が四十、隔離室が二十ある、其外伊田分院一ヶ所保育所四ヶ所を設置し、産婆、看護婦等をして、育児衛生等の事に當らしてゐるから、坑夫社界の衛生状態は左迄悪くはない

傳染病は有名なる「ワイル」氏病多く(風土病の項参照)毎年の患者數十名に及んでゐたが、近年は「ワクチン」注射を勵行するの結果、大に罹病者が減少した、腸室扶斯病は本所附近が最も猖獗で死亡率も亦甚だ高い、最近五ヶ年間の患者數を見るに最も寡なきは、大正六年の百十六人(内死亡四十三人)で最も多きは、大正八年の九百四十三人(内死亡二百十九人)で一ヶ年の平均患者四百四十三人、同死亡九十三人であるから、死亡率は四十八%である、斯く死亡率の高いは一般に該病に對する注意の周到ならざるが爲めで、三井炭坑醫局の調査では、死亡率は二十五%を出でないとの事である、兎に角斯る多數の患者を出せるは、他には全く見ざる處であるが、近來は注射を奨励するので患者が

大に減少した、又十二指腸蟲患者も甚だ多く、是等も亦此地方の準風土病と見做すべきものである、其外炭坑地方には一般に脚氣患者が多いが、夫れは飲料水が悪いと土地が濕潤であるからである、大正十一年の如きは、非常に暑氣が強かつたが、空氣も土地も著しく乾燥してゐたから、該患者は甚だ寡なかつた百日咳、肺炎の如き呼吸器病は、濕潤なる土地ではあるが、冬季の氣候が可なり峻烈であるから患者も寡くない

醫師數は醫局の在勤者を除きて、後藤寺町に七人ある、其外齒科醫三人看護婦十一人あるが、派出看護婦は福岡其他より招聘することになつてゐる、傳染病院は町營で、後藤寺及伊田に各一ヶ所ある孰れも、町醫に囑託して診療に従事せしめてゐるが、年中殆ど患者を絶たない

交通機關としては、後藤寺驛は田川線の主要驛で、之より分岐した宮床線がある共に石炭の搬出に忙しい、伊田は田川線の重要驛で且つ、豊筑線の一方の終點であるから、乗換客が常に驛内に充満してゐる、此伊田、後藤寺兩驛は歩程僅に半時間に過ぎないが、鐵路の連絡悪しき時は一二時間も空費することがあつて頗る不便である、若し後藤寺より九州本線に出でんとせば、必ず伊田、折尾で乗換を要するのみならず、時としては直方でも又乗換を要することがある、夫れで道程の割合には多くの時間を費す、飯塚方面へ行くには陸路船尾峠を越せば、優に一時間餘で達するが鐵道に依ると、三時間もかかる近頃九州産業鐵道株式會社の經營に係る、同鐵道は船尾山に至る二哩間竣工し、同山の大理石を運搬し、之を製材して廣く販賣してゐるが、此線路は追て飯塚町へまで延長して旅客の便利を計る筈である、其外小倉鐵道は町の東端を通過してゐるから添田又は小倉方面に行くには便利である、乗合馬車は四五臺あつて、上山田方面を往復し、自働車二臺も亦同方面を運轉してゐるから、此方面との交通は割合に便利である、人力車は八輛あつて驛前に駐車してゐる

娛樂場としては、劇場、寄席各一ヶ所、活動常設館二ヶ所、球戯場一ヶ所ある又宿屋は合計十五軒ある、其内上等旅館が四軒ある、電話は後藤寺、伊田に夫々公衆電話があるが加入者は各百位である、大炭坑は三井田川炭坑の外鈴木の起行小松炭坑がある、隣村にある金田、方城兩炭坑は三菱の經營する處である其外赤池、川崎、添田等附近に大炭坑が多い、工場には三井經營の瓦斯發電所及「コールタール」工場がある

官公署は後藤寺町には警察署、郵便局、裁判所出張所、縣立高等女學校及縣立

田川農林學校、田川中學校、郡立農學校等が附近にあるが小學校は二校ある、又伊田町には巡查部長派出所、郵便局があり學校は田川豫備學校、高等小學校である

今後藤寺に於ける累年の觀測成績を左に掲ぐ

種別		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
氣	平均	5.11	5.66	8.65	13.99	18.40	22.76	27.35	27.81	24.05	17.62	12.15	6.85	15.87
	最高平均	9.45	10.26	13.84	19.66	24.74	27.70	32.27	32.95	28.95	23.14	17.52	11.65	21.01
	最低平均	0.77	1.06	3.47	8.32	12.07	17.82	22.41	22.63	19.21	12.09	6.77	2.5	10.74
	平均較差	8.68	9.20	10.37	11.34	12.67	9.88	9.86	10.32	9.77	11.05	10.75	9.40	10.27
温	最高ノ極	19.8	22.0	25.5	29.5	32.8	35.0	38.8	37.6	36.5	30.0	27.7	22.8	38.8
	最低ノ極	-6.5	-6.5	-4.4	-1.2	3.5	9.5	13.5	16.5	8.6	2.1	-2.4	-9.5	-9.5
風	靜 穩	2.7	3.8	1.6	2.1	1.6	0.8	1.0	1.3	1.4	1.9	2.4	3.8	2.44
	疾風已上	1.6	1.4	1.4	1.7	1.2	1.9	2.4	1.6	1.1	1.2	0.9	0.7	1.71
	最多方向	NW	NW	NW	NW	NW	SW	SW	E	NW	NW	NW	NW	NW
天	快 晴	4.8	4.6	5.0	6.5	7.4	2.4	5.1	5.2	3.9	4.7	5.4	4.3	5.93
	晴	6.7	6.3	8.6	8.3	10.5	7.2	12.1	15.1	10.9	12.2	9.9	9.6	11.74
	曇	13.4	11.9	12.6	10.3	9.6	11.6	10.3	8.1	11.1	10.5	11.7	11.5	13.26
	雨 雪	6.1	5.4	4.8	4.8	3.6	9.0	3.5	2.5	4.1	3.6	3.0	5.5	5.59
平均雲量		7.0	7.1	6.8	6.4	6.0	7.9	6.4	5.8	7.1	6.4	6.4	7.0	6.7
降 水	總 量	65.1	82.8	122.0	176.7	117.8	375.6	260.6	134.0	224.3	152.4	67.9	66.9	1846.1
	最 多	35.8	45.0	46.2	77.3	116.1	142.3	135.6	127.0	197.5	98.5	35.9	41.3	197.5
	降水日數	15.9	14.5	14.0	13.6	10.6	18.1	12.8	11.0	13.8	11.6	11.7	16.5	164.1

4 飯 塚 (大正十年十一月調)

飯塚町は嘉穂郡の中央に在る繁華な都會で、嘉麻川に沿ひ人口約五千六百餘を有してゐる、此地は遠賀平原の上部に位せる關係上、氣候の極めて温和なる地方とは云へない、夏は割合に暑く冬は又割合に寒ひことがある、然し一年間の平均温度は十五度二であつて、最高の平均は二十度二、最低の平均は十度一で較差が十度一に及んでゐる、而して絶對最高は三十七度に昇り、絶對最低は氷點下七度六に降つたことがある、最多風向は北であるが、風力は敢て強くはなく、疾風已上の日數は一年間二十九日を算へるに過ぎない、天氣は曇天が多く降水日數は、百四十八日に及んでゐるが、降水總量は千七百四十七耗で在つて平地では多ひ方でも、少ない方でもない

此町は一體に井水が不良で、飲料に供し得るものは僅に其中の三分の一にも足りない、七分已上は不適であるが、偶には濾過して之を用ひ、或は河水を導き

て細砂の中を滲透せしめて飲料に供してゐる處もある、大炭坑の中には簡易水道を設けて、社内のもに供給してゐる處も二三所ある、然れども一般の町民は尙ほ此不潔にして、金氣の多ひ濁した井戸の水を飲用してゐる状態である夫れで近時は上水道を設計せんとするの議が、一部の町民の間に唱導せられ、漸次其聲を高めて來たから、近く實現せらるゝであらう、下水道に就ても又計畫中に屬してゐる、故に傳染病特に腸室扶斯は大正七年以來、年中殆ど新患者の絶ゆることがなく「ワイル」氏病も亦毎年多少の發患があるから、町内には三ヶ所（飯塚、鯉田、上三緒）に傳染病院を設置し、孰も町醫に囑託して診療に従事せしめてゐる、醫院として、飯塚に飯塚病院があつて、院長已下醫員十二名専心に醫療に従事してゐる、町内には開業醫拾人あつて、住民二百五十五人に對し醫師一人ある割合である、其外齒科醫六七人あるから、患者の療養には何等の不自由もない、加ふるに看護婦會三ヶ所あつて、看護婦十三人を常置し、産婆は四十五人あつて患者の招聘に應じてゐる、之れ又數の上に於ては充分である

交通機關としては、筑豊本線の飯塚驛は全町字菰田に在つて、上下各十回の發着を爲し、支線長尾線は各五回の發着を爲してゐる、其外町内には人力車八十五輛、乗合馬車二十八臺、營業自動車七臺ある、運轉區域は飯塚一山野間、飯塚一幸袋間及飯塚一天道間は自動車及馬車が在り、飯塚の庄内一有井間は馬車のみである、郵便局は飯塚に準二等局が在り、六七町を距たりたる驛附近には、郵便取扱所がある、又鯉田には三等郵便局がある、警察署は本町に本署があり驛前に派出所がある、其他の重なる官衙としては郡役所、區裁判所、縣立中學校、全高等女學校、郡立農學校、嘉穂家政女學校及小學校三校、幼稚園一校ある

町附近に於ける工業會社は、幸袋工作所（職工三百名已上）と大正化學研究所位のもので大工場はなく、附近に小煙突が二十有餘ある、町民は農、商、工の三部より成つてゐるが、其内商業者最も多く、農業者が最も寡ない、土地は概ね濕潤であるから、蔬菜類の耕作にも不適當で在つて、附近の村落から大部分之を仰ひてゐる状態である、全町は昔から相當に繁華なる都會であるが、近來炭坑業の旺盛になりたると共に、次第に工業地と化し現今では土着民四分、移住民六分の割合を示し、物價は益々騰貴し、直方町よりも却て高價を示せる物品が多く、決して生活の簡易な土地ではない

今飯塚の氣象を示すと次表の通りである

飯 塚 の 氣 象

種 別	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
氣	平 均	5.18	5.02	8.16	13.52	17.74	21.69	25.86	27.05	22.85	16.78	11.41	6.94	15.18
	最高平均	9.70	9.70	13.12	19.27	23.73	26.42	30.07	31.71	27.76	22.64	16.91	11.75	20.23
	最低平均	0.65	0.34	3.20	7.77	11.74	16.96	21.63	22.38	17.93	10.93	5.91	2.14	10.13
	平均較差	9.05	9.36	9.92	11.50	11.99	9.40	8.44	9.38	9.83	11.71	11.00	9.61	10.10
溫	最高ノ極	20.0	20.5	25.0	28.0	31.2	35.0	37.0	36.5	35.5	29.5	29.0	23.0	37.0
	最低ノ極	-7.6	-7.0	-6.0	-2.0	2.0	7.0	10.0	13.5	7.0	1.2	-4.0	-7.5	-7.6
	靜 穩	6.9	6.0	5.4	5.3	4.9	6.7	4.6	2.9	6.3	7.1	6.1	7.3	6.95
風	疾風已上	2.8	3.1	2.3	2.9	2.4	2.7	2.8	2.9	1.4	1.3	1.9	2.3	2.88
	最多方向	N	N	N	N	E	S	S	S	N	N	N	N	N
	天 氣	快 晴	4.8	4.4	5.4	8.2	8.3	4.1	4.5	5.8	4.0	7.2	7.2	4.9
日 數	晴	7.4	6.5	9.2	6.4	7.8	6.4	10.8	13.7	10.8	10.2	8.7	7.4	10.53
	曇	13.8	12.4	12.0	10.7	11.3	13.0	12.3	8.8	11.2	10.3	10.2	12.6	13.86
	雨 雪	4.9	5.0	4.6	4.8	3.5	6.7	3.6	2.7	3.8	3.2	4.0	6.2	5.32
雲量平均	6.9	7.3	6.4	6.1	5.7	7.4	6.8	5.6	6.5	6.0	6.1	6.8	6.5	
降 水	總 量	71.7	84.7	124.9	159.4	134.9	309.9	271.4	142.4	181.0	117.9	65.3	76.8	1747.3
	一日最多	50.0	62.5	75.0	151.2	11.70	14.00	190.5	138.5	183.0	110.1	43.0	44.0	190.5
	降水日數	13.7	13.3	13.1	12.5	11.0	15.1	13.6	11.3	11.0	10.2	9.7	13.8	148.3

四 北部地方の氣候風土

北部は北東部に類して、冬季の氣候は概して不良であつて、雪霰が屢々降り凍烈なる氣候を現はすが、斯の如き天候は一年間に四五日を算ふるに過ぎない、而も一日の平均気温は、最寒のときでも二三度を降ることは稀で、其氷点已下を示すことは隔年に一日ある位であるから、概ね氣候は温暖である、特に海岸地方は気温の變化も寡ない、天氣は四、五月及十、十一月が最も可良で月の半數已上は晴天である、此方面は縣下でも最も雨の寡ない處であつて、蘆屋の如きは年量千四百七十耗余で、中部の山地に較べると漸く其半量を示すに過ぎない、風力は割合に強くないが、湿度は稍々大い方であるから、夏は多少蒸暑く感ずることがある、此方面は本縣の首都福岡を中心として、近來は著しき發展を遂げ交通、衛生、教育等の諸設備が充分に完全して居るから、居住民は年々殖る一方である、各都市の狀況は左の如くである

I 福岡 (大正十二年二月調)

福岡は本縣の首都であつて、昔から殷賑な都會であるが近年に至り商工業が目覺しい發展を遂げ、附近の町村を合併して人口十三萬餘を有する、一大都市を形成するに至つた、市街は博多灣に沿ふて東西に長く延長して居るから、多少海洋の支配を享けて氣候は頗る温和で、天氣も亦概ね良好である、之を東京に較べると平均氣温に於て約一度高く、京阪地方に較べると約半度の過高であつて、凡そ神戸に比敵して居る、而し冬季に於ける北西の寒風は可なり強烈で、雪霰交々降り随分凜烈なる氣候を現はすこともあるが、一日の平均氣温が氷点已下に降ることは一年間纔に一二日に過ぎない、概ね五度已上を保ち其變化も亦内陸地方の如く、急劇でないから冬季と雖も、左程凌ぎ難いことはない夏季は又最高氣温三十五六度に昇ることあるも、其季間が短かく盛夏の候と雖も炎暑を覺ゆるは日中數時間に過ぎない、朝夕は概ね冷涼であるから、南國の様に永く苦熱に困む様なことはない、天氣は梅雨季を除くの外は永く降り續く様なことはない、特に五月十月及十一月は最も好晴天が多く、風は四季を通じて晝は北西風が優勢で、夜は南東風が卓越して吹くが風力は極めて弱い、平均風速度は三米四である、雨は年量が千六百耗で四月、六月及九月が雨期になつて居るが、甚しく偏倚つた降り方をしない、又降水日数は百六十九日が多い方でも寡ない方でもない

福岡市は其中央を流る、那珂川に依つて之を二部に別ち、東部を博多、西部を福岡と稱して居る、博多部は昔からの商業地で、今も尙ほ大厦高樓が相櫛比し大會社や大商店は大概此地に在つて、商業が殷賑を極めて居る、福岡部は所謂昔士の士族屋敷で、今も尙ほ勤め人が多く居住して居る、近頃附近の住吉、警固、西新等の諸町村を合併して漸次大福岡市を建設しつつあるが、是等の郊外地には多少工場が散在して居る、全市は一體に飲料水が頗る劣悪な處であつて清淨な井水は只那珂川に沿ひたる地方と、郊外に接したる一部の地方に限られて居る、夫れも極めて表面の地下水が川底の砂礫に依つて、濾過せられて出て來たに過ぎないから、水田に灌漑せらるゝか又は少し降雨が續くと、井戸は一杯に満水し且つ濁ると云ふ有様であるから、水質などは甚だ良くない、殊に博多の海邊寄りの方は潮水を混すること甚しく、用水にさへ使ふことが出来な位であるから、飲料水を購入して居た處もある、福岡部は一般に之よりは少

し良いが海岸部は矢張り汚濁して居て、概ね濾過して使用して居る様の有様で飲料水に對しては頗る不自由な土地であつた夫れで數年前より室見川の上流から引水して水道を布設中であつたが、此程漸く落成し大正十二年度から、一般に給水することになつたから、全市の飲料水問題も漸く解決を告げた譯である福岡市並に其近郊は、土地が稍々濕潤で地下水が甚だ高ひ、夫れで蔬菜類の栽培にも不適當と云はれて居る位であるが、市街は頗る清潔で掃除其他衛生、消毒等の世話方も能く行き届いて居る、道路も大通りは近頃「コンクリート」又は「アスファルト」等で堅く固め、撒水なども善くするから塵埃等の飛散することもなく清淨である、夫れに晝間は絶へず海風が吹き込んで來て、夜間は又陸風が之を吹き送つて行くから、空氣の沈滞する様なことは少しもない、加ふるに工場は概ね市の東方郊外に在つて、而も大工場と稱すべき程のものもないから、市中が煤煙で穢される様なことはない、先づ健康な都會地と言つてよい

此地方には格別地方病とか、風土病とか稱すべき程の疾病はないが、矢張疫病と窒扶斯とは此地方にも多發する、其他の傳染病も決して寡ないとは言へない然れども既に上水道も布設せられ、防疫、衛生等の機關も段々完備するに至つたから是等の病氣も漸次減少するであらう、其上福岡には最高學府である、醫科大學の醫院があつて、大家や名醫が澤山に居つて地方の爲めにも夫れ々世話を焼いて呉れるから、如何なる傳染病が流行して來ても敢て恐るゝ處はない、然し人家は稠密で交通が頻繁であるから、海陸兩方面から種々の微菌や病菌が輸入され易いから、充分に警戒して居る必要はある

教育機關の全備して居ることは、又當市の誇りとする處である、小中學は勿論高等學校から大學まで、一都市に全備して居る處は本邦でも稀である、九州大學は今は醫工農の三部であるが、近く法文兩科も設立せられ、漸次総合大學の實を擧げらるゝ筈である、専門學校程度の學校としては、福岡高等學校が大正十一年に開設せられ、私立西南學院専門部も同年度に新設せられたが、其外には私立齒科醫學専門學校がある、中學校は縣立中學修猷館、全福岡中學校及西南學院中學部の三校であるが、其他男子師範、女子師範、商、工、農の各中等學校がある、女子教育機關も亦頗る能く完備し、縣私立を合せて完全なる高等女學校が五校ある、即ち縣立福岡高等女學校、筑紫高等女學校、九州高等女學校

福岡女學校、今泉高等女學校等である、大正十二年度よりは縣立女子専門學校が開設せられ、女子教育上更に一段の光彩を添へることになつた、其他の特種學校は、盲啞學校、舞鶴商業學校、農業補習學校、高等豫備學校、鎮西簿記學校、筑紫簿記學校、福岡學館、福岡裁縫女學校、備田女學校、福岡女子職業學校、代用感化院等がある其外圖書館、高等小學校及尋常小學校が十二校ある、近來又夜間中學校の開設を見んとして居るが、之れは晝間實業に従事せる青年の爲めには、一大福音である

交通機關としては、市内を縦貫せる福博電車と市の周圍を圍擁せる、博軌電車を始め、自動車、人力車の立場は市内の至る處にある、博多驛は市の東端に在つて九州一の大驛で、毎日の昇降客は數千人に上り、發着毎には頗ぶる雜沓を極めて居る、隣接せる吉塚驛は篠栗線及參宮線の起点で、又市の西端には糸島郡可布里町より來れる輕便軌道が連絡して居る、尙ほ北九州鐵道は福岡一唐津間を、九州鐵道は福岡一久留米間を運轉する等が目下土工中であるが、大正十二年中には一部の開通を見るであらう、此外九軌電車は折尾より、灣鐵線は香椎より、孰れも延長して福岡に來り、近く鐵道網を實現せんとして居る、海の方では博多灣内の主要地間を往復する小蒸汽船があつて、毎日二三回發着を爲し其外壹岐對馬に通ふ定期船もある、此頃は又釜山、博多間を往復する汽船が出來て、隔日に發着して居るから海の方に向つても、段々發展して交通上何の不便もない

娛樂場としては、大小劇場寄せ席常設活動寫眞館等は澤山にある、遊園地としては東、西兩公園があり少し離れては名島、愛宕山等の名勝地もある、又市外箱崎には官幣大社箱崎宮があり、香椎には官幣大社香椎宮がある、共に靈驗殿かなる本邦有數の大社である、市内には住吉神社、光雲神社、備田神社、水鏡天満宮等あつて日々參詣人が絶へない
今福岡に於ける累年の氣象成績を示すと次の通りである

福 岡 の 氣 象

種 別	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
氣	平 均	5.35	5.19	8.14	12.99	17.09	23.46	26.04	26.74	22.76	16.72	11.73	7.13	15.15
	最高平均	9.70	9.58	12.96	18.31	22.66	26.01	29.70	30.98	27.25	22.32	17.00	11.57	19.84
	最低平均	1.00	0.79	3.82	7.67	11.52	17.39	21.98	22.50	18.27	11.12	6.46	2.68	10.39
	平均較差	8.70	8.79	9.64	10.64	11.14	86.2	7.72	8.48	8.98	11.20	1054	9.89	9.45
温	最高ノ極	21.5	24.3	24.0	2.87	30.9	35.1	36.2	35.6	34.7	29.9	28.2	21.6	36.2
	最低ノ極	-6.0	-5.3	-4.0	-0.8	1.4	8.0	14.3	16.1	7.9	2.9	-0.8	-5.4	-6.0
風	靜 穩	1.3	1.0	0.6	0.8	0.7	0.5	0.8	0.6	1.4	1.5	0.9	0.9	11.0
	疾風已上	7.8	7.1	3.0	7.5	6.9	4.9	5.4	3.2	3.3	3.5	7.0	10.0	74.6
	最多風向	SE	SE	SE	SE	SE	SE	SE	SE	SE	SE	SE	SE	SE
天 氣	快 晴	5.7	5.0	6.5	3.1	8.3	4.8	5.9	9.6	7.6	9.6	9.4	6.4	86.9
	晴	4.8	4.6	5.5	4.0	4.3	3.2	6.8	6.6	5.4	5.6	5.1	4.4	60.3
	日 曇	15.2	12.8	13.7	12.2	13.9	15.0	14.2	11.2	12.6	12.2	11.8	14.3	15.91
	雨 雪	5.3	5.7	5.4	5.7	4.3	7.3	4.0	3.3	4.4	3.5	3.8	5.9	58.6
平均雲量		7.3	7.4	7.0	6.6	6.1	7.8	6.9	6.7	6.6	5.8	6.0	7.1	6.7
降 水	總 量	67.6	78.7	110.9	139.1	120.9	25.12	256.0	140.0	181.9	107.1	68.1	81.6	1903.1
	一日最多	47.1	49.2	50.9	125.0	93.5	135.3	158.0	175.6	132.9	108.2	41.8	44.6	475.6
	降水日數	16.4	14.9	15.5	13.4	11.8	15.6	14.2	11.8	14.0	11.6	12.3	17.4	168.9

2 太 宰 府 (大正十一年一月調)

太宰府町は官幣中社太宰府神社の鎮座せる處であつて、秀靈なる寶満山を負ひ土地高燥であるから、海岸地方の如く氣候が温和ではないが、南部の山地の如く變化が著しくはない、氣温の較差は四、五及十、十一月の四ヶ月は十度已上に及ぶも嚴寒一二月の候と盛夏七八月の頃は八度餘に過ぎぬ、年の平均氣温は十五度五であつて、管内各地の平均價に相當してゐる、而して最高低氣温の極も左迄卓越した値を現はさない、風は三四及十月を除くの外は、南東風が優勢であるが、風力は格別強くもない、疾風已上の日數は靜穩日數より遙に寡ない天氣は割合に可良であつて、降水は山地としては量及日數共に寡ない方である、人口は太宰府町は四千百十一人、之より半里を距つる二日市は五千四十九人ある、此兩町は相互に關聯して昔から、其榮枯盛衰を共にしてゐる、蓋し二日市町は鹿兒島本線二日市驛の所在地で、有名なる武蔵温泉は驛を去る僅に四五町の處にある、且つ同地は甘木方面に通する軌道の發着點で、南北交通の要衝に當つてゐるから、旅客の往來頻繁で北九州では著名な驛である、二日市と太宰

府間には軌道車が在つて、汽車の發着毎に運轉してゐるから、一日二十四回の往復を爲し、甘木方面へは一日十數回の運轉を爲してゐる、其外自動車四十臺あつて、太宰府、二日市間を往復し人力車は七十三輛あつて、自動車と共に驛前に客を俟つてゐる

飲料水は全部堀井戸を用ひてゐるが、深さは三間位で水質は最も良好である、従て傳染病患者は割合に僅少であるが、腸室扶斯の如きは毎月二三名の新患者がある、疫痢は此地方にも多く、夏季六月乃至九月には三十名内外ある、赤痢及實布埜利亞の如きも亦點發する、各町に避病院が在つて是等の患者を收容してゐる、開業醫は二日市町に二十六人、太宰府町に七人ある元來太宰府町は土地が高燥で、多少の傾斜を爲してゐるから、雨水の排泄が容易で汚水の沈滯する様の事は寡ないから、蚊類の發生なども甚だ少なく健康地であるが、二日市は之に較へると稍々低濕で、井水の如きも大に劣つてゐる

此附近には名所舊跡が多く、官幣中社太宰府神社を始め全内山村には官幣小社竈門神社があつて、參詣人は四季絶へない、特に春秋二季には頗る雜沓する附近に榎寺、都府樓趾、水城の跡、天拜山等の舊蹟がある、二日市に隣接せる武藏温泉は俗に湯町と稱し、清潔なる温泉宿が二十八軒あつて、各戸に浴室の設けがある、別に共同浴場もある孰れも湧出量が多く、温度は普通は四十度内外であるが五十一度に及ぶものもあつて、四時入浴に適す而して夏季は一般に湯の温度高く、湯量も亦多ひが冬季は低温で湧出量も亦寡なく、三分の一に減する處もある、然れども湧水期に於ても其湧出量が一分間四斗を下らない、最も少ない處でも一分間五斗に減する處はない、主要なる効能は火傷、腫物及一般皮膚病である

太宰府町には古より、設備の完全なる旅館が多く、現時十四軒を算へる概ね料理店を兼業してゐる、町内に定劇場、王突場各一ヶ所ある産物としては參詣土産として種々の物を販賣してゐるが、此土地の特産物としては、天拜羊羹、「コボレ梅」位のものである、物價は福岡附近に較べて大差がない、人氣は温良であつて犯罪事件等は甚だ寡ない

主なる官署としては、警察署、郵便局、町役場等であつて電話は二日市が六〇太宰府が三〇位ある、兩地共に實業補習學校と高等小學校がある、工場としては山十製絲場(従業人約千人)土屋製絲場等がある

今太宰府の累年氣象表を次に掲げる

太宰府の氣象

種別	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
氣	平均	5.26	5.25	8.59	13.66	17.99	22.25	26.07	27.24	23.34	17.13	11.87	7.08	15.48
	最高平均	9.31	9.62	13.49	19.02	23.67	26.77	30.27	31.57	28.06	22.56	17.63	11.37	20.28
	最低平均	1.20	0.88	3.69	8.30	12.30	17.72	21.87	22.90	18.12	11.66	6.83	2.79	10.73
	平均較差	8.11	8.74	9.80	10.72	11.37	9.05	8.40	8.67	19.44	10.90	10.80	8.58	9.55
温	最高ノ極	20.0	23.5	24.5	28.0	32.0	35.5	37.5	37.0	34.4	31.1	28.4	21.0	3.75
	最低ノ極	-6.0	-6.5	-5.0	-0.6	4.0	8.8	14.0	15.5	8.0	1.5	-1.0	-6.5	-6.5
風	靜 穩	3.5	2.5	2.5	1.8	2.2	2.6	1.3	1.7	4.4	3.4	2.5	2.6	31.0
	疾風已上	2.6	2.1	2.1	0.9	1.1	1.8	0.6	1.2	0.7	0.7	1.3	2.1	17.2
	最多方向	SE	SE	NW	NW	SE	SE	SE	SE	SE	NW	SE	SE	SE
天	快 晴	5.0	5.7	5.4	7.5	8.3	4.6	5.9	8.8	5.9	8.6	8.7	6.4	80.6
	晴	7.3	5.3	7.4	6.8	7.5	5.9	8.7	11.9	8.0	9.1	6.5	6.4	91.4
	曇	13.1	12.2	13.5	11.0	12.1	14.3	12.8	8.6	12.0	10.4	11.4	13.7	145.1
	雨 雪	5.6	5.1	4.5	4.6	3.0	5.2	3.6	1.8	3.9	2.9	3.2	4.6	48.0
平均雲量		6.8	7.0	6.7	5.7	5.6	7.4	6.3	5.3	6.5	5.9	6.2	6.6	6.3
降 水	總 量	64.8	74.7	11.72	139.7	124.6	314.0	274.4	135.7	178.2	108.5	67.5	76.5	1675.8
	一日最多	37.4	58.0	47.0	106.3	129.6	18.30	169.2	100.7	180.2	137.0	41.5	42.5	183.0
	降水日數	14.0	12.6	14.0	12.1	10.7	15.3	13.8	10.2	12.3	10.2	10.5	14.5	150.2

3 前 原 (大正十一年十月調)

前原町は雷山脈と可也山との中間に在つて、人口二千餘を有する小郡である氣候は北海岸では最も可良なる地方であるが、冬季の北西風は可なり強く福岡邊と餘り變りがない、而し氣温は福岡に較べると半度程も高ひ、即ち平均氣温は十五度七、最高の平均は二十度三、又最低の平均は十一度二であつて、孰れも福岡よりは〇度五乃至〇度八の高温である、全地は地勢の関係上風は概ね西風が卓越して吹くが、只秋季に於てのみ東風が稍々優勢である、又風力は冬季に於て最も強く、九月及七月は甚だ弱い天氣は南部地方には及ばないが、好晴の日は百七十五日を算へ、北部地方の内では最も良好な部である、降水量は千五百八十六耗で著しく寡量であるが最多日量は二百九十八耗で、縣下では八屋に亞ひでの最多量である

前原は土地が多少高臺を爲してゐるから、井水は孰れも良好であつて、濾過せずに其儘飲料に供することが出来る、其中でも縣道を界として南の方は殊に可

瓦であるが、北の方は稍々不良である、井水の深さは三間位で土地は全部赤土である、近頃は一般に「ポンプ」を使用する様になつたから、悪疫流行の際なども危険の度が大き減して来た

斯の如く土地が高燥で水質も良ひから、特種の疾病などはないが、此處でも矢張腸室扶斯患者は多く赤痢、疫痢などの患者も少なくない、其外十二指腸蟲の患者も可なりあるを以て見ると、腸胃の疾患が多い様である、町内には傳染病院が一ヶ所あるが、開業醫は四人、齒科醫二人、産婆三人ある看護婦は福岡より招聘することゝなつてゐる

交通方面では姪濱、加布里間を往復する軌道車が、町の南側を通して毎五十分間に發着してゐる、此處から福岡方面に出るには軌道で姪濱に行き、夫より電車に乗り換ゆると一時間半で達する、近き内には全部電車に変更せらるゝであらう、自動車は五臺あつて唐津及福岡に通つてゐる、此處から唐津へは一時間足らずで行ける、此外北九州鐵道が今正に工事中であるから、一二年の後には全通するであろう、人力車は停留所附近の立場に十四五輛ある

産物は米、麥を主とし養蠶業も中々盛んである、梨、蜜柑、葡萄等の果物も澤山に出来る、木材は縣外までも搬出せられる、當郡は北九州では水産業の最も隆盛なる地方であるが、夫れは豊富なる玄海灘の漁場を控へてゐるからである、鰯、鯖等の魚獲は殊に多い

官公署は郡役所、警察署、稅務署、郵便局等であるが學校には縣立糸島中學校郡立農學校、實科高等女學校、私立糸島育英豫備學校、全糸島裁縫專修女學校及圖書館、高等小學校等がある町民は概ね土着の人で、他より移住して来たものはないから最も質朴であるが、物價は逐々騰貴して福岡と餘り變らない、遊覽地としては、著名なる芥屋大門は此處から三里許り距たる處にあるから、遊覽船を浮べて其地に遊ぶものが寡くない

今前原の氣象を表示すると次の通りである

前原の氣象

種別	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
氣	平均	5.97	5.72	8.72	13.74	17.88	22.03	26.24	27.11	23.38	17.50	12.51	73.4	156.8
	最高平均	9.93	9.87	13.11	18.78	23.38	26.91	30.33	31.88	27.84	22.46	17.29	11.71	20.21
	最低平均	2.02	1.56	4.33	8.71	12.37	17.57	22.15	22.54	18.92	12.54	7.74	3.60	11.17
	平均較差	7.91	8.31	8.78	10.07	11.01	9.34	8.18	9.34	8.92	9.92	9.55	8.11	9.12
温	最高ノ極	20.2	21.5	25.0	29.0	33.0	35.4	37.5	37.5	35.0	28.5	28.8	22.1	37.5
	最低ノ極	-7.0	-7.2	-3.1	0.0	2.0	8.0	13.5	16.0	9.5	3.5	0.0	-4.0	-7.2
風	靜穩	3.5	3.8	3.0	3.1	5.0	4.6	3.8	2.9	3.6	2.7	4.5	4.3	44.8
	疾風以上	3.3	3.0	3.3	2.6	2.1	1.8	1.6	1.7	1.4	1.8	2.7	2.8	28.4
	最多方向	W	W	W	W	W	W	W	E	NE	E	E	W	W
天	快晴	8.5	3.4	4.7	6.2	7.2	3.5	3.7	5.5	4.6	5.9	5.3	3.7	57.1
	晴	8.1	7.8	9.6	8.6	9.1	7.5	12.2	14.5	9.8	11.5	10.5	8.7	117.9
	曇	14.9	12.5	12.2	10.1	11.4	12.9	11.1	8.4	11.6	10.7	11.3	14.5	141.6
	雨 雪	4.5	4.6	4.6	5.0	3.5	6.2	4.0	2.8	4.0	2.9	2.9	4.1	49.1
平均雲量	7.2	7.1	6.7	6.3	6.0	7.5	6.6	5.7	6.6	6.2	6.5	6.9	6.6	
降水	總量	73.0	81.4	114.8	132.9	104.7	26.37	223.5	130.9	193.0	111.6	72.1	84.0	1585.6
	一日最多	54.2	60.0	52.6	76.0	80.0	195.0	156.1	298.1	154.5	116.5	50.0	60.5	298.1
	降水日數	14.3	13.0	14.0	12.9	11.2	15.1	13.4	10.0	13.1	11.4	10.8	14.1	153.3

五 筑紫平原地方の氣候風土

筑紫平原は内陸地方に屬するから、氣候の變化は矢張著しく、氣温の較差は大であるが、風が弱いから寒暖の變化を感ずることが軽い、夫れで夏は可なり蒸暑く、最高温度は三十九度に昇つたことがある、雷雨の發生は頗る頻繁で落雷の多いことは、南部地方に譲らない、且つ朝倉山地は本縣中では雨の最も多い處であつて、平地は筑後川の汎濫に依つて水害を蒙むることが夥しい、冬は又比較的低温で甘木では氷點下九度に降つたことがある、従て嚴霜を結ぶことが多く、初霜は小石原の山地では、十月の下旬に現はれるが平地では、十一月中旬で約半ヶ月の違ひがある、終霜も亦平地は四月上旬であるが、山地は五月上旬で一ヶ月程の違ひがある、只此地方では風の弱いことが特徴で、靜穩日數の多いことは甘木が第一である、各地の概況は次の通りである

1 甘 木 (大正十一年六月調)

甘木町は筑紫平原の東北部に在つて、東に古所山脈を負ひ、西は展望廣濶にして遠く肥前の山嶽を望んでゐる、現時戸數千二百九戸、人口六千八百六人を有

する小都會であるが、半里餘を距つる山間の秋月町は、戸數九百餘、人口四千九十一人ある、甘木は既に内陸氣候の支配下に在るから、朝夕の氣温の變化は可なり大であつて極めて温和であるとは言へない、然し風力が弱ひから、冬季の嚴寒も爲めに大に緩和せらるゝの思ひがある、平均氣温は十五度五であつて、福岡とは大差がないが、最高の極は三十九度に上り、又最低の極は氷點下九度に降つたことがあつて變化が甚大である、風は頗る弱く一年間の三分の一は靜謐な日がある、風向は秋と初春とは北風が優勢で、又夏季は南西風が卓越して吹くが、他の月は西風が多い、降水總量は千八百五耗で、最多日量は百六十六耗で共に内陸地方としては多い方ではない、日數も亦割合に寡ない

甘木は土地平坦で、井戸の深さは三間位であるが、井水は一體に清澄であつて其儘飲料に供することが出来る、而し極めて地表に近ひ水脈から湧出してゐるから、降水の多少に依つて増減が著しい、少し旱天が打續くと井水は半減することになる、下水路は不完全ではあるが、一部分には設備せられた處がある、傳染病は腸管扶斯及疫病が稍々多ひが、固より北九州の工業都市に較べると非常に寡ない、全町には避病院が一ヶ所あつて患者を收容してゐる、開業醫四人齒科醫四人の外産婆が六人ある、別に看護婦會の設けはないから、患家の必要に應じ、久留米又は福岡から招聘するのである

交通機關としては、朝倉軌道が二日市驛前に起り、甘木を経て筑後川沿岸の惠蘇ノ宿に至つてゐるものと、一方秋月に起り當町を経て田主丸町に至つて、筑後軌道に連絡する兩筑軌道とがある、其外三井電車は久留米より北野を経て甘木の西部に來り、又中央軌道は甘木より約半里を距つる、朝倉軌道の停留所である新町に起り太刀洗飛行場を経て、松崎に至つてゐるから交通は至便である其外人力車四輛、自働車三臺あつて二日市、甘木間を熾に往來してゐる、娛樂場としては劇場一ヶ所、玉突場一ヶ所ある、宿屋、料理屋は各六ヶ所、飲食店十九ヶ所あるが、炭坑地方の如く遊興に多額の金を浪費するものが少ないから、人氣は一般に質朴温健である、只舊七月の盆踊は全地唯一の歡樂として、遠近より來集するもの夥しく、市内は頗る雜沓を極む

特産物は甘木椀、甘木縞、「タオル」米、生糸、材木、木炭、梨等である此地附近は縣下でも養蠶業の最も隆盛なる地方であるから、春蠶期などには繭の賣買熾にして、商業も頗る活氣を呈する、名所、舊蹟としては秋月に垂祐神社がある

藩祖黒田長興公を祀つてある、甘木には南部の豪士甘木遠江守安長の建立した安長寺がある、又秋月の奥に聳ゆる古處山は海拔七百五十米あつて、舊城趾が存在してゐる、町を去る西方一里許りの處に太刀洗飛行場がある、近時は其設備も殆ど完成に近く、好晴の日には爆音高く數個の飛行機が飛翔してゐる主なる官公衙は郡役所、警察署、稅務署、區裁判所、郵便局等であつて、學校は町内に縣立中學校、全高等女學校、實業補習學校、圖書館、及高等小學校があり、一里餘を距つる三奈木村には、郡立農學校がある、甘木に於ける累年の氣象統計表は次の通りである

甘木の氣象

種別	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
氣	平均	5.30	5.18	8.47	13.93	17.93	22.14	26.19	27.30	23.34	17.34	11.79	6.78	15.47
	最高平均	9.46	9.72	13.31	19.66	23.78	26.96	30.57	32.00	28.14	22.93	17.05	11.24	20.40
	最低平均	1.13	0.63	3.62	8.20	12.07	17.31	21.84	22.59	18.52	11.77	6.61	2.31	10.55
	平均較差	8.33	9.09	9.69	11.46	11.71	9.65	8.73	9.41	9.62	11.16	10.44	8.93	9.85
温	最高ノ極	22.0	22.5	25.0	29.0	33.6	34.4	39.0	37.0	35.2	3.14	2.80	23.0	39.0
	最低ノ極	-7.5	-6.7	-4.9	-2.2	3.2	8.4	10.5	11.4	7.5	05	-2.0	-9.0	-9.0
風	靜穩	13.9	11.6	11.0	10.5	7.8	9.6	9.0	6.6	10.4	11.7	12.4	13.4	127.9
	疾風已上	2.2	1.8	2.2	1.9	1.8	2.0	1.2	2.1	1.4	1.2	1.4	1.8	21.0
	最多方向	W	N	N	W	W	SW	SW	SW	N	N	N	W	W
天	快晴	5.5	5.4	6.0	6.8	6.3	3.4	5.7	7.1	5.6	8.4	8.4	6.2	74.8
	晴	7.9	6.4	7.4	7.3	8.7	6.8	9.0	12.6	9.2	9.2	8.3	8.1	100.6
	曇	13.8	12.5	12.7	10.4	12.2	12.4	12.0	8.3	11.3	10.0	10.5	12.3	133.4
	雨	3.8	4.2	5.0	5.5	3.8	7.4	4.2	3.0	4.3	3.4	2.8	4.4	51.5
平均雲量	6.6	6.8	6.7	6.4	6.7	7.6	6.5	5.4	6.2	5.7	5.6	6.4	6.4	
降水	總量	67.1	74.2	12.18	180.6	140.2	325.7	307.4	155.7	189.7	114.5	66.8	64.9	1808.6
	一日最多	43.8	43.8	60.0	166.0	104.0	130.0	163.0	98.0	155.0	111.9	64.0	42.0	166.0
	降水日數	13.4	11.6	14.2	13.2	11.0	15.0	14.0	11.2	12.4	10.0	10.0	13.5	149.9

2 吉井 (大正十年十二月調)

吉井町は概して清燥なる土地であつて、廣袤〇、一四方里を有し、總戸數六百五十戸、人口三千六百七十四人で移動が甚だ寡なく、増加率も亦小さい、人口密度は一町平方に對し百七十六人に當つてゐる、氣候は温和な方で筑後の海岸地方を除くの外は、内陸地方の内では温度の高い方である、平均氣温は十五度七で在つて、甘木地方よりは〇度三高い、又最高の平均は二十度五、最低の平均

は十度九で較差は九度七を示し、海岸地方には及ばないが、内陸地方の内では小さい方である、特に最低気温の水点已下に降りし日数は、北部の海岸地方を除くの外は、最も僅少で二十八日を示し、附近に較べ五日已上も寡ない之を以て見ても同地方の温暖なことが知れる、然し風は餘り弱くはない、夫れは筑後川に沿ふて上下する地方風が可なり強いからである、夫れ故に風向は略ぼ一定し六七月だけは西風が卓越して吹くが、其他は東風が優勢である、降水量は千八百二十六耗で北部の海岸よりは一割已上も多いが、最多日量は百六十五耗で割合に強雨に乏しい

此地は土地が總て乾燥してゐて、濕潤な處は甚だ寡ない、井水は全部濾過せずして飲料に供することが出来る、特に南部の山手の方は最も佳良で、中部及西部も共に良好であるが、只北部のみは稍々不良な處がある、夫でも飲料に適しない様なものはない、本縣の各都市の内では、太宰府町と共に井水の最も可良なる地方である、井水の深さは南部は二間乃至二間半であるが、北部は浅く一間半位である、従て上下の水道の設備はないが、傳染病其他の疾病は寡ない方である、然れども當地には七日病と稱し「ワイル」氏病に類似した様な一種の熱性病がある、格別危険性のものでなく、大概一週間位で治癒し、死亡率も十%位に過ぎないが、年に依りては可なり猖獗を極めることがあるから注意すべきである、此外寒心に堪へないのは結核患者が割合に多いことで、同地は氣候風土の上から考へると格別該患者の頻發すべき原因を認めないが、衛生思想の幼稚な舊都會であるから、不注意の結果遺傳性のものが多い様である、之に亞いで注意すべきは腸室扶斯病で在つて、上流地方で汚物の洗滌などしたが爲め、下流地方で猖獗を極めた例は珍らしくない、大正九年の如きは浮羽郡全體で九十五名の患者があつて、死亡率が二十三%に上つた、其他疫病等も少なくない町内には醫師七人、齒科醫三人、産婆三人ある、看護婦は醫院に在勤せるものが二人あるが、一般の患家に雇傭せんとするには、久留米又は福岡より招聘するの外はない、人力車は八輛、營業自動車一臺ある、交通機關としては、三井軌道が町の中央を貫通して、毎二十分間に發着してゐるから、殆ど乗合馬車等の必要はない、同町は從來は物價が極めて低廉であつたが、近來は急に騰貴して久留米地方などと殆ど差違がないが、北九州の都市に較べると、尙ほ多少の廉價であることは勿論である、格別特産物もない、只果實類には割合に佳良なるものを産出するが、他に輸出する程の産額はない、

主なる官衙は郡役所、警察署、區裁判所、郵便局等で學校は縣立浮羽中學校、同高等女學校、浮羽學館、實業補習學校、圖書館及高等小學校等があるが一里半を距つる田主丸には浮羽工業學校がある

今吉井町に於ける累年の氣象成績表を掲ぐるご次の通りである

吉井の氣象

種別	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
氣	平均	5.37	5.49	9.00	14.34	18.31	22.46	26.42	27.25	23.46	17.46	12.03	7.12	15.73
	最高平均	9.66	9.96	13.82	19.93	24.25	27.17	30.72	31.89	28.01	22.66	17.16	11.47	20.52
	最低平均	1.08	1.02	4.17	8.53	12.36	17.74	22.12	22.61	18.91	12.26	6.89	2.75	10.87
	平均較差	8.58	8.94	9.65	11.40	11.89	9.43	8.60	9.28	9.10	10.40	10.27	8.72	9.65
温	最高ノ極	21.5	22.5	24.5	29.4	33.5	34.0	37.0	37.7	35.5	31.0	29.0	24.0	37.7
	最低ノ極	-7.0	-7.7	-4.6	-1.0	4.0	7.0	11.0	16.0	9.0	3.0	-1.0	-5.5	-7.7
風	靜穩	6.4	6.0	5.2	4.6	3.9	4.4	4.2	4.7	5.2	4.8	4.8	6.0	60.2
	疾風已上	1.5	1.6	1.4	1.3	1.1	1.2	1.3	1.2	0.7	1.0	1.0	1.2	14.5
	最多風向	E	E	E	E	E	W	W	E	E	E	E	E	E
天氣日數	快晴	5.4	4.7	5.9	7.3	7.4	3.5	5.7	8.1	6.2	8.7	8.5	6.5	77.9
	晴	7.2	6.2	7.1	7.2	7.8	6.3	8.9	12.0	8.6	8.5	7.8	7.0	94.6
	曇	14.6	12.5	12.7	9.9	11.6	13.0	11.6	8.8	11.0	10.1	10.8	13.7	140.3
	雨雪	3.8	4.7	5.3	5.6	4.4	7.4	4.7	2.0	4.0	3.7	3.0	3.8	52.4
平均雲量		6.8	7.0	6.8	6.3	6.2	7.8	6.6	5.4	6.0	5.9	5.8	6.4	6.4
降水	總量	69.1	74.4	137.1	176.3	134.3	333.1	307.9	159.1	190.5	114.4	67.1	62.9	1826.2
	一日最多	47.5	60.0	56.5	126.0	132.0	138.5	165.3	155.0	160.0	130.5	48.6	39.5	165.3
	降水日數	12.9	11.7	13.81	13.7	11.6	17.4	15.0	11.8	12.9	10.2	9.3	12.1	152.4

3 久留米 (大正十一年一月調)

久留米市は筑紫平野の中央に在つて、筑後川に沿ひたる古き都會である、其廣袤は東西一里七町、南北一里六町餘で、面積が〇、六七方里を有す、人口は大正九年末の調査に據ると、男二萬四千〇五十六人、女二萬五千五百三十五人で合計四萬九千五百九十一人である、同市は本縣中では大川町と共に気温の最も高い地方であつて、筑後方面では氣候の温和な地方である、而し一方には高良山脈を控へ、他方には九千部山脈が在つて其中間に當つてゐるから、氣流の變化が稍々著しく天氣が割合に變り易くして不時の降雨などがある、平均気温は十六度一で在つて、福岡に較べると一度高い又最高の平均は二十度〇、最低の平均は十一度三で較差は九度七を示してゐる、風は六七兩月だけは南西風が卓越して吹くが、其他の月は總て北東風が優勢である、同市は地勢の關係上風向

は殆ど此兩方位に限られてゐる、天氣は冬季に於て割合に良好で在つて、北部に較べると著しく曇雨天が寡ない、降水量は年量千八百八十九耗であつて、平地では頗る多量の部である、而し最多日量は多くない、又降水日數は大川に亞いで寡ない地方である

此地は肥沃なる筑紫平野を控へ、近傍には繁華なる小都邑散在し、交通頗る便利で九州本線の貫通するの外、西方には田主丸、吉井を経て大分縣日田町に達する筑後軌道があり、南には筑後川に沿ふて、若津に至る大川鐵道がある、又北には福島より當市を経て北野より甘木に達する三井電車が在つて、陸上の交通が至便なるが上に、兩筑の國境に沿ふて流るゝ巨川筑後川に依つて、運搬せらるゝ貨物の數も亦大である、此市には特に大なる製作工場もないから、炭坑地方の如く急激なる發展を遂げざる換りに、又財界の不況に遭遇するも甚しき打撃を蒙むること尠く、逐次堅實なる發達を爲しつゝありて、街衢井然として高廈相櫛比し商業般賑にして、如何なる驕奢品と雖も之を辨せざることはない。井水が極めて良好で在つて、唯其中に數個の稍々良好ならざるものがある、而し濾過すると大抵飲用に供することが出来る、特に中部及東部は最も清澄であつて、南部及西部は稍々劣つてゐる、而して井水の深さは區々であつて、相隣接せるものでも水質及水深等の全く相異なつてゐるものがある、然し東部は概して深く、平均五間位で之に亞ぐは北部及中部で在つて三間位である、南部及西部は最も淺く二間位である、市内に於ける井戸の總數は六千五百七十三ヶ所で在つて、其中堀抜井戸は五百七十一ヶ所、石疊み瓦圍ひの井戸二千三百九十ヶ所、土管又は「コンクリート」井戸三千二百五十九ヶ所、桶側井戸三百五十三ヶ所で、構造の稍々完全な井戸は約半數位ある、此外直接に河水又は泉水を使用せるものか百二十餘戸ある、斯く水質は大部分良好であるが、構造の不完全なる井戸が多いから、下水道の不完備と相俟つて、衛生上寒心すべきものがある特に莊島方面は下水道が最も不完全で、概ね只自然の吸込みの儘に放置してあるから、土地も著しく濕潤で飲料水なども不良であるから、腸室扶斯病の如きも多い様である、只中部より西部地方に亘つては一部分下水道の布設せられた處があつて、排水なども割合に可良であるから、土地も能く乾燥してゐて傳染病なども少ない様である、近頃此地にも上水道の布設を目論んでゐる久留米市近傍には吸血病と稱する一種の恐るべき地方病（地方病の條参照）があるが其他には格別の風土病もなく、疫痢の如きは割合に僅少で赤痢も亦少

なく一般の傳染病は多い方ではない、市立久留米病院は設備其他も頗る能く整つて、日々治を乞ふものが甚だ多い、同院には隔離室の設けがあつて、傳染病患者を收容してゐる、又市村聯合の傳染病院もある、醫師數は合計七十二人であつて、市民六百九十人に對し醫師一人ある割合である、其外齒科醫十六人ある市内に看護婦會が三ヶ所あつて、看護婦六十四名を置き、附近町村よりの招聘に應じ夫々派遣してゐる

交通機關としては、前記の汽車軌道車及電車の外人力車三百三輛、營業自動車十臺ありて、東西に驅馳してゐる、市民が概ね土着の人で工場等に雇はれたる少數の人を除くの外は、他から移住して來た人は甚だ寡ない、同市は昔から物價が低廉で生活が簡易であるとの定評があつたが、近頃は稍々驕奢の風を生じ往時に較べると多少誠實を欠ぐの恐れがある、物價は漸次昂騰して來たが、北九州の工業都市に較べると固より低廉且つ豊富である、然し非港灣都市としては飲食店料理店又は遊藝人等が割合に多い、近來は水陸の便大に拓け福岡、若津方面との交通も次第に頻繁となり、久大線、九州鐵道等の開通も近きに在るから前途は益々有望なる都會である

主なる公官衙は市役所、警察署、郵便局、稅務署、區裁判所等で學校は縣立明善中學校、同高等女學校、久留米商業學校、商業補習學校、豫備學校、家政女學校、鐘紡女學校、仁惠女學校、實習女學校、圖書館、高等尋常小學校及幼稚園等がある

今累年の氣象表を掲げるに次の通りである

久留米の氣象

種別	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
氣	平均	5.82	5.78	9.26	14.61	18.80	22.75	26.70	27.83	24.13	18.12	12.51	7.45	16.14
	最高平均	10.37	10.44	14.28	20.11	24.55	27.16	30.71	32.16	28.67	23.65	17.90	12.12	21.01
	最低平均	1.27	1.11	4.23	9.11	13.04	18.31	22.69	23.50	19.60	12.60	7.11	2.77	11.28
	平均較差	9.10	9.33	10.05	11.00	11.51	8.85	8.02	8.66	9.07	11.05	10.79	9.35	9.73
温	最高ノ極	23.0	24.5	26.0	29.0	33.0	34.5	38.0	37.0	3.60	32.0	29.5	25.0	38.0
	最低ノ極	-6.0	-5.0	-3.5	0.0	1.0	10.5	14.0	17.0	9.0	2.0	-1.0	-6.0	-5.0
風	靜穩	5.4	5.3	4.6	3.6	4.5	3.6	2.0	2.8	3.8	4.7	5.8	6.2	53.1
	疾風以上	0.6	0.7	0.6	0.8	0.0	0.6	0.8	0.6	0.6	0.5	0.2	0.3	6.3
	最多風向	NE	NE	NE	NE	NE	SW	SW	NE	NE	NE	NE	NE	NE
天	快晴	6.7	6.1	6.7	8.6	9.0	4.6	6.3	9.8	7.2	9.9	10.5	7.7	93.1
	晴	7.0	5.3	6.4	5.6	6.1	5.3	9.8	10.9	8.1	8.3	6.8	6.4	85.5
	曇	15.2	14.4	14.4	10.7	12.6	13.6	11.6	8.4	11.0	10.0	11.1	14.2	147.2
	雨	2.1	2.5	3.5	5.1	3.3	6.4	4.1	1.9	3.7	2.7	1.6	2.8	39.7
平均雲量	6.4	6.7	6.5	6.1	5.9	7.5	6.4	4.9	5.8	5.3	5.3	6.2	6.1	
降	總量	61.8	79.4	134.9	200.9	152.7	355.0	315.5	198.2	184.8	113.8	64.8	57.2	1839.4
	一日最多	46.5	72.7	62.1	174.3	105.4	164.8	178.5	139.2	175.3	101.8	51.8	42.4	178.5
	降水日數	9.7	10.0	12.1	12.3	10.3	15.2	13.7	10.2	11.0	8.2	7.2	10.2	130.1

六 南部地方の氣候風土

南部地方は氣温最も高く、特に冬季は温暖であつて、北部に較べると下着一枚位の違ひがあるとは一般人の唱へる處であるが、實際の氣温の上から見ると、約一度の差があるから、温暖なるには違ひないが氣候の變化は決して小さくはない、東部などに較べると餘程大きい、氣温が高いから左程に感じない、特に内陸の福島などは、一日中の氣温の變化が平均十度以上にも及んで居る、而して天氣は一年中を通じて可良な方で、晴天日數は他の方面に較べると、一割以上も多い而して降水日數の寡ない割合に、降水量が多いから比較的強い雨が降る譯である、此方面も冬季の北風は可なり強いが、雪霰が割合に寡ないから峻烈なる氣候を現はすことは稀である、一體に地方が豊かで産業なども隆盛であるから、着實に家業を営むものが多く、氣風も自から温健であつて誠に住み心地がよい、只最南端の大牟田は三池炭山の在る處で、石炭工業が盛んな處であるから、別に一區劃を爲して居る、各都市に於ける氣候風土は次の通りである

I 福島 (大正十一年六月調)

福島町は九州本線羽犬塚驛を去る西方約二里、矢部川に近ひ平坦地で氣候は温暖であるが、氣温の變化は可なり大きくて平均較差は十度を超へてゐる、唯に一年中の變化が大なる斗りではなく、一日中の變化も亦大であつて、晝間に不時の高低を現はすことが多い、即ち平均氣温は十五度七で、北部地方よりは半度以上も高ひが、較差は五月と十月は十二度近くにも及ぶ、風は地勢の關係上一般には強くなくて、靜穩日數が甚だ多い、而して北風は多少屏風山脈で遮らるゝから、冬季に於ても格別峻烈でなく夏季は概ね南西風か又は西風である、天氣は南部の海岸地方程には良好ではないが、中部及北部の孰れよりも可良である、降水量は千七百九十七耗で、久留米、山川等よりも却て寡量であるが、降水日數は稍々多い

現住戸數は九百八十で、人口は五千六百二十ある、土地も多少高燥であるから飲料水は一體に良好であつて、總て井水を其儘使用してゐる、近頃は「ポンプ」を使用するものが次第に増加したのは甚だ喜ぶべきことである、此地方も下水路が甚だ不完全で、改良の必要を認めてゐるが、未だ實施の運びに至らない而して傳染病は一般に寡なく、腸窒扶斯赤痢等の如きも發患者甚だ稀であるが、疫病は割合に多い、町内に病院二ヶ所、醫師六人ある外に町立避病院がある、人氣は頗る質朴で犯罪事件等は極めて寡ない

交通は頗る便利である、福島軌道は羽犬塚驛より福島を経て山内村に至り、黒木軌道と連絡して黒木町に達してゐる、一方三井電車は現今は、久留米方面より來り福島に終つてゐるが、更に延長して兼松村に至るの計畫である、營業自動車は七臺あつて、羽犬塚、邊春間の定期往復を爲し又羽犬塚、船小屋間も汽車の發着毎に運轉してゐる、乗合馬車は山内星野間又は黒木、矢部間を往復して軌道車との連絡を保ち、人力車は十四輛あつて停留場附近に客待してゐる、特産物は種類が甚だ多い、其中著名なるは提灯、傘、蠟燭、茶、紙、産、佛壇、緋、縞、米、木材、竹、竹皮、木炭、蜜柑等であつて其他の林産物、農産物等も、豊富に産出し住民は一般に有福である、紙は製紙會社工場等も多く、都紙、東洋紙などを抄出して支那地方に嫌に輸出せられ、茶は琉球方面に搬出せらる、此地方に於て斯く特産物の多きは、勿論土地が非常に豊沃であるが上に、氣候が温暖であつて、霜雪等の害も寡なく、格別の肥料を施さないでも、相當の收穫を得られる

からである

羽犬塚驛を去る南方約一里の處に船小屋鑛泉がある、矢部川の畔に在りて川を距て、長田鑛泉場に對してゐる、旅舎の數三十戸、浴場ニヶ所ある其中の一ヶ所は設備等も稍々整ひ、四時の風光も絶佳であつて、遠來の遊客を迎ふるに適してゐる、泉質は炭酸を含有する炭酸鐵泉で、色は透明で酸性反應を呈し味は酸味を帯び鐵の臭氣がある、胃腸病貧血病等の諸症に偉効ありと稱して、四季浴客が絶へない又螢、鮎の名所として其名近隣に洽く夏季は特に遊客が多い福島公園は町の西端小高き處に在つて、郡經營に屬す傍に議事堂、公會堂、武徳殿等があつて散策に適する處である、其外水田天滿宮、八幡宮は共に縣社で參詣人が多い、官公衙は郡役所、警察署、區裁判所、稅務署、郵便局等で公衆電話は六十を算え、學校は縣立八女中學校、全八女工業學校は羽犬塚町に八女高等女學校、郡立農學校は福島町に在つて、共に設備が充分に整つてゐる、其他圖書館、高等小學校等がある

福島に於ける累年氣象表は次の通りである

福島の氣象

種別		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
氣	平均	5.59	5.51	8.80	14.20	18.20	22.45	26.30	27.15	23.62	17.52	12.19	6.99	15.71
	最高平均	10.24	10.36	13.96	19.90	24.14	27.08	30.44	32.01	28.56	23.34	17.71	12.02	20.81
	最低平均	0.93	0.66	3.64	8.49	12.25	17.81	22.15	22.30	186.8	11.69	6.65	2.35	10.63
	平均較差	9.31	9.70	10.32	11.41	11.89	9.27	8.29	9.71	9.88	11.65	11.06	9.67	10.18
温	最高ノ極	23.7	23.5	24.0	28.6	33.5	35.0	37.3	36.4	35.5	31.5	28.5	23.8	37.3
	最低ノ極	-8.5	-6.0	-4.5	-1.4	1.4	9.2	13.5	16.2	9.0	1.5	-1.5	-6.0	-8.5
風	靜 穩	3.9	6.3	5.3	3.6	4.7	4.3	3.6	2.7	5.3	5.8	6.9	8.6	61.0
	疾風已上	3.4	2.4	3.5	2.9	2.5	3.3	2.5	1.8	2.4	2.6	1.9	1.9	31.1
	最多風向	N	W	N	NE	W	SW	SW	SW	N	N	N	E.N	N
天 氣	快 晴	5.9	5.8	5.5	7.2	6.9	3.7	4.4	6.4	6.4	9.0	9.7	7.6	78.5
	晴	9.7	8.0	9.2	8.0	9.6	8.4	12.4	14.7	9.9	10.2	8.4	8.0	116.4
	曇	12.6	11.1	11.6	9.4	10.6	11.5	10.0	7.6	9.0	8.1	9.6	11.8	122.9
	雨 雪	2.8	3.4	4.8	5.4	3.9	6.5	4.2	2.3	4.8	3.6	2.0	3.7	47.6
平均雲量		6.4	6.6	6.5	6.4	6.2	7.5	6.6	5.4	6.0	5.6	5.4	6.0	6.2
降 水	總 量	58.6	68.7	126.6	181.8	146.6	357.7	290.5	158.2	177.2	111.8	64.2	55.2	1796.5
	一日最多	33.0	50.5	54.0	175.3	144.0	164.6	182.4	180.0	151.0	115.2	59.4	40.0	182.4
	降水日數	10.7	9.5	12.8	13.0	11.2	16.3	14.2	11.3	12.6	9.8	8.2	10.7	140.3

2 大 川 (大正十一年十月調)

大川町は若津、榎津の兩市街よりなる、中間花宗川に依つて境せられ、昔から指物の製造地として名高い、現時も尙ほ多少の發展をなしてゐる、氣候は本縣中では最も温暖であつて、平均氣温は十六度一を示し、久留米に等しいが一般の天氣は久留米よりは遙に良好である、然し海岸に近い割合には較差が大きい、即ち最高の平均は二十一度二、最低の平均は十一度一であつて、較差は十度一に及んでゐる而し温暖で天氣が良ひから、氣候の變化を感ずることが割合に軽い此地方は風が弱く靜穩の日が多いが、冬季は尙ほ北風が卓越して吹くから相當に寒い天氣は八、十、兩月は二十日已上も好晴を見るが、六月は最も悪しく半分已上曇雨天であることは北部と異なる、而し冬期に於ける雨雪の天氣は北部よりは著しく寡なく、纔に其三分の一である、降水量は千六百五十二耗で南部の海岸でも寡量な方で最多日量も亦小さく、日數も多くない

現在戸數は二千二百七十七戸、人口一萬二千百五十六人であるが、此地の井水の劣悪なることは實に驚く計りで、飲用に供し得るものは殆どなく、纔に雜用に使用するに止まつてゐる、故に飲料水は總て筑後川及花宗川の水を汲取つて來て蓄へて居る、該川は有明灣と等しく川底は全く泥土を以て埋められて居るから、河水は著しく濁濁を帯び、普通では到底飲料には供せられないが、上げ汐に移りたる當初は少しも塩分を含まず、全くの眞水にて且つ清潔なれば、此際汲み來つて各戸備付の大瓶に蓄水し、數日間を放置すると自然に泥砂が沈澱して清淨なる料水を得るに至るもので、此汲取りの時期は毎月二回の小潮の時であつて、舊曆の七八日又は二十四五日の頃で、潮が一二分上げて來た處を汲取り、普通の家は一二石入り、家族の多き家は六七石入りの瓶を二個地中深く埋め込み、口を密閉して貯へるのである、夫れ故に最初河水を汲取つてより、使用し終るまでには、數句を要することもあるが、何等の變質をも見ず其儘煮沸もせずして飲料に供するものである、夫でも格別の害を認めない様である、元來筑後川の水は水源が遠く、數十里の間を流れて來たものであるから、水質が大に軟和で花宗川の水に較べると、飲料としては遙に良好である、假令濾過して使用し得る井水が在つても、其水質は到底河水に及ばないから、今は殆ど使用するものがない、然し傳染病流行の際は河水の使用を禁止せらるゝから、其時は

止を得ず雨水を使用するけれども、炊事用としては最も劣等である
 斯の如く大川町は一般に河水を使用するが、附近町村では灌漑水を飲料に供するから腸窒扶斯患者が最も多く、恐らく其比率に於ては縣下第一であらうと思はれる、現に大正九年に於て虎列刺病の流行した原因の如きも、上流に汚物を投じて河水を汚穢したるより來つたもので、夏季に際しては當地は常に一般から多少危険視せられてゐる傾がある、之を以て近時上水道布設の議が大に喧傳せられ近く上流の莊島附近より、通水せしめんと計畫中である然れども腸窒扶斯已外の傳染病は格別猖獗でなく、疫痢、赤痢の如きも毎年三四人を出すに過ぎない、其他地方病又は風土病と稱する程のものはない、町内に傳染病院一ヶ所あつて町醫に囑託してある、開業醫は合計十四人あつて、住民八百六十八人に付一人の割合である、産婆は五人齒科醫は四人ある、看護婦會の設けはないが、久留米地方との連絡があるから、容易に招聘することが出来る町民は概ね土着の人であるから、質朴柔順であるが教育程度と、衛生思想は低ひ方である

交通機關は九州本線の主要驛の一たる、羽犬塚との間には三瀬軌道があつて、頻繁に往復し隣の柳河町との間には柳河軌道がある、又久留米市との間には大川鐵道があつて、互に連絡して交通上至便である、其外渡船にて筑後川を涉り肥前諸富に出づれば、坦路佐賀市に通ずる馬鐵がある、營業自動車は本町より柳河、羽犬塚又は佐賀市間を往復するものが三臺ある、人力車は三十六輛あつて常に停留場に客を俟つてゐる、當町には自轉車の使用者最も多く、現今では三千八百四輪あつて、現戸數より二割餘多く住民三人に對し一輪を有する割合である

産物の内最も有名なのは指物類で、特に水車は名聲各府縣に轟けるも、近時動力器具の變遷に仍り餘り縣外には輸出されない、却て箆筒、長持、建物の類の販路が廣く九州一圓に及んでゐる、其他の主要産物としては米、産、酒、「セメント」鐵器類である、大なる工場としては深川造船所、セメント工場位であるが隣村莊島は酒造業が熾んで、縣下では有數の産額を示してゐる、之れは筑後川の水が軟質で醸造に適すると、米質が佳良であるからである、其他工場法適用の工場が十七ヶ所、非適用工場が百六十八ヶ所ある、

遊園地としては有名なる、縣社風浪神社の後方に大川町公園を設計中である町民は極めて質素で信仰心が強く、輕佻な風はないが、近時は追々物價も騰貴し

久留米地方と大差なきのみか、却て高價なる物品があつて往時の如く、生活が簡易でない、官公衙としては郡役所、警察署、稅務署、郵便局等があり學校には縣立高等女學校、技藝女學校、實業補習學校、高等小學校等がある此地方には昔から精神病者が稍々多い様で、現時でも覺知六人、未覺知七十五人ある酒精の害や同族間血縁の因襲等にも依るであろうが、柳河に訓盲院が設置せられて在ると同意味に於て喜ばしいことではない、今大川に於ける累年の氣象表は次の通りである

大川の氣象

種別	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
氣	平均	5.84	5.79	9.31	14.63	18.81	22.66	26.58	27.73	24.28	17.99	12.42	17.49	16.14
	最高平均	10.54	10.54	14.40	20.38	24.63	27.15	30.64	32.52	29.20	23.56	18.04	12.38	21.17
	最低平均	1.14	1.04	4.20	8.87	12.99	18.17	22.25	22.94	19.37	12.42	6.78	2.60	11.09
	平均較差	9.40	9.50	10.20	11.51	11.64	8.98	8.12	9.58	9.83	11.14	11.26	9.78	10.08
溫	最高ノ極	22.0	23.5	25.6	29.5	33.5	34.2	38.1	38.5	37.2	31.6	29.0	24.1	38.5
	最低ノ極	-7.5	-6.1	-4.1	-1.6	2.0	9.5	11.5	7.6	10.0	3.0	-1.2	-6.4	-7.5
風	靜 穩	6.2	4.8	3.3	2.6	3.1	3.0	2.2	2.1	3.8	4.3	6.0	4.5	46.5
	疾風已上	1.8	2.8	2.9	1.5	1.3	2.5	3.0	2.2	2.0	1.7	1.5	1.1	24.3
	最多方向	N	N	N	N	N	S	S	S	N	N	N	N	N
天	快 晴	7.3	6.3	6.6	8.0	8.2	4.9	6.3	7.6	7.0	9.4	9.6	8.2	89.4
	晴	10.1	8.9	9.5	8.2	9.0	8.1	11.3	13.9	10.8	10.5	8.7	8.4	117.6
	曇	11.4	10.0	9.5	8.7	10.1	9.7	8.6	7.4	8.4	7.9	8.2	11.3	111.2
	雨 露	2.2	3.1	5.0	5.1	3.6	7.1	4.8	2.1	3.8	3.0	3.4	2.9	46.1
平均雲量		5.7	6.1	5.9	5.7	5.6	6.8	5.8	4.8	5.6	5.0	5.0	5.7	5.6
降 水	總 量	52.4	65.7	121.7	169.7	141.9	328.1	259.3	130.7	166.2	106.5	60.1	49.6	1651.9
	一日最多	33.5	64.0	75.0	140.0	122.3	170.9	175.0	108.3	165.8	100.0	54.4	37.5	175.0
	降水日數	8.8	8.8	11.5	11.6	10.5	15.1	12.6	9.0	10.7	8.8	7.1	8.9	123.7

3 柳 河 (大正十一年五月調)

此地方は氣候が頗る良好で、本縣内では最も溫暖なる地方に屬してゐる、特に冬季は表日本の氣候に類似し、割合に晴朗なる天氣が多く、北海岸の如く陰曇なる天氣が打續かないから大變凌ぎ易い地方である、然し風は此地方でも冬は北風が可なり強い、其他の季節でも概ね北風が優勢であるが、夏季六七月の頃は南風が卓越してゐる、氣温の平均は十五度九で在つて、大川及久留米に亞ひでの高温である、而して最高の平均は二十度七、最低の平均は十一度〇で較差

は九度七を示し、内陸地方よりは半度已上も小さく、気温の變化は激しくない降水量は合計千七百三十二耗で寡ない方であるが、最多日量は二百七十耗で可なりの強雨がある

全町附近には堀が多く、頗る低濕なる土地であるから、地下纜に一尺五寸位掘ると、既に地下水が滲出する位で、一般の井水の深さは一間半内外である、若し深きに過ぐると潮水を混するから使用に耐へない、斯る土地であるから井水は、概ね不良であつて飲料には供せられない、飲料水には總て矢部川の上流より導びて來た、小川の水を煮沸して用ひてゐる、只町の北部に於てのみ稍々可長な處がある、接続せる三橋村は割合に井水が良好である、柳河町は幅員約四十五町歩あつて、總戸數千二百七十七戸、人口六千二百四十人であるから、其密度は一町平方に對し百三十九人に當つてゐる、尙ほ隣接町村なる城内村、三橋村を加へると柳河町附近に住居せるものが約一萬人ある

此地方には特種疾病と稱すべきものはないが、濕潤な土地であるから黄痘病「ワイル」氏病等が多いが、腸室扶斯や實布埜利亞等の如きは他の地方に較べると著しく寡なく、脚氣患者も多くはない、之れは全地が健康地であると云ふでは無く、飲料水が極めて劣悪であるが爲め、昔から町民は一度煮沸した水でなければ、決して口に入れない習慣であるから、従て傳染病などに感染することが寡ない譯である、未だ上下水道の布設を見ないのは、此地方の缺点である醫師は町内に開業せるものが七名あり、外に齒科醫が三人あるが、避病院は三橋村に一ヶ所あるのみである、全地は前記せるが如く附近に沼澤が多いから、夏季に當り蚊類の發生の多いことは有名である

柳河は舊立花藩の城下で在るから住民は一般に質朴で、毫も輕佻浮薄なる處はないが、然し又進取的の氣象には少し乏しい様にも見へる、頗る住ひ易い土地であるが、近來は物價も段々高騰し、生活も漸次複雑なるに至つたが、北九州の炭坑地に較べると尙ほ著しく廉價である、傳染病は最近八年間に總數三十九人の患者が在つて、内死亡者が十五人であるから、死亡率は三十八%を示してゐる

交通機關としては、慶島本線の矢部川驛より柳河町に運轉する軌道車が在つて一日四十八回の往復を爲し、又柳河大川町間には一日七回の發着を爲す軌道車がある、其外自働車が七臺あつて柳河一矢部川間、柳河一沖の端間、柳河一中

島間及柳河一極津間を運轉してゐる、人力車は町内に約六十輛あつて、軌道の乗降客を送迎してゐるから些の不便をも感じない、特種産物としては米、菫、貝類の鎌詰（アケ巻、タイラキ、赤貝等）製練、瓦等であつて、鮎、鰻、鮒、鯉等の淡水魚類も多い、娛樂場としては定劇場一ヶ所、玉突場一軒ある、其外宿屋十軒、十四軒ある、集會宴會等は可なり熾んな地方であるが、費用は低廉であつて活は誠に易い處である

遊園地としては町の入口に高島公園がある、規模宏大で構内には櫻樹數百株あつて花季になると人出が多い、園内に縣社三柱神社がある、藩祖立花宗茂公を祭つてある處で又招魂社がある、隣村城内村には柳河城趾があつて眺望に富んでゐる、近時設備を整へ公園地と爲す計畫がある、主なる官公衙は郡役所、警察署、區裁判所、郵便局、土木管區出張所等で學校には縣立中學傳習館、全高等女學校、訓盲院、杉森女藝學校、圖書館及高等小學校等がある

柳河の累年氣象は左表に示す通りである

柳 河 の 氣 象

種 別	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
氣	平 均	5.45	5.53	9.17	14.59	18.54	22.45	26.49	27.53	23.95	17.83	12.01	7.04	15.88
	最高平均	10.05	10.10	14.07	20.02	23.94	26.81	30.74	31.98	28.51	22.92	17.23	11.63	20.67
	最低平均	0.84	0.96	4.26	9.14	13.12	18.08	22.24	23.49	19.38	11.07	6.79	24.4	10.98
	平均較差	9.21	9.14	9.81	10.88	10.82	8.73	8.50	8.49	9.13	11.85	10.44	9.19	9.69
溫	最高ノ極	21.0	21.5	22.5	29.3	32.0	34.9	37.5	38.5	35.0	30.6	29.5	24.1	38.5
	最低ノ極	-7.5	-5.5	-4.0	-1.0	4.0	10.3	15.0	16.1	9.0	2.7	-2.0	-5.9	-7.5
風	靜 穩	5.3	4.1	3.6	3.8	3.4	3.5	3.0	3.6	2.9	4.5	6.7	6.6	51.0
	疾風已上	1.2	1.8	2.0	1.4	0.7	1.7	1.9	1.5	1.2	1.7	0.9	1.0	17.0
	最多風向	N	N	N	N	N	S	S	S	N	N	N	N	N
天 氣	快 晴	8.4	7.5	7.8	8.4	9.8	5.1	8.2	10.8	7.9	10.5	11.4	9.2	105.0
	晴	8.8	8.0	8.4	7.5	8.1	6.5	9.3	11.1	9.2	9.5	7.4	7.8	101.6
	曇	11.3	9.5	10.6	9.0	9.2	11.3	9.7	7.0	8.7	7.8	9.4	11.2	114.7
	雨 雪	2.4	3.2	4.2	5.2	3.9	7.1	3.8	2.0	4.1	3.2	1.8	2.7	43.6
平均雲量	5.5	5.7	5.9	5.7	5.3	6.9	5.7	4.4	5.5	5.1	4.8	5.5	5.5	
降 水	總 量	60.1	72.4	124.2	183.0	137.7	340.4	263.7	140.9	175.1	118.1	63.1	53.7	1732.4
	一日最多	36.0	60.0	61.4	135.0	135.0	270.0	180.2	98.6	175.0	109.0	56.0	45.0	270.0
	降水日數	10.6	10.1	12.5	12.7	10.4	15.3	13.0	9.6	11.7	8.9	8.4	10.8	134.0

4 大牟田 (大正十一年一月調)

大牟田市は極めて近時の發展に係り、市政の施行を見たのは大正六年のことであるから、都市としては尙ほ未だ貧弱なるを免れない、本街路は相當の般賑を極め、高莊なる建築物などもあるが、裏通りは尙ほ陋穢である同市は有明海に臨めるが爲め氣候は極めて温和で且つ其變化に乏しい、隣町四つ山の觀測に依つて見ると、平均氣温は十五度九で福岡よりは〇度八高い、平均較差は八度三で在つて、筑後方面の都市の内では氣温の變化の最も小さい處である、夫れで最高氣温は割合に高くなく、又最低氣温は割合に低くない、風は矢張北風が強い只七八兩月に限り南風の多いのは筑後地方の恒例である、天氣は快晴が割合に寡なく曇天が多いが、而し雨雪の天氣は格別多くはない、降水總量は千六百四十八耗であつて、南部地方では最も僅少な部分に屬する、而し最多日量は二百三十耗で可なりの強雨が降る、之れは南洋方面から來る颱風の影響に依つたものである

當市は石炭工業を以て市の生命としてゐる、現時七萬餘の住民があるが、其中直接に三井炭礦に關係のあるものが、三萬五千乃至四萬人位あるを以て見るも中産階級已下のものゝ多いことが知れる、同市も亦炭坑地方の例に洩れず、井水が頗る不良であつて、殆ど飲料に供し得べきものはない

只西方松原だけは僅に井水を飲用し得るに止まつてゐる、其外市内に二三ヶ所長水の湧き出す處があつて、之を三井礦業所から毎日市内に配布して市民に供給してゐたが、市當局でも上水道の布設の必要を感じ、先年來之れが計畫を樹て工事進行中であつたが、十年度末に至り漸く第一期工事を完成し市内八分通りには給水するに至つた、然れども下水道は未だ計畫するに至らない、特に築港方面は下水の排泄が最も不完全で、總て地中に吸込ましてゐるから、井水は特に不良であつて、年中傳染病が點發する状態である、大正十年度の如きは腸室扶斯患者が續發したが、之れは同年の洪水の爲め汚物が流出して病毒を蔓延せしめたが爲めであるが、殆ど平年の二倍以上に及んだ、斯く衛生思想などは幼稚であつて、設備なども整ふてゐないに拘はらず、保健状態には格別の缺陷を見ないのは、矢張氣候の優良なる爲めであらう

市附近には化學工場が在つて、煤煙や塵埃は非常に多いから、呼吸器系統の疾

患には甚だ有害であると考へられるに、事實は全く之に反して結核性の患者は甚だ寡ない、且つ住民の大部分は他より移住したるもので、土着の人は極めて僅少であるから、人情も自然に浮薄である様に考へらるゝが、同市内に移住するものは北九州の炭坑地とは稍々其趣を異にし、多くは附近の町村より來つたもので、三池、山門二郡を始め熊本縣玉名、鹿本郡等より轉住したる農民が多いから、割合に質朴であつて人氣が悪くない、夫れで工業都市であるに拘はらず犯罪事件等も甚だ寡なく、特に傷害事件などは北九州の都市に較べると總に其十分一にも足りない

傳染病としては腸室扶斯が最も多く、毎年百名以上の患者を出して居る、之に亞くは實布埜利亞赤痢等である、病院は市立傳染病院が一ヶ所ある、三井礦業所醫局は設備が完全してゐるが、同所は専ら同社の關係者に限り、診療に従事することになつてゐる、醫師數は合計六十一人で在つて、千二百八十人に對し醫士一人ある割合である、看護婦會は二ヶ所に在つて、看護婦三十三人常勤してゐる交通機關としては、九州本線の大牟田驛は市の南西部に在る、驛前には營業自働車二臺ありて驛と三川町間を往復し、又乗合馬車が四臺ありて市と三川町及三池町間を往復してゐる、人力車數は三百六輛ある、公衆電話は大牟田市が三百四十八番、三川町は百十九番に及んでゐる、主なる工場としては三井染料同亞鉛「ヨークス」工場、同硫酸工場、同染料試験所、電氣化學工場、發電所、鐘紡三池支工場、三井製作所等がある附近の炭坑は宮浦七浦宮ノ原大浦等である、遊園地としては、驛附近に笹林公園があり、常設遊戯場も五ヶ所ある、物産としては石炭並に之に附帶する染料、窒素肥料、耐火煉瓦等である

主要なる官衙は市役所、郡役所、警察署、稅務署、郵便局、稅關、縣立三池中學校及高等女學校、三井工業學校、實業補習學校、豫備學校、大牟田工業學校、加賀田裁縫女學校、家政女學校及高等小學校等がある其外三井三池礦業所、鐘紡支店、三池銀行等は主なる會社である

今大牟田市に近き三川町四つ山に於ける氣象表を示すと次の通りである

四ッ山の氣象

種別	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
氣	平均	5.47	5.62	8.82	14.21	18.19	22.33	26.61	27.58	24.02	18.04	12.27	7.16	15.86
	最高平均	9.57	9.79	13.04	18.82	23.00	25.80	30.27	31.31	28.00	22.44	16.79	11.33	20.01
	最低平均	1.36	1.45	4.59	9.60	13.38	18.82	22.96	23.86	20.08	13.64	7.74	2.99	11.71
	平均較差	8.21	8.34	8.45	9.22	9.62	6.98	7.31	7.45	7.92	8.80	9.05	8.34	8.30
温	最高ノ極	19.0	20.7	21.7	28.0	30.0	33.2	37.1	36.0	34.9	28.3	28.2	24.4	37.1
	最低ノ極	-6.2	-5.2	-3.7	-0.5	4.4	9.5	15.5	17.6	10.3	4.2	-1.7	-5.1	-6.2
風	靜穩	5.6	4.9	2.5	1.5	1.6	1.8	1.0	1.1	1.6	3.4	4.9	4.4	34.3
	疾風已上	8.0	8.6	9.1	8.0	4.5	5.6	6.8	6.8	8.4	8.6	6.8	6.7	87.9
	最多風向	N	N	N	N	W	S	S	N	N	N	N	N	N
天氣	快晴	6.8	5.3	6.9	6.3	8.0	3.3	7.2	7.0	5.8	8.8	8.5	7.4	81.5
	晴	8.7	6.3	7.2	7.3	7.9	6.7	11.6	13.8	10.1	7.8	7.7	8.4	103.3
	日曇	13.3	13.9	13.5	12.3	12.5	11.9	8.6	8.3	7.8	11.3	11.7	13.7	141.1
	雨雪	2.2	2.7	3.4	4.2	2.5	8.0	3.7	1.9	4.3	3.2	2.2	1.8	39.9
平均雲量	6.2	9.9	6.6	6.5	6.1	7.9	5.8	5.5	6.6	6.0	6.0	6.3	6.4	
降水	總量	46.2	56.7	115.1	161.0	107.4	397.1	255.1	120.9	170.9	115.2	61.2	40.6	1647.5
	一日最多	30.6	52.7	547.1	64.8	112.0	230.5	171.7	112.7	189.5	92.2	76.0	32.5	230.5
	降水日數	10.0	8.7	18.1	12.6	9.0	18.5	12.3	10.1	12.8	9.6	8.6	8.8	132.3

福岡縣福岡測候所

福岡市下名島町五十四番地ノ二

福岡印刷株式會社

印刷者 大 限 龍 介

電話 六二番
振替 福岡一五〇〇番

大正十二年六月六日印刷
大正十二年六月八日發行

4519
F82

終